

5 宇陀市の民俗芸能にみる 歴史的風致

(1) はじめに

神仏に対し、供物を供える場面は、どの行事でも見ることができる。ところが、神仏の前で芸能・競技などを演じる事例となると、現在の宇陀市内では数えるほどしか残っていない。かつては、雨乞のため、先祖の霊を慰めるため、氏子の息災を願うため、娯楽的要素を含んだものなど、市内各地で様々な形の奉納芸能が見られた。

例えば、雨乞のための踊りでは、室生大野の^{かいじんじゃ}海神社で秋祭りに奉納される「いさめ踊り」、先祖の霊を慰める踊りとしては安産寺・宇太水分神社の盆踊りが知られている。五穀豊穡の感謝と無病息災を願う踊りとして龍口白山神社、龍穴神社の獅子神楽が挙げられ、娯楽的要素を含んだものとして阿紀神社の能が挙げられる。

こうした奉納芸能の歴史は、^{もんじょ}文書で確認できるものとして、後述する大野のいさめ踊り（大正2年の歌本）や、『御用部屋日記』に残る阿紀神社の献能、『宇太村風俗誌』（大正4年（1915）宇太村役場）による古市場の盆踊りがある。このほか、『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））には盆踊り、獅子舞に関する記録が収められており、少なくともそのころから行事が続いていることが確認できる。

現在でも良好な歴史的環境を舞台に繰り広げられるこれらの営みについて、以下のことについて述べる。

5-1 大野のいさめ踊りにまつわる歴史的風致

5-2 宇陀市の盆踊りにまつわる歴史的風致

5-3 宇陀市の獅子舞にまつわる歴史的風致

コラム 4 阿紀神社の神事能

5-1 大野のいさめ踊りに まつわる歴史的風致

(1) はじめに

室生大野は、宇陀市の東部に位置する集落で、青越え伊勢街道の宿場町として発展した。また、室生寺の北の玄関口として位置づけられており、大野寺を経由して、室生寺へ続く道が分岐していた。現在では近鉄室生口大野駅が置かれ、通勤客のほか、室生寺への観光客が往来する。

室生口大野駅から東南 100m の位置に大木に囲まれた森があり、そこに「海神社」が鎮座している。入口に石鳥居が設けられ、石段を登り切った平場に拝殿・能舞台・社務所が、更に石垣を積んで高くした位置に本殿が置かれている。

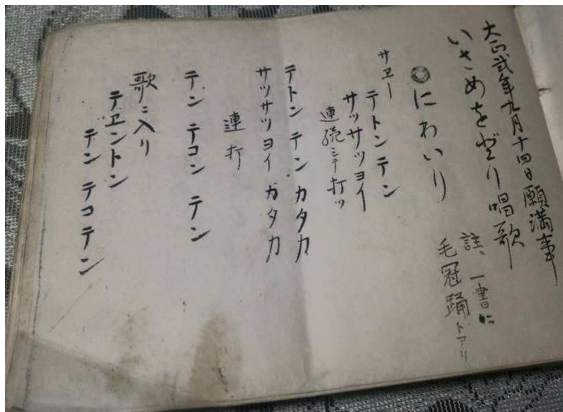
由緒は定かでないが、応永 3 年(1396)に三本松の海神社とともに、室生の龍穴神社から善女龍王を勧請して祀ったと伝わり、雨乞の神として知られている。

大野の海神社では、毎年の秋祭りで「いさめ踊り」が奉納されている。一般的には「勇^{いさ}み踊」「太鼓踊」「雨乞踊」と呼ばれているが、(大正 2 年(1913)『山本家文書』)の歌本に「いさめをどり」とあることから、大野では「いさみ」と言わず、「いさめ踊り」と呼んでいる³³。

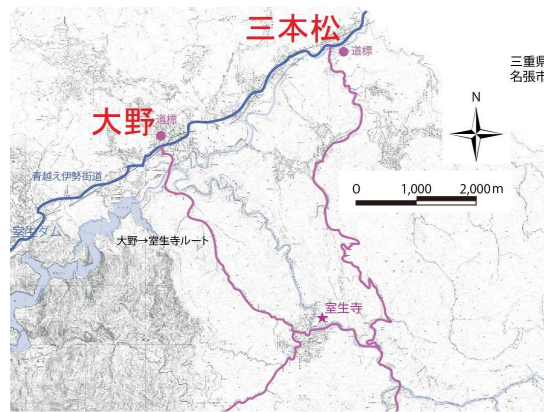
この踊りは、雨乞の願掛けや雨乞の願ほどこや、豊作祈願の満願や祈願成就のお礼として神社の神前で行われる踊りである。雨乞の際には、古大野岳(通称ダケ)へ松明を持って登り、火を焚いて雨雲を呼んだと伝わる。

かつては三本松の海神社でも「いさみ踊」があったが、昭和 41 年(1966)を最後に休止している。一方大野では、大正 2 年(1913)の雨乞のときに踊った人たちの指導を受けて踊りを継承した「大野いさめ踊り保存会」により、昭和 52 年(1977)から毎年秋祭りで神前奉納を行うようになり、今に至る。

³³ 同じ系統の踊りでも、伊賀側では「^{そうもくおどり}艸木踊」といい、奈良県添上郡・山辺郡・宇陀郡内は「^{いさ}勇み踊」という。『山辺郡誌』(大正 2～5 年(1913～1916)、奈良縣山邊郡教育會編)に「元禄九年八月二十日石上社ニ於テ大踊二回、勇踊二回、参籠二回、臨時祭ヲ行ヒ、大旱ヲ禱フ」と記されていることから、江戸時代中期には踊られていたとみられる。『地域社会の民俗学研究』(1987 年、岩井宏實 著)の「大和の太鼓踊り一覧」によると、奈良市大柳生の夜支布山口神社は「太鼓踊」、天理市新泉大和神社は「ユカタ踊」、奈良市都祁村吐山は「太鼓踊」、吉野郡国栖は「太鼓踊」、宇陀市室生三本松では「いさみ踊」と呼ぶ。



大正2年（1913）奉納時の唄本
※写真撮影および提供 小関吉浩氏



大野と三本松の位置関係

（2）建造物

【^{かいじんじや}海神社】三本松の海神社とともに、室生の龍穴神社から勧請されたと伝わる神社。境内地は1980坪あり、そこに本殿、拝殿、舞殿、社務所が並ぶ。いさめ踊りはこの神社を中心にして繰り上げられている。



海神社境内

【海神社本殿】県指定文化財（建造物）

森を背後に本殿が西に面して配置されており、三間社流造、檜皮葺き。正面屋根の両端に千鳥破風を設けている。建築年代は定かでないが、奈良県文化財指定説明によると、形式・手法からみて江戸初期頃と推定されている。



海神社本殿

【大野寺本堂】

宇陀川の畔に建つ古刹で、伊勢街道から室生寺へ向かう際の北の玄関口として位置づけられた寺。いさめ踊りでは、海神社へ戻る前に踊りを披露する場所になっている。雨乞で踊ったときも、必ず大野寺を経由していた。

本堂は方三間、入母屋造、棧瓦葺で、向拝虹梁上部とその木鼻に彫刻が施されている。境内に残る石碑によると、大正10年（1921）落成とある。



大野寺本堂

(3) 活動

【いさめ踊り】

大野のいさめ踊りは、かつては雨乞の踊りで、『室生村史』（昭和41年（1966）池田末則 編）によると大野と向湊の境目にそびえる古大野岳に登って火をおこし、松明を掲げた一行が、大八車に載せた太鼓をたたきながら下っていき、集落の要所で踊り、大野寺を経由し海神社まで練り歩いたという。

雨乞を必要とする状況が殆どなくなって久しいが、昭和55年（1980）に「大野いさめ踊り保存会」が結成され、大正2年（1913）の雨乞時に踊った人やそれを見ていた人から節回しや踊りの形を習い、海神社の秋祭にて奉納するようになった。

いさめ踊りは、現在、「庭入り」「お寺踊り」「屋敷踊り」「花見踊り」が伝わっており、保存会設立当初は大人だけで踊っていたが、数年後には踊りの伝承のため子供にも教えるようになり、この流れは現在も続いている。

踊りの稽古は9月半ばから始まる。大野は「上出」「下出」「緑川」「西垣^と内」「中山台」にわかれており、いさめ踊りは主に「上出」「下出」「緑川」の人が踊っている。唄い方は同じだが、上出とそれ以外では踊り方に微妙な違いがある。上出は安養寺に、下出・緑川は緑川集会所に集まって練習をする。秋祭りの少し前に海神社の長拝殿で合同練習を行い、本番の日を迎える。

いさめ踊りが奉納されるのは、秋祭の宵宮である。晴天時は海神社境内の砂利敷きの「にわ」で踊り、雨天時は長拝殿で踊る。大きな宮太鼓を横置きにし、唄に合わせて太鼓の裏に立ち御幣を持った心棒打ちが掛け声をかけ、4人の太鼓打ちが太鼓のまわりを時計回りに入れ替わって低い姿勢で太鼓を打つ。最初に全員で「庭入り」「いさめ踊り」を踊ったあと、子供たちによる「お寺踊り」が続き、踊り手は大人に替わる。

まずは上出により「屋敷踊り」が披露され、続いて下出・緑川により「花見踊り」が披露される。踊りの奉納が終わると、神事が執り行われ、続いて地域の女兒による浦安の舞が奉納されて宵宮は終わる。



寄進者を記した石碑



令和元年（2019）10月14日練習風景
（こどもいさめ）



2019年10月19日宵宮（大人いさめ）

翌日、秋祭では次頁の図のとおり、太鼓台が大野の集落内を回る。朝、海神社を出発し、下出→緑川→中山台を練り歩き、幾度か休憩をはさみ大野寺を経由し海神社へ戻って昼食をとる。午後からは、上出の集落をまわり、再び大野寺を経由して海神社へ戻る。ダケから徐々に下る午後の行程は、雨乞いをしていたころの行程とほぼ重なる。

（４）おわりに

現在では、基盤整備の充実や、天気予報による荒天等の備えができるようになったため、かつてのように干ばつや豪雨に苦しみ、天に祈りを捧げる機会はほぼなくなったとみられる。しかし、いったん途絶えるかに見えた雨乞の踊りである「いさめ踊り」は、地元有志によりその価値を見出されて復興され、現在では五穀豊穡の感謝を捧げる舞とともに、秋祭で奉納されるようになった。

毎年、９月半ばから秋祭りにかけて海神社境内や集会所で練り広げられる練習風景や、秋祭本番に太鼓台とともに伝統的な農村景観が残る集落全体を練り歩く様子が、大野のいさめ踊りにまつわる良好な歴史的風致を形成している。

5-2 宇陀市の盆踊りに まつわる歴史的風致

(1) はじめに

盆踊りは、その起源には諸説あるが、盆の時期に死者を供養するための行事で、日本全国どこでも見られる行事である。娯楽としての側面も強く、集落の結束を強める役割も果たしていた。

『宇太村風俗誌』（大正4年（1915）宇太村）によると「盆踊 場所 氏神境内 踊手 村の青年男女 服装 浴衣に白足袋手拭かぶりして 時期 七月十八日十九日両夜 踊り方 サイモン踊 山踊 歌謡 サイモン音頭 川端音頭」とあり、集落内の広い場所（お寺や神社境内であることが多い）に櫓（以下より「音頭台」という。）を組み、その櫓を中心に輪になって踊る。盆踊りには音頭取りがいて、回り手（輪になって踊る人）は踊りながら合いの手を返す、というやりとりがある。

実施主体は集落・檀信徒・氏子など様々で、各組織の青年団が中心となって運営する。あるときに青年団から地元自治会やまちづくり協議会等に運営を移管して現在まで行事を続けてきた。

室生ではかつて8つの小学校区でそれぞれ盆踊りがあり、日程をずらして、各小学校区の青年団が協力しあって運営を行っていた。現在でも、安産寺の盆踊り、龍口の盆踊り、古市場では宇太水分神社の盆踊りが続いているほか、榛原萩原の楽盆踊りのように近年復活させた地域や、各地の夏祭りイベントの余興として盆踊りをしているところもある。

宇陀地方の盆踊りでは、音頭台の上に花笠を設けている事例が多い。音頭台の上に音頭取りが立ち、音頭を取って盆踊りが始まる。この音頭取りは、外部から呼ぶ場合と、自分たちで音頭取りまでやる場合がある。古市場・三本松・龍口は後者であるため、土着の音頭が歌い継がれてきたと考えられる。戦後になって、炭鉦節や河内音頭などの音源が入ってきたが、それまでは祭文音頭、金魚踊り、住吉音頭、土山の4曲だけで踊っていたと伝わる。

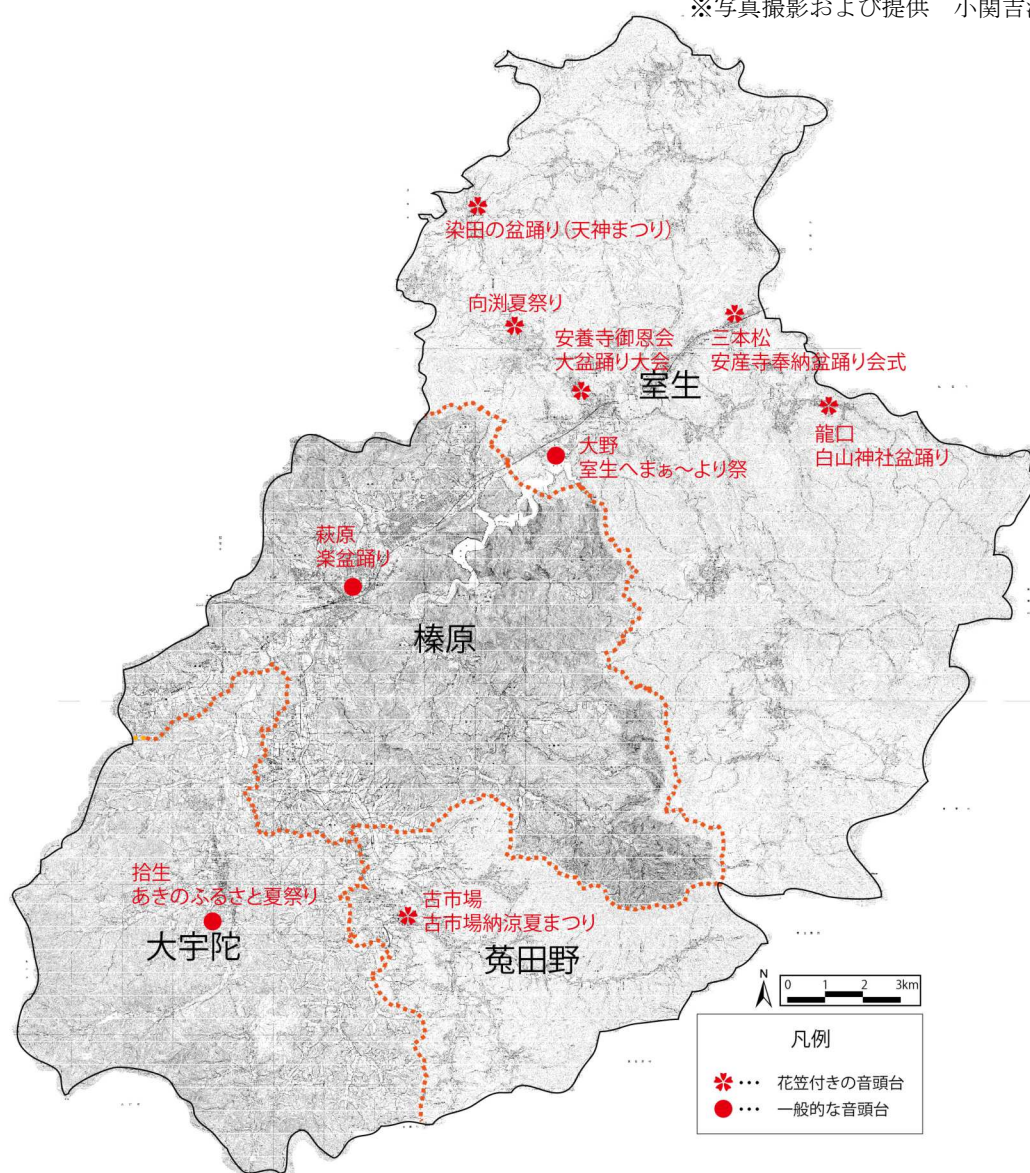


安養寺御恩会大盆踊り大会の音頭台※



龍口白山神社の音頭台※

※写真撮影および提供 小関吉浩氏



宇陀市内で開催される盆踊り分布図

(2) 建造物

【宇太水分神社本殿】

2-3 (2) 建造物を参照のこと。

【旧宇太小学校】

木造二階建て、スレート葺き、寄棟造。菟田野古市場の北西にある。昭和 10 年 (1935) に火災のため焼失した校舎にかわって新築された建物で、昭和 13 年 (1938) 5 月に竣工した。昭和 30 年代 (1955～1964) に撮影された消防出初式の写真が残っており、建具等の改変はあるものの、現在と同じ姿である。

平成 16 年 (2004) に町内の小学校が合併し、本来の役割を終えた。廃校になったのちに取り壊される予定だったが、地元で再生活用の運動がおこり、平成 18 年 (2006) 以降、「メイプルパーク」として整備されたのち、平成 25 年 (2013) より「カエデの郷ひらら」としてリニューアルオープンした。

現在は、地元の NPO 団体が施設の管理運営をしており、紅葉したカエデを見るために多くの観光客が訪れている。

7 月半ばから、この一角で音頭や踊りの練習が始まる。

【古市場みくまり会館】

木造二階建、入母屋造、スレート葺。『菟田野町史』(昭和 43 年 (1968) 8 月 菟田野町史編集委員会著) によると、もとは昭和 17 年 (1942) に藤岡勇吉氏の寄贈により建てられた宇太町役場で、昭和 32 年 (1957) に菟田野町役場が新築されるまで、町役場として使われていた。そののちは公民館として利用され、盆踊りの音頭の練習や地域の集会など、公民館活動に活用されている。



旧宇太小学校



昭和 30 年代 (1955～1964) に撮影された写真



古市場みくまり会館 外観

【龍口白山神社拝殿】

龍口神社は、龍口の集落の中央に位置する。『神社台帳』（奈良県庁文書/明治 18 年（1885））に記載されており、そのころには既に存在していたことがわかる。境内の平場が盆踊りや獅子舞の会場となる。

拝殿は木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺。『室生村史』（昭和 41 年（1966）/室生村史編集委員会）に現状と同じ姿で写真が掲載されており、柱等の部材も相応に古いことから、それ以前からあったと考えられる。盆踊りの際には、拝殿前に音頭台が組み立てられ、拝殿の両脇に渡した紐に家並み灯籠が掛けられる。

音頭台は地元の大工の共同作業により製作されたと伝わり、制作に加わった大工のひとり、福井萬太郎氏（1885 年～1968 年）の生没年から、少なくとも 50 年以上は経過したものと推察される。

絵を描いた障子を屋根に嵌め、竹にモールを巻き付けた花笠を棟に載せる（モールにする前は和紙をちぎって竹に糊で貼っていた。）床の中央には 60 cm 角の穴があり、音頭取りはこの穴から出入りする。通常は自治会の倉庫に解体格納されているが、盆踊りの際に組立てて使用する。

なお、本殿は木造一間社春日造、銅板葺。建立年代不詳、20 年ごとに造工をするとのことで、形式は古式を受け継ぐものの、材は新しい。

【安産寺本堂】

木造平屋建、切妻造、棧瓦葺。明治 37 年（1904）（安産寺パンフレットによる、一次資料未発見）に建立された。国指定重要文化財 木造地蔵菩薩立像が奥の収蔵庫に安置されており、子授けや安産祈願の寺として知られ、三本松中村区が守っている。

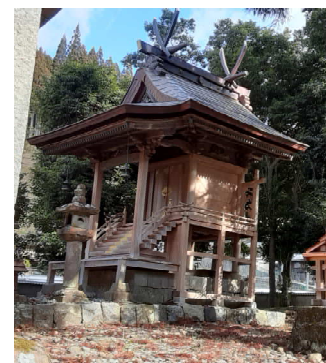
御縁日御開帳法要が 8 月の第 4 日曜日に開催され、法要のあと、本堂前の広場で準備を行い、奉納盆踊り会式を行っている。



龍口白山神社拝殿と音頭台



昭和 41 年（1966）当時の
白山神社拝殿



白山神社本殿



安産寺本堂

(3) 活動

【古市場の盆踊り】

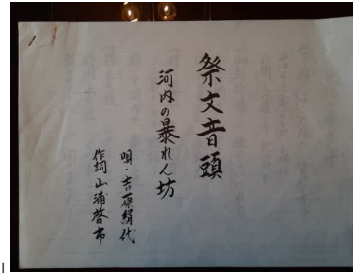
菟田野古市場の宇太水分神社の盆踊りは、「古市場納涼夏まつり」と称して、8月16日の1日のみ、19時30分～22時まで開催している（雨天時は17日に順延）。

前述の『宇太村風俗誌』（大正4年（1915）宇太村）にもあるように、神社境内で音頭台を組み、音頭取りの音頭にあわせて輪になって踊る。

盆踊りは、もとは初めて盆を迎える家を歴訪したと伝わるが、現在では神社境内で行われている。うたの納涼夏まつりと名称を変えてからも、「祭文音頭」



古市場の盆踊り（1987年）



音頭取りの唄本

「金魚踊り」「住吉音頭」「炭坑節」の4つの音頭が踊られている。音頭取りが各自で作成した唄本があり、小さい紙に写し取ったものを音頭台に持ち込み、これを見ながら音頭を取る。

盆踊りは、かつては敬神青年会（地域の青年団）が運営を担い、役員は揃いの黒紋付をはおり、手提げ提灯を持って踊っていたという。敬神青年会が運営から離れて以降は、平成7年に結成された「祭文音頭保存会」が中心となり、地元自治会と協力して運営する。7月中旬からカエデの郷ひららや古市場みくまり会館にて音頭取りの練習が始まり、当日に備える。

現在の「うたの納涼夏まつり」は2部制で、第1部では昼過ぎからカラオケ大会や地元中学校吹奏楽部の演奏等の出し物が始まる。境内に露店が並び、暗くなり提灯に灯が入ると、19時30分から第2部の盆踊りとなる。

最初に、打ち上げ花火が上げられ、太鼓の音が鳴り出すと盆踊りが始まる。音頭取り4人、太鼓打ち1人、ギター1人が音頭台の上に控え、交代しながら、踊り子との掛け合いを織り交ぜ、盆踊りを進めていく。音頭は一曲30分程度あり、音頭取りが交代しながら歌う。

始まってすぐは踊りの輪は疎らだが、徐々に輪の中に人が入るようになり、輪が広がる。慣れると合いの手の声や踊りが揃うようになり、会場に一体感が生まれる。「祭文音頭」「金魚踊り」「住吉音頭」「炭坑節」のあと、少し休憩を入れて再び「祭文音頭」を踊る。盆踊りの最後に「伊勢音頭」を唄いお開きとなる。

参加者は古市場のみならず、宇陀市全域に及び、中には吉野郡から踊りに来る者もあるという。



古市場納涼夏まつりの歴史的風致



準備風景等の写真

【龍口の盆踊り】

宇陀市の東端に位置し、名張市と接する龍口は、周囲を山に囲まれた盆地に形成された集落で、北には百地氏³⁴が築いたと伝わる山城跡（龍口城跡など）が残る。『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和 41 年（1966））によると、夏の盆踊りと、秋祭りの獅子舞の様子が記されており、そのいずれの行事も現在まで続いている。なお、「龍口の獅子舞」は、平成 28 年（2016）2 月に県の無形民俗文化財に指定されている。

盆踊りについて前述の『室生の民俗』には、「当地方の盆踊りは純然たる盆踊りというより、むしろ会式踊り³⁵であって、十三日から十六日にかけて踊るのは少い」とあり、小学校区ごとに開催日が少しずつずれており、早いところは 6 月 15 日から始まり、9 月 10 日ごろまで続いていた。おもに小学校を会場として踊っていたとある。

そんな中であって、「古風な民俗を数多く残している竜口^(原文ママ)では、八月十五日夜、村中総出で白山神社の前の広場を会場に、徹夜で踊りぬく」と記されている。現在は徹夜ではないが、白山神社の境内で盆踊りは開催されている。

龍口の盆踊りは、1990 年頃までは 8 月 24 日の地藏盆に法光寺境内で、9 月 15 日（月遅れのお盆）に白山神社境内で、年 2 回盆踊りを行っていた。盆踊りを年 1 回開催にしようと話し合った際、白山神社の盆踊りの直会で、名替え^{な が}（15 歳を迎えた男子の通称を変え、成人を祝う行事）を終えた男子の宮会式^{みやえしき}

³⁴ 百地氏は名張（竜口）室生（龍口）を治めていた武士で、地頭を務めていた。百地三太夫は江戸時代の読み物に登場する架空の人物で、桃山時代に活躍した武士・忍者として描かれている。

³⁵ 『民俗探訪事典』（大島暁雄・佐藤良博・松崎憲三・宮内正勝・宮田登 編/1983 年）によると、「祭は祭儀と祝祭とによって構成されており、神社神道における潔斎と祭式、仏教諸派による精進と会式が祭儀の事例にあげられる。」とあり、会式踊りは仏事の一環としての踊り、と認識されている。

（この会式を経て、集落では一人前として扱うようになる）を行う点でこちらの方を重要視する住民が多く、白山神社の盆踊りを残すことになり今に至る。現在は、8月15日に近い土曜日に白山神社境内で開催している。

音頭台は当日午後から組立てが始まる。組立てには釘は使わず、柱と床との間に^{くさび}楔を入れれば組みあがるようにできている。四方^{しほうころ}転び（4本の柱が中心に向かって同じ傾斜で立っている）や^て反りのある^{はふいた}破風板（屋根の妻の両端に設けられた板）と^{げぎょ}懸魚（破風板の下にある飾り）などから、地元の大工が^{すい}粋を尽くして作ったものであることがわかる。この地域特有の花笠があしらわれており、竹にモールを巻いた現在の仕様の前は、和紙に切り込みを入れ、糊で貼りあわせて飾っていた。

この音頭台は（2）建造物にあるように、50年以上前に製作されたものと見られている。

盆踊りは、以前は地域の青年団により運営されていたが、現在は自治会役員、氏子総代、獅子舞保存会、婦人部による共同運営で、おもに龍口の住民と^{でうじこ}出氏子（龍口出身で、現在は市外に居住する氏子）が参加する。総勢50人前後の規模の催しで、外部の参加者はそれほど多くない。

日が暮れると、神社に人が集まってくる。各世帯から「家並み^{やな}灯籠^{とうろう}」と呼ばれる提灯を持参しており、拝殿脇に渡した紐に吊る。進行は音頭取りが行い、太鼓や鳴り物はなく音頭取りの声に合わせて踊る。

音頭取りは現在2名、唄本はなく、先輩から聞いて覚えたものを歌う。集まっただけの練習はなく、本番が近くなると、各自で発声練習を行うとのこと。

盆踊りで謡われるのは「祭文音頭」「金魚踊り」「住吉音頭」「河内音頭」の4曲である。音頭取りが疲れてくると、踊り子たちから「エーコラヤー、ドッコイセー」「しっかり音頭とれ、ヨイヤサーノ



組立て中の音頭台※2



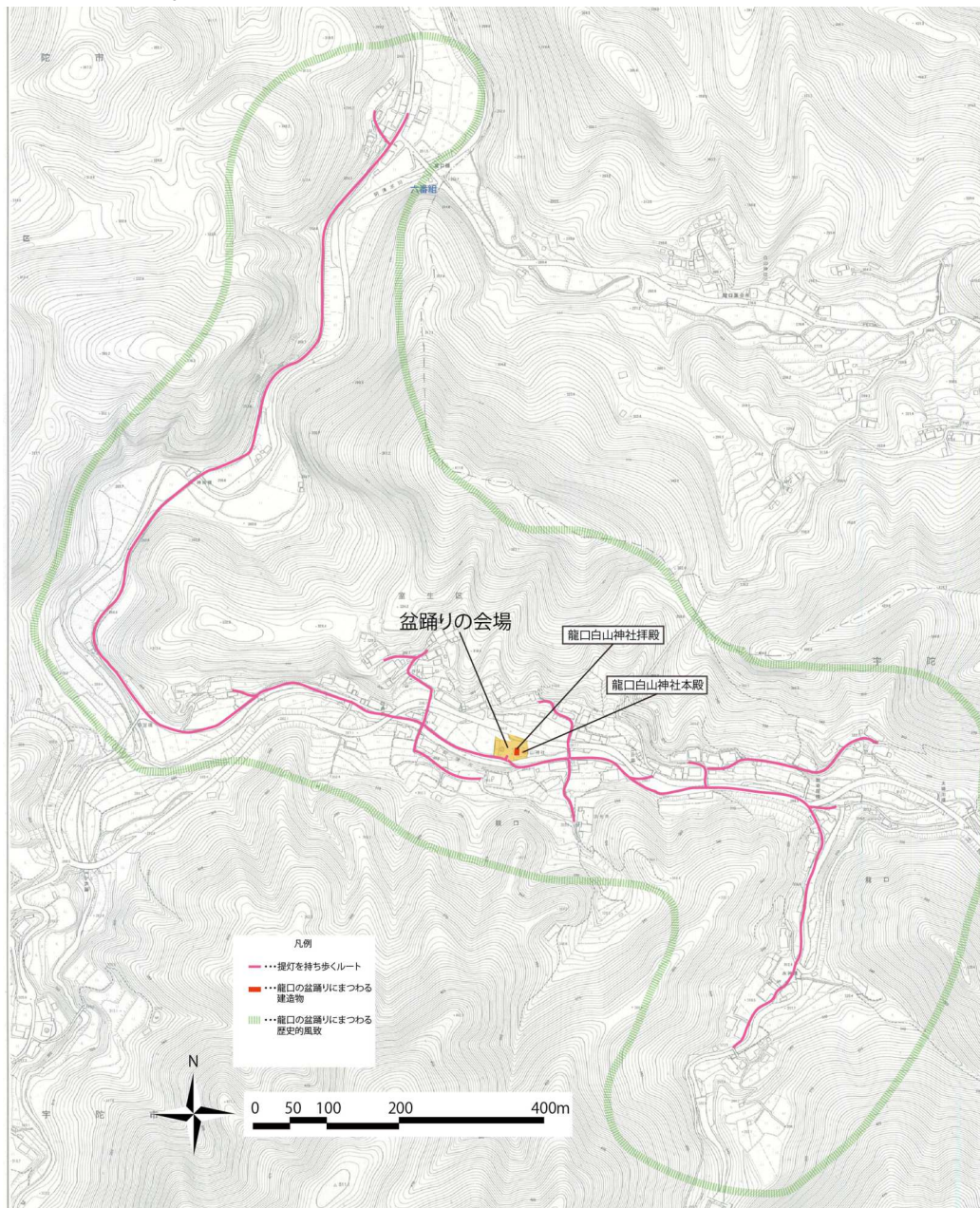
障子の屋根を嵌める。絵はその時の流行を画題にし、集落の人が描く。※2



音頭台に立つ音頭取り※2
※2 龍口自治会提供の写真

サー」などの合いの間が入り、この声に励まされ音頭取りは再び音頭に力を入れる。

23時には盆踊りを終えて、宮会式と直会を行い、未明まで宴席は続く。拝殿脇に吊るしていた「家並み灯籠^{やなとうろう}」は解散ののちに各自、自宅へ持ち帰り、片付けは翌日に行う。



龍口の盆踊りにまつわる歴史的風致

【安産寺地蔵会式】

宇陀市の東、近鉄三本松駅の北側の丘に位置する安産寺は、安産祈願で霊験あらたかな「(通称) 子安地蔵」(木造地蔵菩薩立像、国の重要文化財)が安置されている。

毎月9日が縁日で、この日の午前中に子安地蔵の御開帳を行うほか、8月第4日曜日に地蔵会式を開催し、同日の夕方に盆踊りを奉納している。『三本松村風俗誌』(大正4年(1915)、三本松村)によると「オドリ 従来、會式等ニハ随分盛ンニ行ハシ、青年男女ガ夜ヲ徹シテ踊リタレモ、当今ハ 真筋ノ禁止モアル事^{ことゆえ}事故行ハレズ」とあり、以前は行われていたが当時は夜通しの踊りが禁じられていた。

再開の時期は不明であるが、現在は8月の第4日曜日に開催されている。

地蔵会式は、13時から三本松の人々が集まり会式の準備が始まる。軒先に檀信徒の提灯を吊り、仏壇まわりに野菜や花などのお供えをする。

14時から頓光寺^{とんこうじ}ご住職とともに般若心経を読誦、会式を終えたら、音頭台の組立て等の準備が始まる。

盆踊りの運営は、三本松中村区が主体で行っており、安産寺本堂の床下に格納してある音頭台を組立て、花笠を載せて紅白の布を巻く。音頭取りが音頭台へ上るときは、梯子を使う。

三本松の盆踊りでは、地元の音頭取り(1名)が音頭をとり、「祭文音頭」「住吉音頭」「金魚踊り」

「子安音頭(地蔵菩薩の文化財指定を記念して作られた音頭)」の4曲を、音頭台を中心に輪になって踊る。太鼓の音と、音頭取りの音頭により、盆踊りは進められる。

境内では、たこ焼やかき氷などの模擬店が出されるほか、抽選会が行われ、参加者で賑わう。

この盆踊りには、三本松中村区が中心となり開催するが、近隣の集落からも参加がある。



安産寺境内 外観



地蔵会式の日には軒に提灯を下げる



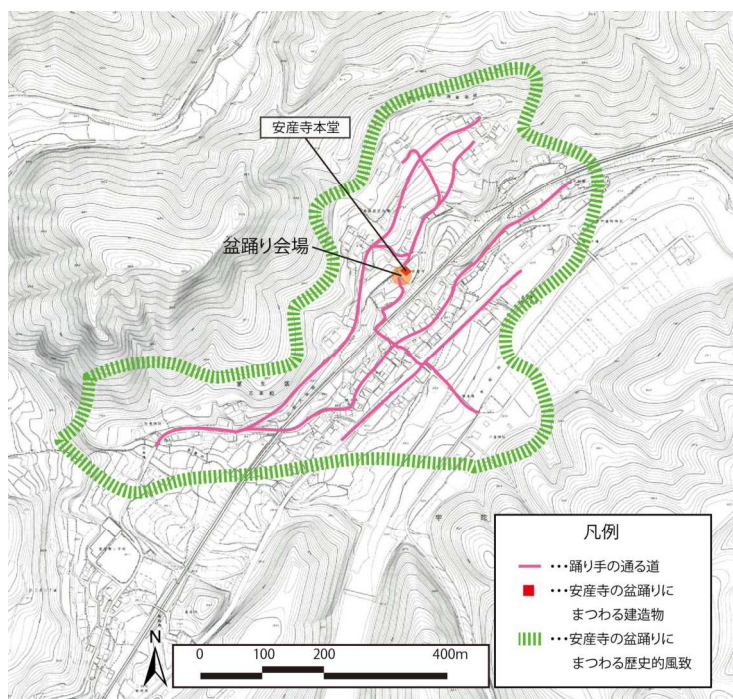
会式では般若心経を読誦



音頭台の組立て風景※3



骨格を作り花笠を飾る※3



安産寺の盆踊りにまつわる歴史的風致



屋根をかけて紅白の布を巻く※3



音頭台完成※3



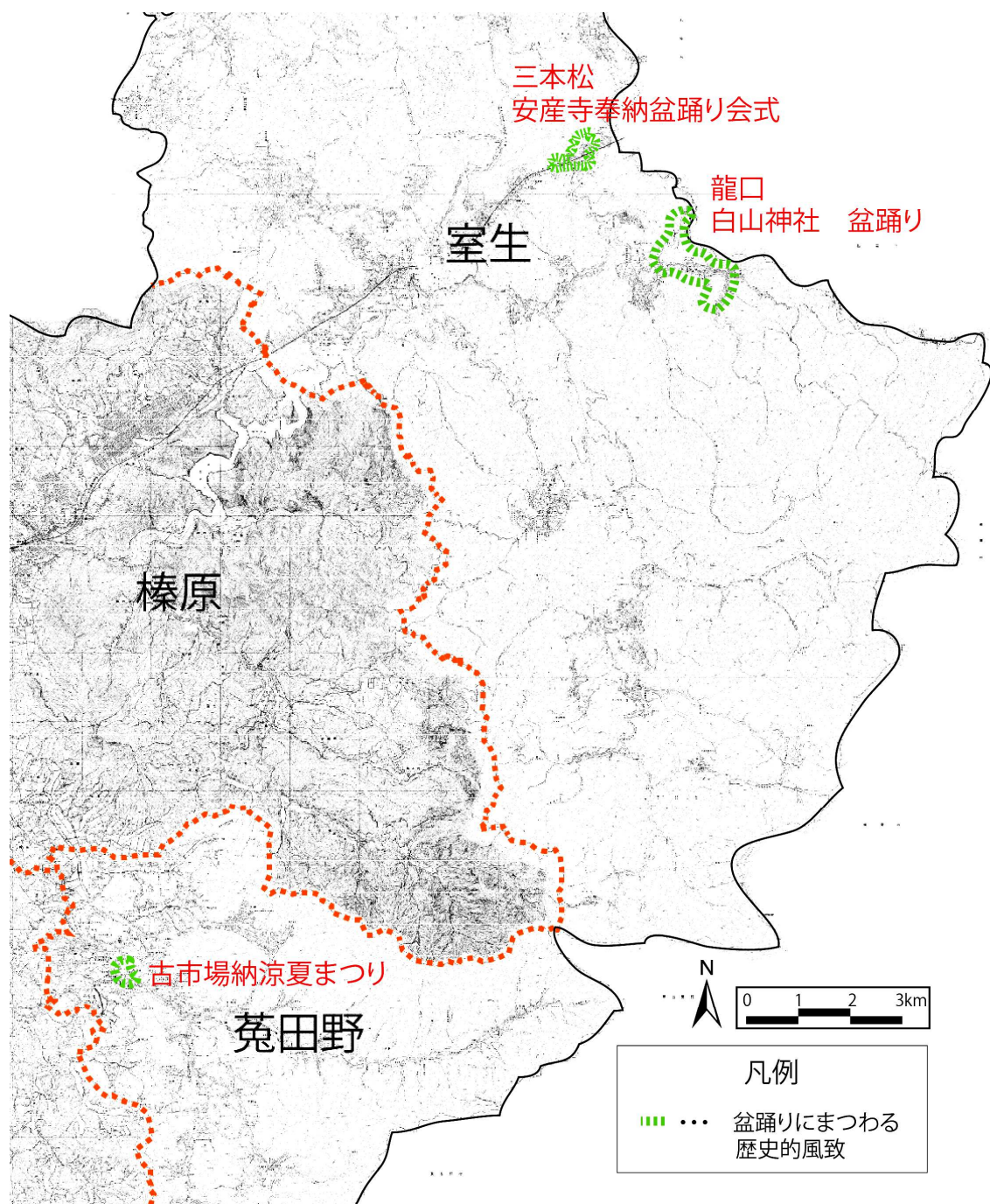
音頭台を中心に踊る※3

(4) おわりに

宇陀における盆踊りは、寺や氏神の境内、区の広場などで老若男女大勢によって踊られる。中央にタカバ

(音頭台の檣)を設け、これを巡って踊る。かつては ※3 の写真は三本松自治会提供
夜通し踊ったが、社会情勢の変化により踊る時間は以前より短くなった。しかし、「祭文音頭」「金魚踊り」など、ほかの地域では途絶えた古風な音頭が受け継がれており、宇陀市内でも古市場と室生で踊り方に若干の違いが見られるという。

盆踊りは、先祖の霊を慰めるための行事である一方で、娯楽の場、地域住民の懇親の場、男女の出会いの場として、昔も今も開催を楽しみにしている人が多い行事である。盆踊りの日、地域に暮らす人がそれぞれ浴衣を纏い、提灯を下げて、昔ながらの農村風景あるいは町家群を通り抜けて至った境内で展開された踊りの輪の中に加わる様子は、境内周辺環境と相まって良好な歴史的風致を形成している。



宇陀市の盆踊りにまつわる歴史的風致の図

5-3 宇陀市の獅子舞に まつわる歴史的風致

(1) はじめに

獅子舞は、獅子頭を御神体として、村々を訪れて獅子舞を行い、悪魔祓いや火伏せ・息災延命などを祈禱する神楽である。宇陀市内では室生地域にいくつか伝わっており、『室生の民俗』（松本俊吉ほか、室生村役場）によると、「室生下田口の水分神社、龍口の白山神社、向淵の春日神社、室生の龍穴神社にある。そのほかに太神楽として天理市石上住の南田亀蔵の本家を継ぐ村下義雄神楽が3月下旬に無山から多田・染田・小原・笠間（上下とも）・深野へと廻ってくる。」とある。

これらの中で現在も行われているのは、下田口の田口水分神社、龍口の白山神社、室生の龍穴神社の獅子舞である。

(2) 建造物

【龍口白山神社】

4-2(2) 参照

(3) 活動

【室生の獅子神楽】 県指定文化財（無形民俗）

3 (3) 参照

【龍口の獅子舞】 県指定文化財（無形民俗）

龍口白山神社の秋祭では、獅子舞が行われる。五穀豊穰と子孫繁栄を願い行われる秋祭りだが、『神社私祭調査一件』（大正7年（1918）、奈良縣宇陀郡役所）に龍口白山神社の秋祭について祭典の日時や次第順序など詳細に記されており、獅子舞は小学校児童が担当している点と開催日が異なるが、それ以外は現在と殆ど同じである。



村舞わし※2



四方※2

※2 印の写真はすべて、龍口獅子舞保存会提供。

白山神社の秋祭りでは、集落内の各戸を訪ねて舞う「村舞^{むらま}わし」と、神社境内での奉納舞がある。

秋祭は、10月第4土曜日に宵宮、日曜日に本宮を行う。集落を6つの組にわけ、土曜日には4番組まで「村舞^{むらま}わし」をしたあと、祭礼を執り行う2軒の頭^{とう}屋^やで「頭^{とう}屋^や舞^まわし」をし、頭屋宅から白山神社への「お渡り行列」をしたあと、宵宮で神楽の奉納舞を行う。

翌日は、残り2組の「村舞^{むらま}わし」のあと本宮で神楽の奉納を行う。宵宮・本宮で奉納される神楽は「四方^{しほう}」「御^ご参^{さん}」「悪^{あく}魔^ま祓^ばい」「天^{てん}狗^ぐ」「獅^し子^し踊^{おど}り」の5神楽で、箏8枚を広げた上で舞う。なお、「村舞^{むしろ}わし」で舞うのは、「四方」「御参」「悪魔祓い」をあわせて5分程度にまとめたものである。舞い手は交代しながら、一日で40戸弱の家をまわる。獅子頭は、奉納用と村舞^{むしろ}わし用とを使い分ける。

舞い手は20代から30代の若手为中心で、殆どが集落外で暮らしている。9月の水・土曜日の20時～22時に集会所に集まり練習する。お囃子と、演目ごとの舞の練習が中心で、舞い手の動きと太鼓の音を合わせている。舞い手は2名（獅子の前後）で5演目、「天狗」のみ1名追加で、少なくとも11名が必要となる。これらの芸能を受け継ぐ過程で地域の絆が深まるという。

（4）おわりに

獅子舞は宇陀市東部の集落単位でいくつか存在が確認されている。祭礼の日を迎えるまでに、入念な練習が行われ、親世代から子世代へとお囃子と演目ごとの舞が継承される。獅子舞が練り歩く集落や、舞の奉納先である神社・寺院にはいずれも伝統的な建物が数多く残り、山村の田園風景をかたちづくっている。これらの活動と歴史的環境が相まって、良好な歴史的風致を形成している。



獅子踊り舞※2



本宮の奉納風景※2

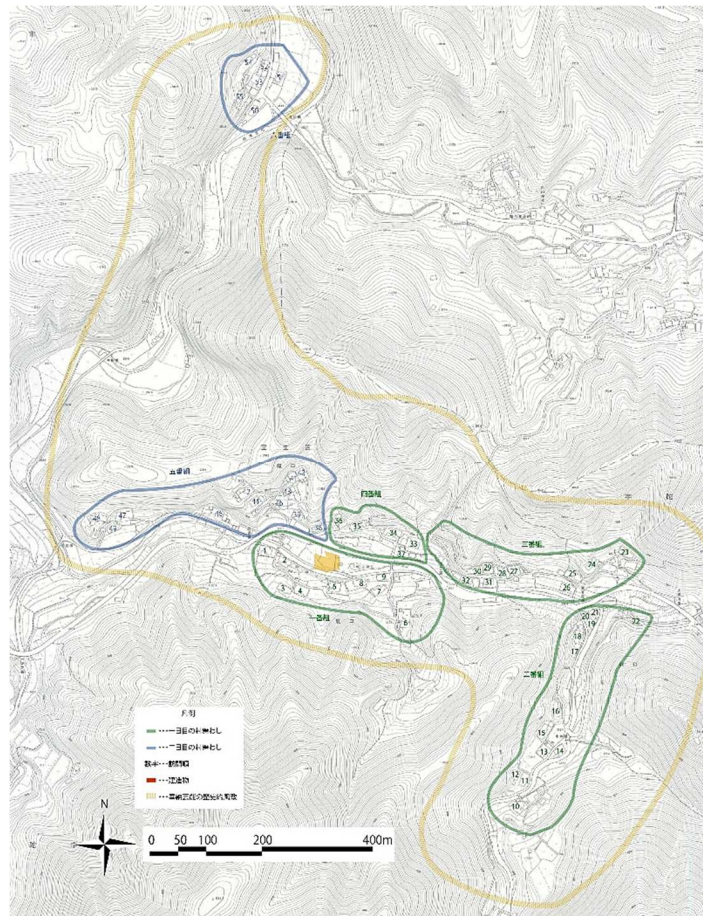


準備風景※2

※2印の写真はすべて、龍口獅子舞保存会提供。



龍口の集落（二番組、三番組）



龍口の獅子舞にまつわる歴史的風致の図

おわりに

「いさめ踊り」「盆踊り」「獅子舞」と、宇陀市内に伝わる奉納芸能について紹介した。かつては雨乞のため、天に最も近いダケ（古大野岳）の頂きを起点に集落の主要な場所で踊られた「いさめ踊り」は、農耕技術の発達等によりその機会が失われつつあった。しかし、現在では秋祭りにて五穀豊穰の感謝を込めて秋祭りの宵宮で奉納されるようになり、「いさめ踊り」は大野の人々に継承されてきた。

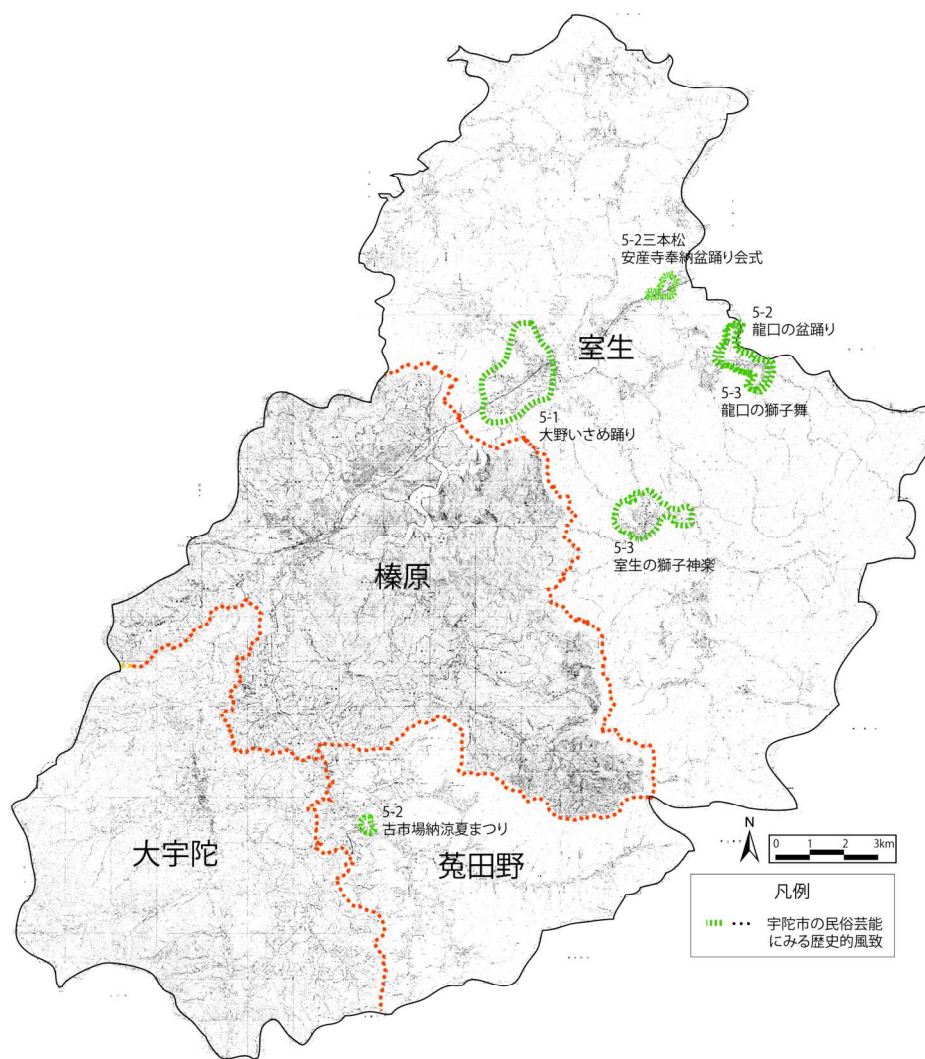
9月半ばから始まるお稽古や、宵宮、本宮で響く太鼓の音は、秋祭りの際に室生川の側に鎮座する海神社の鎮守の杜を起点に、山の斜面のわずかな平地に密集した家々の間を縫って集落の隅々へと届けられる。

また、神社や寺院の境内で、音頭台を組んで音頭取りの音頭にあわせて輪になって踊る盆踊り。全国でもさまざまな形で展開する盆踊りだが、当市では花笠を持つ音頭台の^{しつら}設えや、「祭文音頭」「金魚踊り」「住吉音頭」が地域固有の発展を遂げたものとされている。

昔ながらの形を残した盆踊りが開催されている場所は、山間部や町場と、成り立ちの背景は異なるが、いずれも伝統的な外観を持つ建物がよく残る環境の中心にあり、そこに据えられた音頭台から繰り出される太鼓の音や唄が周辺へと広がっていく。盆踊りの夜は、静かな佇まいとは対照的に、賑やかな音で場が満たされる。

「獅子神楽」「獅子舞」が行われる室生や龍口は、山間の谷川に沿って石積み
みの田畑が続き、山裾に茅葺や瓦葺の伝統的な家が混在して建つ。山村集落の
良好な歴史的環境を持つ集落の隅々まで出向いて行われる獅子舞は、年長者か
ら若年層へと丹念な練習を経て受け継がれている。

宇陀市内に点在する神社や寺院、集落や市街地の美しい景観の中で繰り広げ
られる民俗芸能は、その地に伝わる所作や知識の伝承を通じて地域の繋がりを
強固にするとともに、良好な歴史的風致を形成している。



宇陀市の民俗芸能にみる歴史的風致の図

コラム 4 阿紀神社の神事能

大宇陀地域事務所の北西に鎮座する「阿紀神社」は、本郷川沿いの鎮守の森に鎮座する。鳥居の奥の広場を挟んで左手に社務所、右手に能舞台が配され、階段を登って奥に進むと神門と瑞垣を回した神明造の本殿、脇に末社が並ぶ。

神社の来歴は定かでないが「元伊勢³⁶」のひとつで、『倭姫命世紀』に「崇神天皇六十年癸未二月十五日。遷于大和国宇多秋志野宮、積四箇年之間奉斎」とあり、倭姫命が4年にわたりこの地で天照大御神を祀ったのが起源とされている。社伝では、天正年中に現在地に遷座した由が記され、明治35年（1902）に郷社から県社に格上げされた。



『松山町概観』昭和3年(1928)
奈良県宇陀郡松山町役場発行



子ども能楽教室発表会リハーサル

この境内でひとときわ目を引くのが、能舞台である。来歴は不明だが、織田松山藩の『御用部屋日記』では、延宝元年9月16日「神戸社（阿紀神社の通称）」で「神事能」を行ったとの記述がみられ、江戸期から献能があったことがうかがえる。

神事能のほかにも延宝6年（1678）9月17日には「信休生誕祝儀能」を催している。当時実施したこれらの催しは、「家中^{かちゅう}」や領民、領外の人々を招いて見物させている。

元禄8年（1695）の国替えにより織田家が柏原に移ったあとも、『松山町概観』（昭和3年（1928）松山町役場）の阿紀神社の解説文によると、明治維新前まで神事能は続いていた。

平成4年（1992）、大宇陀町町政50周年記念事業として、能の奉納を再開した。再開当初は4月末に開催していたが、「薪能」を「あきの螢能」と改称し、6月中旬に開催時期を変更した。令和元年（2019）より、能の裾野を広げることを目的として「こども能楽教室」が開設され、阿紀神社の能舞台で仕舞いを披露することを目標に掲げ、宇陀市内の小中学生が能楽師から能を学んでいる。

³⁶とよすきいりひめのみこと かさぬいむらしき
豊鋤入 姫 命が笠縫村磯城の巖櫃の本に「磯堅城の神籬^{しかたき ひもろぎ}」を立てて天照大御神を祀ったことに始まり、現在地に落ち着くまでに一時的に祀られた場所が「元伊勢」とされる。途中より 倭 姫 命^{やまとひめのみこと}がこれを引き継ぎ、およそ90年かけて遷座した。以前は20箇所とされていたものが現在では60箇所を超え、詳細な伝承地については不明な点が多く、真偽のほどは不明である。宇陀市内では、阿紀神社と篠畑神社が元伊勢にあたる。

山間地にある宇陀市は、川沿いにある平地や山の斜面を整えて田畑とし、様々な作物を産出している。山がちで泥田が多く二毛作に不向きなため稲作のほか、農閑期に林業等の副業を行い、暮らしてきた。

[illegible]

織田松山藩の『御用部屋日記』には宇陀で育てられた黒豆や葛、柿などが、江戸屋敷や嫁いだ子女へと届けられている様子が記されており、黒豆・葛・柿の栽培の歴史は江戸期まで遡る。

農業は天候の良し悪しが収穫量に大きく影響を与えるため、これらの作物の豊作への願いを込めて、様々な伝統行事が市内各所で現在も続いている。また、時期により必要な作業や伝統行事を表にまとめて農事暦を作り、これを目安に生活してきた。

宇陀市内には、茅葺民家や鎮守の森、山と田畑が広がる集落を舞台に続けられている農作業と、口宇陀の田原の火祭りや東山中の染田の虫送りなど、五穀豊穡への感謝や農作業により殺された虫の供養などの多彩な行事が相まって、歴史的風致を形成している場所がいくつもある。

ここでは、以下のことについて紹介する。

6-1 宇陀の稲作にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

コラム5 フクマルと、とんど（どんど）

コラム6 庚申さん

6-2 黒大豆の生産にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

6-3 宇陀の山の営みにみる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

コラム7 ダリアの生産

月別	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
田				● 穀まき 荒起し	● 施肥 田畑	● 中耕 除草	● 除草	● 草刈	● 早稲収穫	● 稲刈	● 脱穀 乾燥	● 調製
畑			● 馬鈴薯種付 ● 晩豆施肥 ● 麦中耕	● 甘藷床 ● 大豆(前作)まき		● 大豆(晩豆)収穫 ● 秋田(大豆)まき	● 茶(大豆)まき		● 大豆(晩豆)収穫 ● 大豆(秋田)収穫	● 小豆収穫	● 小麦まき ● 小麦まき	● 麦中耕
山	炭やき、薪づくり											炭薪
副業	縄な	い					● 茶					
行事	新正月	旧正月 4.おこない(行)	15.やぶ入 初寄合 二の正月(旧2/1)	3.節句 10.山登り 21.れんぞ	21.二番れんぞ	15.亥やすみ	28.夏祭	7.どうまいり 16.やぶ入道おしん 28.夏祭	1.八朔こもり	19.秋祭	7.山の神	10.祈禱祭 報告祭

上 宮 奥 農 業 暦

上宮奥（山間部）の農事暦、昭和34年（1949）

6-1 宇陀の稲作にまつわる祭礼 行事ゆかりの歴史的風致

(1) はじめに

稲作は日本全国で行われているものだが、植え付けの時期や育て方など、地域によりやり方は異なる。宇陀市においても全域で稲作は行われているが、冒頭に触れたように、宇陀市は口宇陀と呼ばれる地域と東山中と呼ばれる区域に分かれ、稲作に関連する祭礼行事も多種多様である。ここでは、宇陀市内の稲作に関連する歴史と、宇陀市内で行われる特色ある稲作関連の行事について紹介する。

宇陀市大字^{かみかたおか}上片岡・^{しもかたおか}下片岡・田原・^{まき}牧・^{くり}栗野・^{ひがしひら}東平尾・^お大熊^{おおくま}で構成される旧上龍門村^{かみりゅうもんむら}の中心地で、宇陀市南部に位置する農村集落である。『和州吉野郡龍門之内田原村御検知帳』（元禄4年（1691）片岡家文書）によると上龍門全体で33町8反6畝23歩、約400石の石高が記されている。検地帳の標題にあるように長い間、吉野郡に属していたが、地理的に近く日頃の交際が密で利害を同じくするところがあるとの理由で³⁷昭和17年（1942）の町村合併を機に宇陀郡大字陀町に属するようになった。

宇陀市の農村部の殆どがそうだが、田原は周囲を山に囲まれ、わずかな平地を田畑にし、山林と田畑の境目に住まいを配置する農村風景が広がっている。稲作と山仕事は現在も続いており、稲の生育とともに季節の移ろいを感じることができる。また、村の庄屋をつとめた片岡家住宅が当時の姿をとどめたまま今も残るほか、茅葺民家が地区周辺に点在し、良好な歴史的環境が維持されている。



田原の集落



田原 平坦部



田原 山間部



菅原神社入口

³⁷ 昭和16年（1941）11月11日付で県知事に提出された上申書には、合併の理由として「宇陀郡松山町、神戸村、政始村及上龍門村ハ地理的風俗習慣ヲ同クシ、日常の交通交際ヲ共ニシ、其ノ利害共通性ヲ有スルヲ以テ、之等町村ヲ廃シ新町設置ノ義企画シタル所、衆議纏リタルヲ以テ之カ実現ヲ期セントスルニアリ」と述べられている。

械化も進み、江戸期から比べると稲作や、稲作にまつわる行事の様相は大きく変わったが、生産領域としての田畑と山林の営みは連綿と受け継がれている。

伝統行事については、菅原神社の秋祭り（火祭り）を中心に据え、道づくりをはじめとした行事（下表）、組によっては庚申講が現在も続いている。

田原区年間恒例行事・祭事一覧表

No.	行事・祭事名	実施日	主催
1	初集会	1月4日以降最初の日曜	区
2	とんど	成人の日	当屋垣内
3	春の道づくり	3月の第3日曜	区
4	田休み・日待ち講	田植え終了期	区
5	墓山草刈り	6月・8月の最初の日曜	区
6	金毘羅祭	9月第2土曜	当番垣内
7	観音会式	9月第3日曜	当番垣内
8	秋の道づくり	9月第3日曜	区
9	無縁仏法要	9月24日	当番垣内
10	秋祭り	10月第4日曜	氏子・区

=用語説明=

区＝田原の全世帯。区は谷ごとに6組にわかれ、1～3組が上垣内、4～6組が下垣内に属する。

当屋垣内＝秋祭りの差配を担当するトウヤが属する組。

当番垣内＝行事を担当する組。輪番制で年により変わる。（例：R2年度の日待ちは2組、金毘羅祭は3組、観音会式は4組）2005年、当屋に仕事が集まらないよう制度を変えた。

氏子＝菅原神社の氏子。区外に暮らす出氏子も含む。

一方で、奈良盆地の呼称「^{くんなか}国中」に対し、「^{ひがしさんちゅう}東山中（^{ひがしさんない}東山内ともいう）」と呼ばれる地域に属する室生染田は、宇陀市の北西部に位置し、奈良市と接する山間部の集落である。興福寺の荘園、染田荘・染殿荘に属していた。

中世には国衆の多田氏が治めていたが、近世には藤堂藩領だった時期がある。明治21年（1888）に周辺の村と合併して東里村となり、昭和30年（1955）に室生村に編入された。

いくつかの谷筋に棚田が広がり、山と田の境に家を配する田園風景が広がる集落では主に稲作を中心とした作物が育てられているほか、茶畑が散見される。

行事の柱は10月の秋祭りだが、1月の^{けっちん}だんじゅう、結鎮、などの特色のある伝統行事が染田周辺には数多く残っており（下表）、その殆どが稲作に関連する行事となっている。

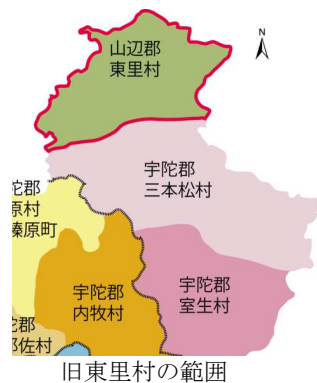


宇陀市における染田の位置図

染田の年中行事一覧表

日時	行事名	備考
1月1日	歳旦祭	
1月4日	乱声（ランジョウ）	牛玉法印、漆の枝の飾りを作る
1月10日	結鎮（鬼の目玉打ち）	竹と柳の飾りを作る、四方天地を矢で射る
1月15日	どんど	正月飾りや関連行事の飾りを集めて焼く
2月3日	節分	豆まき
2月11日	祈年祭	
4月3日	節分	菱餅を供える
5月10日	けがけこもり	昼こもり
6月5日	節分	ヨモギと菖蒲の軒飾り、チマキの御供
6月16日	田の虫送り	農作業で殺めてしまう虫の供養
7月10日	夏祭り「夏かぐら」	
7月24日	地蔵会式	
8月20日	天神会式（お茶こもり）	
8月20日頃 の日曜日	風の祈禱	
10月17日 に近い日曜日	秋祭り	このときに総代が交代
10月31日	つごもりこもり	神送り
11月10日	金毘羅さん	
11月23日	新嘗祭	
12月31日	年越し参り	

このほか、毎月1日に朔幣（さへい）を開催する。



染田の集落（青木宅裏 山の神より俯瞰）

代表的な集落の年間行事について紹介したが、これらの集落以外にも、良好な歴史的環境を持つ農村集落は多数存在し、稲作に関連する特色ある祭礼行事が広範囲にわたって残っている。

（２）建造物

【興隆寺庫裏】

木造平屋建、切妻、棧瓦葺、平入。大宇陀宮奥にあり、明治 7 年（1874）に廃寺となったが、鐘楼・庫裏や仏像等に残り、以来地域で守ってきた。

昭和 46 年（1971）5 月に大宇陀町が撮影した航空写真では、現在と同位置に同規模の建物があり（当時は茅葺だったがのちに棧瓦に葺きかえたと思われる）、柱などの材が相応に古いことからそのころ既に建てられていたことがわかる。

集落の中でも高台にあり、境内から集落全体を見渡すことができる。年明け最初の日曜日に、集落の人が集まり、ここの境内で集落の境界に張るカンジョウ縄を作り、厄除け祈願を行っている。



興隆寺庫裏



昭和 46 年（1971）の航空写真

【興隆寺鐘楼】

木造平屋建、切妻、棧瓦葺、妻入。昭和 46 年（1971）5 月に大宇陀町が撮影した航空写真では、現在と同位置に同規模の建物があり、柱などの材が相応に古いことから、この頃には既に建てられていたことがわかる。庫裏の南西に配され、完成したカンジョウ縄の厄除けの祈願をする際、法螺貝の音とともに、この鐘の音を周辺に響かせている。



興隆寺鐘楼

【染田春日神社拝殿】

染田春日神社は、室生染田集落の中央部に位置し、集落で行われる年中行事のおもな舞台となる。

『大和国山辺郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治12年（1879）※昭和19年（1944）まで追記あり）によると由緒不明であるが、明治12年（1879）には現在の場所に境内地があった。鳥居の奥に拝殿、その奥に本殿を配している。そのほか、境内社や天神講連歌堂、十輪寺本堂が同じ境内に並んで建っており、境内の隅に石仏が鎮座する。

本殿は一間社春日造、銅板葺で柱や細部彫刻、壁板に彩色が施されている。建立年代は不明。

拝殿は木造、入母屋造、棧瓦葺、平入。『大和国山辺郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治12年（1879）※昭和19年（1944）まで追記あり）によると明治45年（1912）に改築の届出をしており、桁行3間、梁間1間2尺の規模に改築している。現在の拝殿と同規模で柱材など相応に古いことから、このころの建築とみられる。



染田春日神社本殿



染田春日神社拝殿

【天神講連歌堂】 県指定文化財（有形民俗）

木造平屋建、入母屋造茅葺、妻入り。国衆多田順実が南北朝時代に天神御影を感得し、居館近くの染田に祀ったのが始まりとされる。現在の建物は、春日神社本殿の西に隣接して建っており、18世紀中頃のものとして推定される（奈良県の指定説明による）。結鎮などの行事の際には、ほかの末社同様にお供えが置かれる。

連歌会を催す際に、この建物が使われる。



染田天神連歌堂

【十輪寺本堂】

木造仏堂、入母屋造庇付、トタン葺。方3間の仏堂で、創建時期は不明だが、昭和38年（1963）に撮影された航空写真（国土地理院が公開している）に同位置に同規模の建物があり、柱などの材も相応に古いことから、そのころには既に建っていたことがわかる。



十輪寺本殿

だんじゅう⁴⁰、結鎮など集落の行事の舞台となっている。堂内は畳敷で、床の間のようなところに厨子が置かれ、地藏尊と十一面観音菩薩像、不動明王像が納められている。

【水分神社本殿】 県指定文化財（建造物）

木造一間社隅木入春日造、檜皮葺の社殿を3棟、並列で西面させて覆い屋に納めている。棟札によると貞享4年（1687）の建立とされ、平尾のオンダ祭の会場となる。



水分神社本殿

【白山神社本殿】

木造一間社春日造、銅板葺。高台にある境内から集落全体が見渡せる。奥の階段を登ると、瑞垣で囲まれた中に本殿がある。『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和34年（1959））に掲載された写真と同規模の社殿が現在も同じ位置にあり、材が相応に古いことから昭和34年（1959）以前から存在するものと推察できる。野依のオンダ祭りの会場となるほか、後述の「黒豆神事」の舞台にもなる。



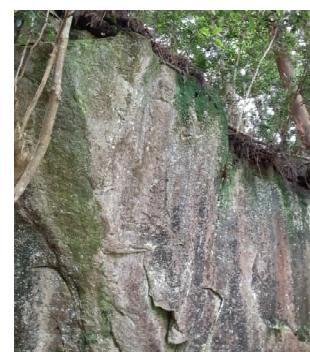
白山神社本殿



昭和34年の白山神社
（『大宇陀町史』より）

【下笠間の阿弥陀磨崖仏】 市指定史跡

石造磨崖仏。下笠間と山添村との村境にある。阿弥陀像の右脇に「永仁二年甲午 五月一日 願主正証」とあることから、永仁2年（1294）に作られたことがわかる。虫送り際には、この場所が終着点になっており、広場に松明を積み上げ、全員で般若心経を唱えて解散する。



下笠間の阿弥陀磨崖仏

【片岡家について】

片岡家は江戸時代に庄屋、大庄屋、年預^{ねんよ}の役を務め、相当の格式を認められた地主農家である。中世から近代にわたり、約13,000点にのぼる文書が代々伝わることで知られる。（文書は平成29年（2017）県指定文化財（古文書）に指定

⁴⁰「だんじゅう」は、ダンジュウ・ナンジョウ・ランジュウなど世代や集落により呼び方が異なる。令和6年（2024）現在、染田では乱声（ランジョー）と表記する。

された。)

片岡家住宅は宇陀から吉野へ抜ける道から少し東へ上った場所の、集落のほぼ中央にある高台に建つ。櫓の巨木と石垣がひととき目を引く。

部分的な改造はあるものの、当初の姿をよく残す建物であること、それぞれの建物の建設年代が明らかで、間取りや構造手法に特色があり、民家の歴史を知る基準のひとつとして貴重であることから、主屋（居室部）（客室部）、表門がそれぞれ国の重要文化財（建造物）に指定されている。

【片岡家住宅主屋（居室部）】重要文化財（建造物）

桁行 14.9m、梁間 13m、入母屋造、茅葺、両側面及び背面庇付、棧瓦葺き。上棟式の槌（自宅にて保管）によると寛文 10 年（1670）に建築された農家住宅。昭和 36 年（1961）3 月 23 日、国の重要文化財（建造物）に指定された。大宇陀田原の火祭りや庚申さんの行事など、トウヤが巡ってくると組の者が集まり祭りの準備作業やお参りの場として使われる。



片岡家住宅全景



片岡家住宅長屋門より



片岡家住宅主屋（居室部）

【片岡家住宅主屋（客室部）】重要文化財（建造物）

桁行 9.2m、梁間 5m、入母屋造、茅葺、南面及び西面庇付、東面玄関の間付属、棧瓦葺。『玄関御普請覚帳』によると、天明 2 年（1782）に式台とともに建築された。居室部とともに昭和 36 年（1961）3 月 23 日、国の重要文化財（建造物）に指定された。

菱形欄間など特徴的な細部意匠を持つ座敷で、領主や代官等が来臨した際に、休息を取るため使われていた。



片岡家住宅主屋（客室部）

【片岡家住宅表門】重要文化財（建造物）

『門長屋棟上御祝儀覚え帳』によると、天保 3 年（1832）片岡家の門として建てられた。中塗土仕上げの壁で、外側の開口部が少ない。桁行 16m、梁間 4m、切妻造、棧瓦葺。昭和 55 年（1980）1 月 26 日、国の重要文化財（建造物）に指定された。



片岡家住宅表門

【菅原神社石灯籠】

田原の氏神である菅原神社は、集落の中心部を東西に走る県道の北側に位置しており、小高い丘の一部を整えて確保した平地に、社殿と拝殿がある。

主祭神は菅原道真とされているが、『菅原神社縁起』（年代・筆者不詳）には菅原道真と直接的な関りは見いだせないという。

神社の名称も、「無年貢山天神社」（『田原村社寺改報告書』元禄6年(1639)、片岡家文書）、「氏神天満宮社」（『寺社御取調二付書上帳』明治5年4月、片岡家文書）、「村社菅原神社」（『大和国宇陀郡神社明細帳』明治12年(1879)）と、一様でない。神社の来歴は定かでないが、貞享2年(1685)と天明7年(1787)に寄進された石灯籠が現存することから、江戸時代前期には既にあったと考えられている。火祭りとして知られる秋祭りの主会場で、宵宮のクライマックスを飾る御供まきは、この場所で行われる。



菅原神社



天明7年(1787)
の銘がある灯籠

(3) 活動

【綱掛神事・カンジョウ縄（道切り）】

疫病やそのほかのよくないものが村に入ってくるのを防ぐため行う呪術のひとつに、「道切り」がある。宇陀ではこれを「縄掛け」「カンジョウ縄」と呼び、正月に集落の入口付近に縄を張る。

大宇陀の西端、宮奥のカンジョウ縄は『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和34年(1959)）268頁に写真が掲載されており、行事は現在も続いている。

1月最初の日曜日早朝から、集落の人が興隆寺に集まり、寺の軒先でカンジョウ縄を作る。男性が大綱を、女性は綱に吊る飾りを作る。

大綱は、大人の両手を広げた幅を1^{ひろ}広として通常は12広、うるう年には13広の長さに仕立てる。縄に吊る飾りも通常は12個、うるう年には13個つくり均等に割り付ける。



『大宇陀町史』掲載の写真



厄除け祈願の様子



カンジョウ縄近景

縄が仕上がると、厄除けの祈禱を行う。般若心經を唱えたあと、法螺貝と鐘の音とともに松の机を櫓の棒（昔は漆の棒だったが、かぶれるので櫓に変えた）で叩く。この所作を2回繰り返す。櫓の枝が割れ、大きな音が出るほど良いとされる。

厄除け祈禱が終わったら、縄を集落の所定の場所へ掛けに行く。翌年までの1年間、その場所に存置する。役目を終えて外した縄は、焚火で燃やされる。

なお、カンジョウ縄は市内では室生深野、室生上笠間、榛原額井、榛原戒場で現在も確認できる。

かつてカンジョウ縄が行われていたところをカンジョウと呼ぶなど、地名のみが残るところもある。正月行事のオコナイ（新年の祈禱）とあわせて行われている。次のランジョウ・結鎮^{けいちん}などとともに、村の一年間の豊作祈願・村内安全を村人が祈る古風で素朴な行事である。

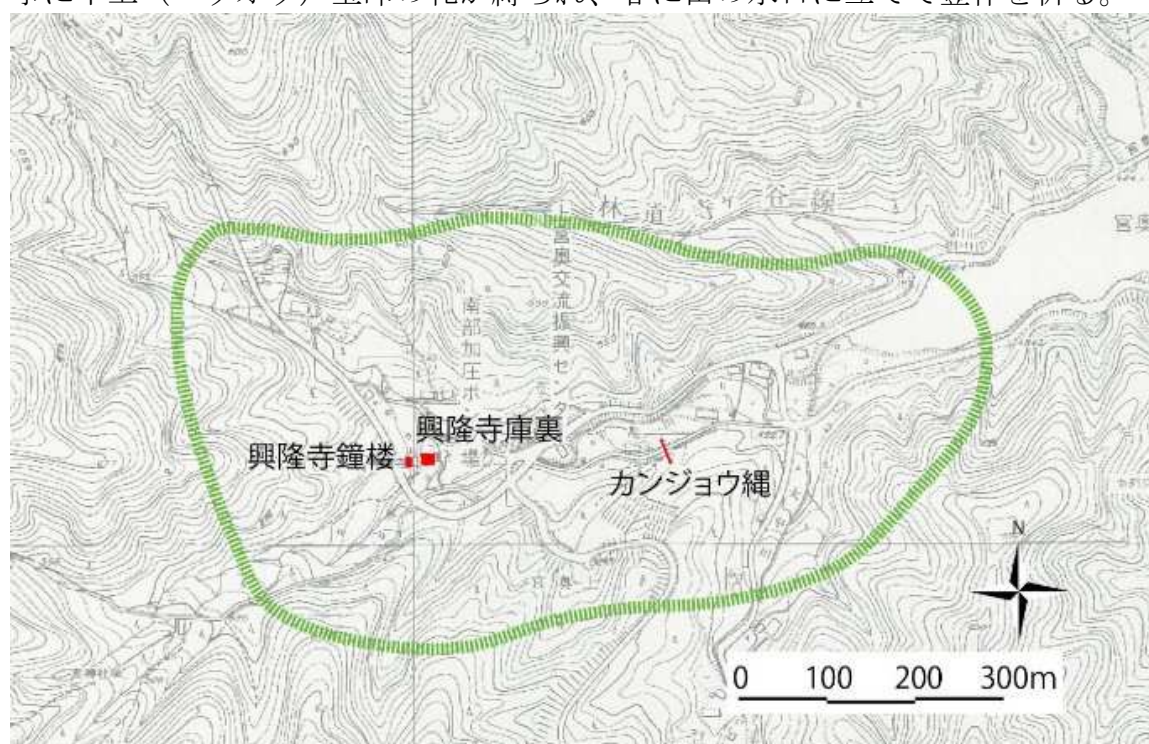
これらのオコナイは榛原地区では長峯・戒場・佛隆寺、室生地区では染田・多田・深野・下笠間（上笠間）、三本松・長瀬・元三などで行われている。この行事に牛玉（ゴウオウ）宝印の札が縛られ、春に田の水口に立てて豊作を祈る。



室生深野



榛原額井



上宮奥のカンジョウ縄にまつわる歴史的風致

【だんじゅう（ランジョウ）】

五穀豊穰と健康長寿を願い、開催される行事。『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））には「オコナイ 呼び名、行われる日、行事の内容などは集落ごとに違っているが、内容の点では同じものである。（中略）染田・多田・深野と旧三本松の中村・長瀬・琴引・元三と、現在は廃絶した上笠間・小原・滝尾・滝谷がある」と記され、このころには行われていたことがわかる。

染田では「だんじゅう」と呼び、毎年1月4日、午後2時から室生染田にある春日神社の社務所に集まり、お札と寿命帳を用意する。寿命帳とは、だんじゅうで奉納するお供えの目録と、その年の氏子総代（4名）の名前、各世帯で最も年長者の名前と年少者の名前が記されている。東の垣内と西の垣内で1冊ずつ用意する。

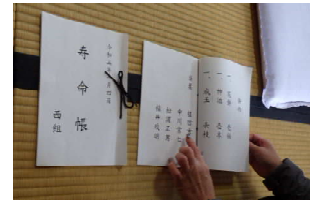
お札は、「十輪寺 牛の玉 宝の印」と書かれ、朱印が押される。朱印には明治年間の墨書が残る。

次に、みと（田の取水口）に立てる漆の棒の飾り（ごおうぼう 牛玉棒という。）を作る作業を行う。集落の世帯数分の漆の棒を山から集め、50 cmほどの長さに切り揃え、割る部分だけ皮を剥く。工具で三つ又の割れ目を入れ、細く折ったお札を挟む。用意した棒に全てお札を挟み、片付けて直会をする。

ひと段落したところで、牛玉棒を十輪寺本堂へ移し全員で般若心経を読誦する。読誦が終わると、本堂前に出された木の台の前に藤の枝を両手に持って何人かが座り、最も若い氏子総代が酒を持って靴を履く。

しばらくすると、「ランジョウ」という掛け声で藤の枝で木の台を叩き始め、その音とともに総代は酒を持って、集落の中ほどにある山の神まで走る。祠の前で一礼して酒を撒き、走って十輪寺へと帰る。総代が帰ってくるまで、本堂に残る人は木の板を叩き続けている。

総代が戻ると、本堂内でサイコロ状に小さく刻まれた餅の切子が撒かれ、参加者はそれを拾う。本堂に供えられていた漆の棒は、希望する氏子に配布され、3



寿命帳



お札に朱印を押す



朱印の墨書



枝の先を割る



直会、三種と酒

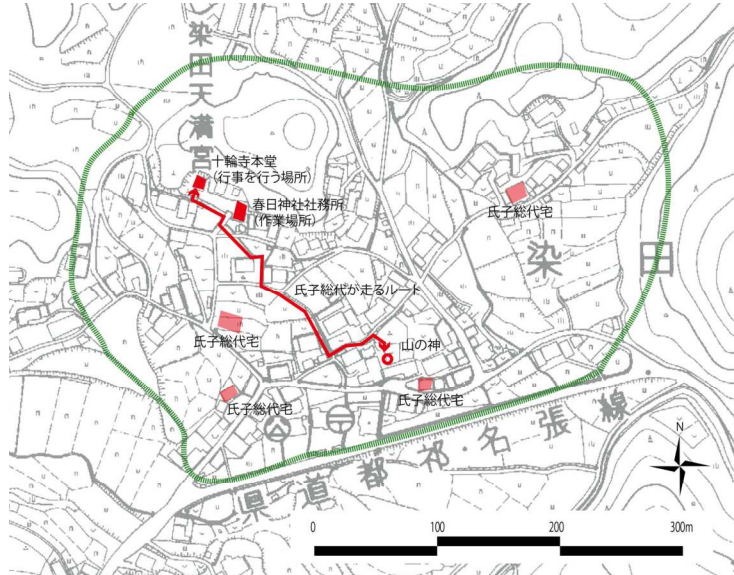


般若心経読誦



ランジョウの掛け声とともに、総代出発

月中旬にみとに飾られる。(現在はみと祭りをを行う家がないため、5月の植え初めのときに、田の端に挿すようになった。)



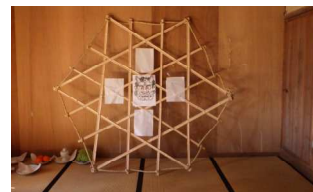
だんじゅうで氏子総代が参拝する山の神の位置



山の神参拝風景



配布する餅の切子



的は役員が用意



今年の鬼は上出来



竹を割り、紙を挟む



矢の形にし、束ねる

【結鎮（鬼の目玉打ち）・植え初め】

結鎮は五穀豊穡と悪疫退散を願い、開催される行事。

『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））によると「オニノメノタマウチと呼んでいる染田では、十日の午後四時から大当屋が導師になり（以下略）」とあり、このころには行われていたことがわかる。現在は1月10日午後2時に染田の春日神社の社務所に集まり、最初に水口に飾る竹と柳を氏子たちで作る。

竹を割り、紙を通して矢の形にする。長い矢を7本、短い矢は2本を紙縫りで束ねて集落の世帯分用意する。

次に、柳の枝を2本、藁で束ね、これも集落の世帯分用意する。竹と柳の作業が終わったら、3種と酒で直会をする。

ひと段落したら十輪寺本堂へ移動し、事前に役員が作っておいた的を出す。竹と柳の飾りとお供え物を的の前に並べ、参加者全員で般若心経を読誦する。

読誦が終わったら、長い竹の矢を出し、弓に番えて（つが）東西南北と天地、最後に鬼の目に向けて射る。射た矢

は拾い集められ、鬼の的とともに翌日のとんどで焼却される。また、竹と柳の飾りは希望する世帯に配られ、5月の植え初めの際に、田の端に立てられる。残った飾りは、本堂の縁の下に保管される。



柳を藁で束ねる



三種で直会



祭壇まわりの様子



般若心経読誦



まずは東へ



次は西→南→北



天→地→鬼の的



鬼の的に射る



残った飾りは本堂の縁の下に保管

植え初めは、かつては3月の社日（春分・秋分に最も近い戌の日のこと）に、みとに竹の矢（結鎮で作ったもの）を立てる「みと祭り」という風習があった。近年は農協で苗を購入するところが殆どで粃まきをしないので、この風習を行った田は令和3年（2021）時には確認できなかった。

ただし、田植えを始めるときに行う風習、「植え初め」は残っている。田の隅に花と柳の枝（結鎮で作ったもの）・牛玉杖（だんじゅうで作った漆の棒の先端に牛玉宝印を押した札を挟んだもの）を挿し、おかきなどの



フキ俵を作る



お盆にお供えを置く

お菓子を一升枧に入れて^{ふきだわら}蒔俵⁴¹を供えて「令和3年の豊作を祈ります」と唱えながら手を合わせ、まず12本の苗を植える。次に植えた苗のところに青い茅（ススキ）を挿す。これは、茅のように苗が大きく丈夫に育つようにとの願いが込められている。

田に挿した枝や花は、そのまま残しておき、お供えはお下がりとして植え初めのお祈りのあとに頂く。

ここ数年は、花とお供えを省略し、田の隅に柳の枝・牛玉杖を挿すのみの家がいくつか見られる。また、みと祭りがないため、植え初めのときに柳や牛玉杖と一緒に、竹の矢も田の隅に挿している。

集落内を歩いていると、山あいの僅かな平地に水を湛えた水田が広がる。植えて間もない苗は丈が低いので、田の隅に挿された枝はひときわ目を引く。



植え初めをしている田の分布（令和3年5月時点）



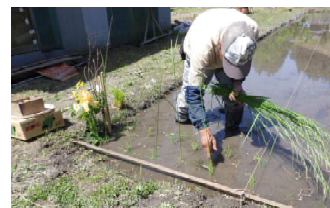
フキ俵を作る



お盆にお供えを置く



お供えをして合掌



稲を植えて茅を挿す



枝や花は挿したまま



別の田の植え初め

⁴¹ 蒔俵は、大和高原や伊賀地方の田植えの時期に作られるもので、煎り大豆と塩で炊いたご飯をおにぎりにして軸のついた蒔の葉に包み、蒔の筋や藁で先端を結んで俵状にしたもの。染田は生米のまま包む。

【平尾のオンダ祭り・野依のオンダ祭り】

いずれも県指定文化財（無形民俗）

オンダ祭りは、田づくりの所作を模擬的に行うことで、その年の豊作を願う神事で、宇陀市では大宇陀平尾と大宇陀野依のオンダがよく知られている。

平尾は1月18日の夜、平尾水分神社の本殿前に舞台を設け、集落の東と西それぞれから一人ずつ選ばれた大頭と小頭を中心に、白装束を纏った「ショトメ」と呼ばれる子供たちが田植えの一連の所作を演じる。そのあと小頭に抱えられて「若宮さん」と呼ばれる翁面を付け全身にたくさんの紙縊りが結ばれた人形が登場する。自分の体の調子が悪い場所と同じところに結ばれた紙縊りを貰い受けると、その場所が良くなるといわれている。

弘化2年（1845）正月の御田植本（『高岡宗三郎家文書』）に御田の唄と次第が記されており、現在も同じ内容でオンダ祭りは行われている。



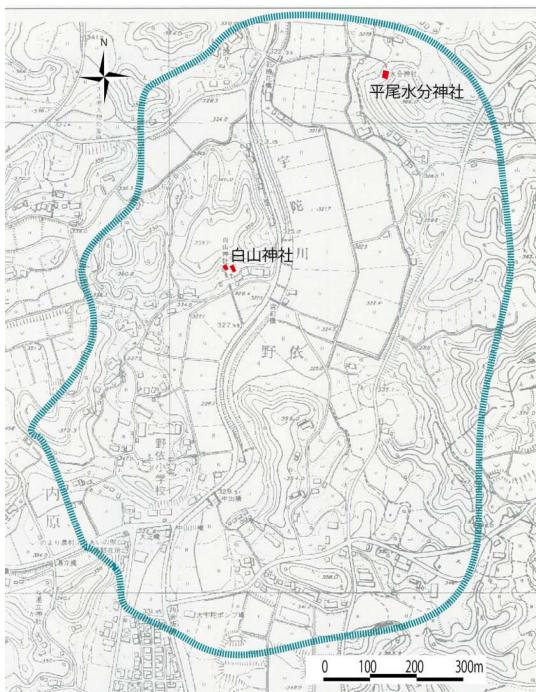
平尾のオンダ祭り



若宮様登場



野依のオンダ祭り



平尾・野依のオンダに関する歴史的風致

平尾の西に隣接する大宇陀野依では、5月5日にオンダ祭を行う。この日は神様の田植えの日のため、野依の住民は田植えをしてはいけないと言われている。集落のほぼ中央に位置する野依白山神社境内で祭りが行われ、大頭・小頭・荒鋤・万鋤・小鋤・苗籠・植女・ケズイ配り・囃子方が、境内の各所で歌を歌いながら順番に所作や舞を繰り広げる。かつて祭の日は、女性の休息日であるとされていたことから、舞を踊る植女の役も男性である点がこの祭りの大きな特徴である。『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和34年（1959））によると、大正時代までは旧暦5月5日に行われていたが、のちに新暦5月5日に改めたとある。

【田の虫送り（下笠間）】

虫送りは、虫オクリ（松明を掲げて集落内を歩き祈禱札を依代よりしろに悪霊・害虫を集落外へ送り出す）と虫祈禱（集落のはずれに祈禱札を立て、害虫退散を祈願する）のふたつの行事がひとつになって行われている。

日取りは6月20日前後に行われるところが多い。『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））には、「室生村で今なお行事を盛大に続けているのは、上笠間（田部・下出・上出）・下笠間・多田・小原・染田・東無山（以下略）」とあり、このころには行われていたことがわかる。

現在は、多田・染田・小原・上笠間・下笠間の順に、西の大字から東の大字へと、1日ずつ日程をずらして実施している。令和3年（2021）の下笠間の虫送りは6月20日に実施された。

18時45分に各家庭から松明（各家庭で自作）を手に持った人が集まり始め、19時に虫供養のお札を掲げた住職を先頭にして、集合場所の三差路を出発。ドーン・ドーン・ドンドドドン、と鳴る太鼓に続き、同じリズムで法螺貝を吹き、住職の鈴の音が続く。

各戸の家長が松明に火をつけ、東へ向かって進みだすと、ほかの家族もそのうしろをついて歩く。

田んぼの間を抜け、笠間川沿いに山裾を15分ほど歩くと市境に到着し、下笠間の阿弥陀磨崖仏付近の広場に松明を積み、虫供養の祈禱札を立てる。全員で般若心経を唱えて合掌、三差路に戻り解散する。



三差路に集合し、松明に点火する。



住職が掲げて歩く虫供養のお札



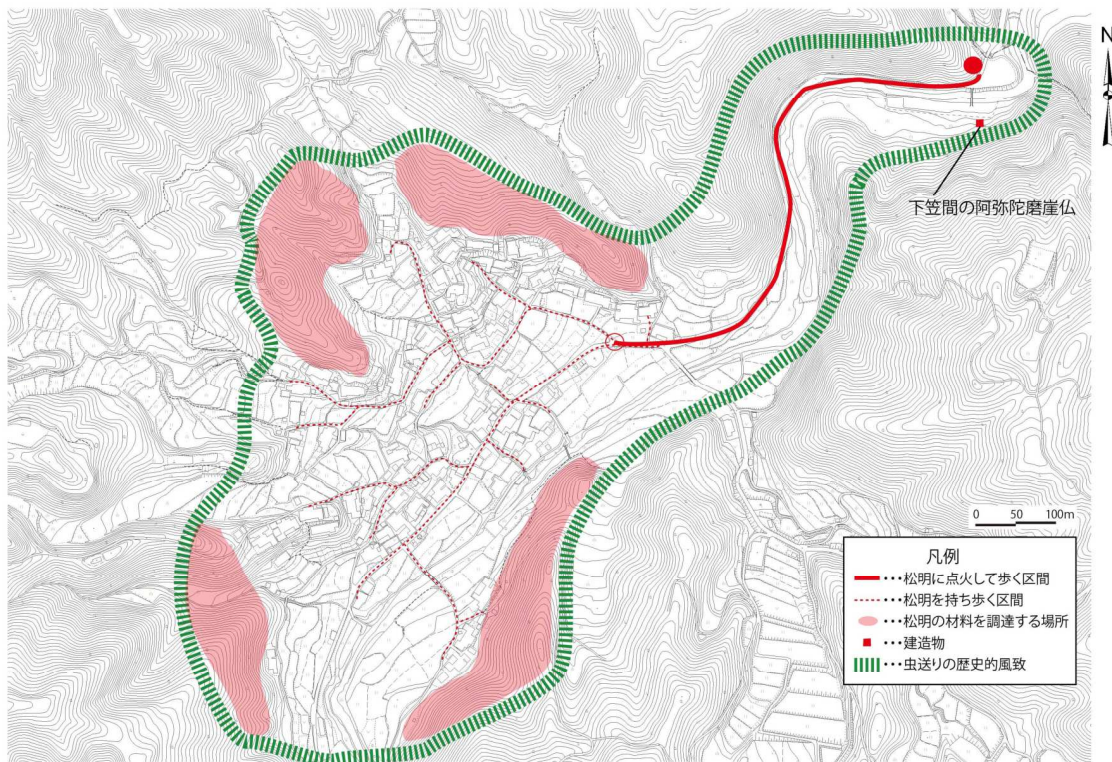
順番に火をつける



夏至が近いので夜でもまだ明るい



松明を積み、読経。



下笠間の虫送りのルート

【菅原神社秋祭り（通称：田原の火祭り）】

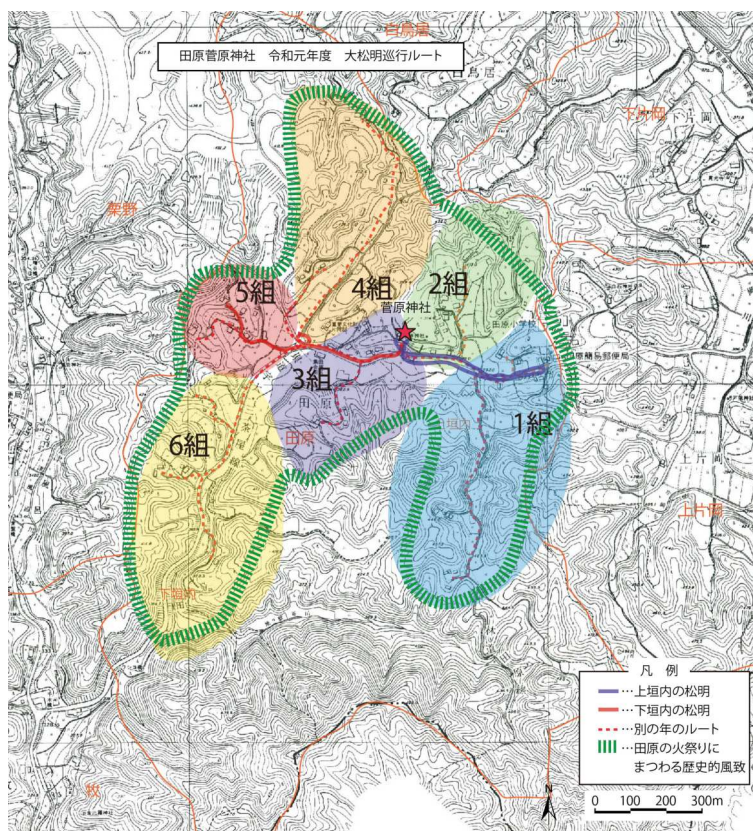
大宇陀田原の火まつりは、一年の豊作に感謝を捧げる秋祭りの宵宮に行われる行事で、10月の第4日曜日の夜に行われる。『大和国吉野郡田原村誌』（明治15年（1882））には、「式外村社菅原神社（中略）祭日九月廿四日」と紹介されており、現在は月遅れでの開催となっている。

田原の垣内は6つの組に分かれ、1～3組を上（上の区、上の部、上之組ともいう）、4組～6組を下（下の区、下の部、下の組ともいう）としている。秋祭りの責任者となる当屋は、上と下から1名ずつ選出する。

翌年当屋を務める者を相当屋と呼び、当屋も相当屋も垣内の家々が輪番で務めている。祭典は宇太水分神社の神職が務める。

火まつり当日は早朝から集会所に集まり、垣内の者が総出で御供を搗く。10時に「手祝い」と称して休憩がとられ、「手祝い餅」（あんころ餅）が振舞われる。

休憩後は、残りの御供を搗く班、上の当屋宅へ大松明を作りに行く班、下の当屋へ大松明を作りに行く班、神社の清掃に向かう班、の4班にわかれて火まつりの準備を行う。作業は概ね12時過ぎに終了させ、集会所で祝宴となる。



(燈登りのルートと上垣内・下垣内の範囲)



集会所の御供つき



手祝い餅



大松明製作中

2時間程度で祝宴は終わり、^{とうやがいと}当屋垣内（当屋がいる組）以外の人は帰宅する。当屋垣内の人は御供餅の粉をふるい、これの一部を神社に持っていく。この作業を「御供あげ」と言い、ここまで終われば、当屋垣内の人も帰宅する。

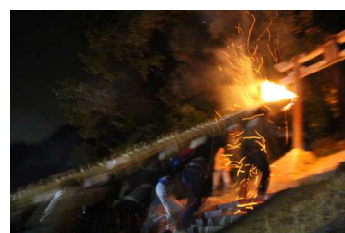
暗くなると、^{とのぼ}燈登りが始まる。上の当屋、下の当屋でそれぞれ1本ずつ大松明があり、村の若い者がこれを担いで集落内を練り歩く。

神社から遠い方の当屋宅を19時に大松明が出発する。「ヨイト、カイト」の掛け声とともに大松明が進み、そのうしろに御供桶、高張提灯、提灯を下げた参列者が続く。

一通り集落内を練り歩いた大松明は、最後に菅原神社前にて合流し、掛け声とともに急な階段を一気に駆け上がる。境内に上がった大松明は、御供まきが終わるまで本殿の左右に立てられる。



集落内を練り歩く松明



階段を駆ける大松明



境内に立てた大松明

尚、大松明が練り歩くルートは年によって異なる。理由は、上・下それぞれその年の当屋宅から出発し、ほぼまっすぐ菅原神社を目指すためである。長距離を歩くと大松明が燃え尽きるため、神社から遠い家が当屋になると、その年は自然と急ぎ足になる。十数年ほどで当屋は一巡し、大松明の出発点が集落内のほぼ全ての家を巡ったことになる。

続いて神事が行われ、お祓い、^{はら}献饌^{けんせん}、祝詞^{のりと}、玉串奉納、当屋の引継ぎ（トワタシと言ひ、上の当屋が用意した小豆ご飯を当屋・相当屋の順に取り分け食べる儀式を行う）、撤饌にて終了する。この祭典は3名の氏子総代により取り仕切られる。

神事が終わると御供撒きが始まる。上下の当屋と相当屋が神社本殿の玉垣の上から御供を撒く。普通の大きさの御供の合間に投げられる「カサゴク」と呼ばれる薄い大きな御供餅は争奪戦になり場が盛り上がる。21 時頃には大松明が倒され、火を消し、一連の行事は終了となる。（大松明の燃えかす拾いや大松明の処理、祝宴の後片付けは翌日、上下の当屋がする。）

片付けの翌日、菅原神社の分霊屋形「オスヤ」の引継ぎが行われる。「オスヤ」は、木箱のなかにお社が作られ、正面にしめ縄を飾ったものである。当屋の任期中に当屋宅で預かり、床の間に祀られる。当屋は、毎日神社へ行くかわりに自宅に祀られた「オスヤ」へ^{しきみ}檜や洗い米などを供え、参拝する。

新任の当屋（元相当屋）が前任の当屋宅に「オスヤ」を受け取りに行く。「オスヤ」を受け取ったときから1年間、当屋の仕事にあたる。

前任の当屋宅には冷酒と簡単な肴が用意され、元当屋から「一年間、よろしくお願いします。」と言ひ、新当屋（元相当屋）は「承りました。」と答えてオスヤを受け取る。新当屋は受け取ったオスヤに息がかからないようにするため、口には榊の葉を1枚くわえて家まで一言も喋らずに帰る。今は車で移動するが、昔は徒歩で受け取りに行った。提灯や法被など火祭りで使う用具も全て引継ぎ、いずれも当屋宅で保管される。



御供まき風景



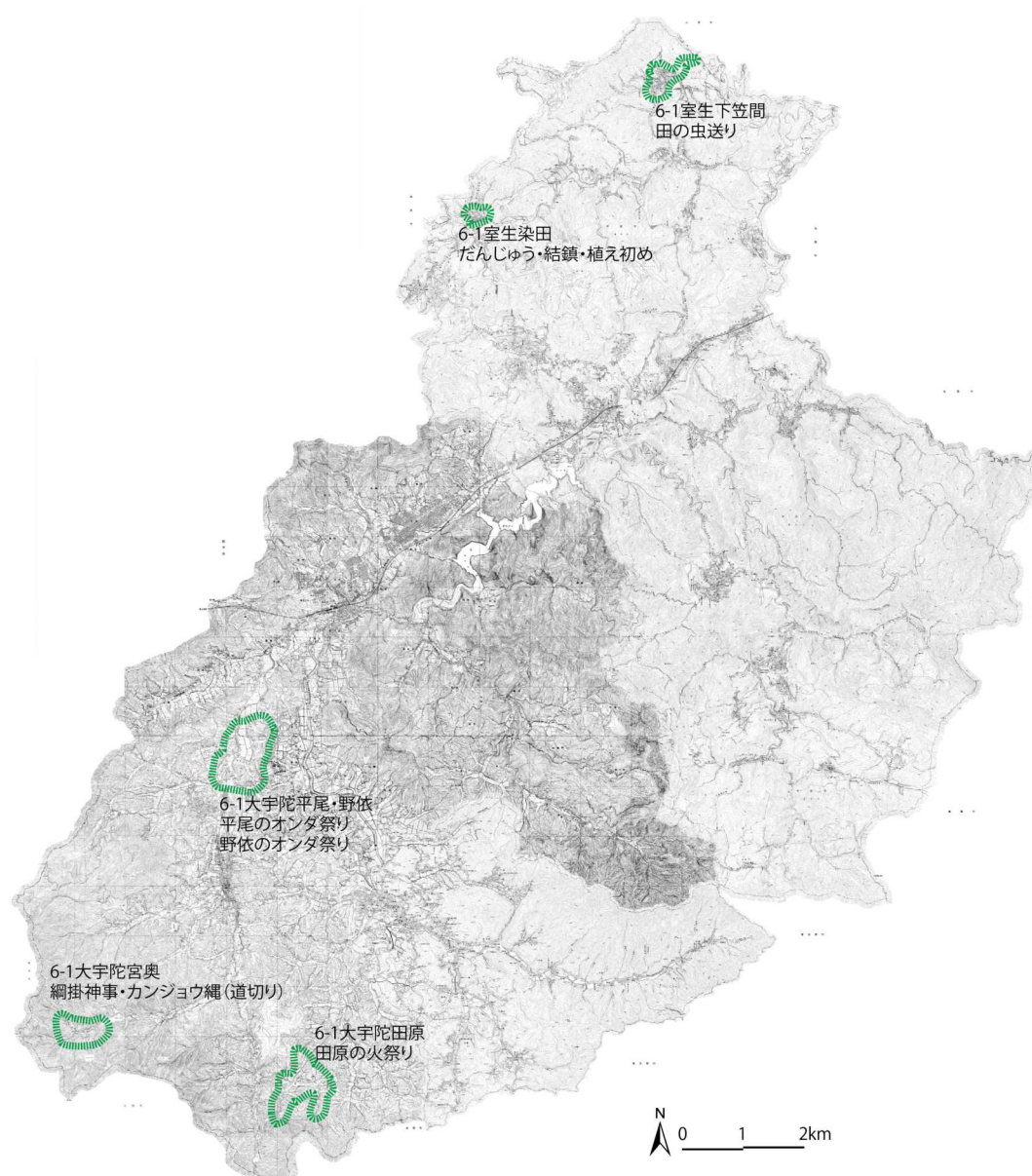
倒した松明



床の間に安置されたオスヤ

(4) おわりに

ここでは、宇陀市で稲作を行う農村集落に残る祭礼行事を挙げた。現在でも、宇陀市内では茅葺の民家や鎮守の森など、昔ながらの農村集落の環境を舞台に米作りは続いている。また、田原の火祭りや染田の虫送りなど、稲作にまつわる伝統的な風習が地域の人々に受け継がれている。こうした良好な歴史的環境と、古くから伝わる風習が相まって、稲作にまつわる歴史的風致が形成されている。



宇陀市の稲作に関する歴史的風致の図

コラム5 フクマルと、とんど（どんど）

フクマルは、大晦日に行われる行事で、竹を組んで周囲に藁束を重ね、各世帯からお供え（藁のお飾りと葉の上に乘せた米）と松明を持ちより、全世帯が揃ったところで藁に火をつけて燃やす。燃え残った火はまた松明に移して家に持ち帰る。室生三本松、室生砥取などで行われている。

とんど（地域により「どんど」と呼ぶところもある）は、小正月の行事のひとつで、1月15日前後に行われる。フクマル同様、竹を組み周囲に藁束を重ね、お正月に家で飾ったしめ縄や書き初めも一緒に燃やす。

市内の大半の地域に残っており、恵方から点火する、など地域により決まった作法がある。熾火（火が燃えたあと、炭が赤くなった状態）で餅を焼くのは共通しており、竹の先に餅を刺して焼くところもあれば、餅焼き網を竹の先に固定したり、網を吊るなどの工夫がみられる。熾火を持ち帰り雑煮や汁粉をこしらえる家もかつてはあった。この一年の健康を祈り、皆で餅を食べるのである。

農村部では、田の中央で大々的に燃やしているが、木造家屋が密集する町場では、公園や神社の境内、川の中州などに小さな山を作り、火の強さを調整しながら、とんどをする。

下笠間では、大人が作るとんどのほかに、こどもだけでつくとんどがある。



町場のとんどの様子



フクマルのお供え



三本松のフクマル、点火前の様子



榛原母里のとんど、点火前の様子



熾火で餅を焼く様子

コラム6 ^{こうしん} 庚申さん

庚申さんとは、^{こうしん}十干と^{じっかん}十二支を組み合わせた暦法の60日ごとに巡ってくる庚申の夜に、^{さんし}三尸という虫が睡眠中に体を抜け出て天帝にその罪を報告するため命を奪われるという信仰に関連する行事である。

健康長寿を願い、虫が体から出て行かぬよう、組に属する各世帯主が庚申さんの所に集まり般若心経を唱えたあと、当番の家に集まって宴席を囲み、日が変わるまで寝ずに過ごす。

『上龍門村風俗誌』（大正4年（1915）/上龍門村）によると、「庚申 当日ハ精進料理ニテ油揚・小豆飯ヲ食ヒ、且ツ寒ニ作りシ寒粉餅作り庚申ニ供ス」とある。

庚申講は、宇陀においては農村部に比較的好く残っている行事で、庚申さんの石碑を建てて祀るほか、庚申の夜は当番宅の床の間に庚申さんの掛け軸を飾り、飲食を共にするのが殆どだが、中には閏月に小旅行をする組もある。次第に簡略化されて、22時には解散する、時間帯を変えて日中に宴席を持つなど、参加しやすいように工夫しながら継続している。



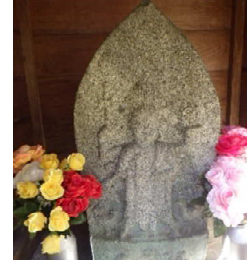
4組の庚申



1組の庚申



6組の庚申



5組の庚申



庚申の掛け軸（榛原長峯）



庚申講の様子（榛原長峯）

6-2 黒大豆の生産にまつわる 祭礼行事ゆかりの歴史的風致

(1) はじめに

宇陀市では田の法面や畑地を利用し、豆類の栽培をする農家が多く、白大豆の「宇陀大豆」、小豆「宇陀大納言」等が現在でも生産されている。近年、精力的に生産されているのが「黒大豆（通称「黒豆」）」だが、その歴史は古く『宇陀松山藩御用部屋日記』天和元年（1681）3月8日の段に、

“京へ津川様よりおいし様為御見廻御飛脚小者一人遣ス

そは粉八升五袋ニ

丹とう酒一升五合壺樽ニ入

右之便ニ助進方より申来候品々上ス覚

黒大豆貳升 自然薯蕷一かご

午房三は 志ゐたけ三升

右之通安右衛門六右衛門方より指上セ候事、

とあり、京都へ嫁いだ若くして夫を失い傷心の娘、お石（織田長頼の七女）へ、母の津川がお見舞いの飛脚として小者を遣わす際に、届けた品々の中に、黒大豆の表記がある。これにより既に宇陀では黒大豆が生産されていたことがわかる。

豆類の栽培は、農家の畑地所有率が高いので、畑地での栽培が多く、傾斜畑の栽培が多いので機械化が進まず、手作業による小規模栽培が多い。また、連作ができないため、年ごとに栽培する場所が変わる。

枝豆として収穫する場合は10月中旬頃となる。大豆として収穫する場合は12月頃、乾燥のためハサ掛けした様子を見ることができる。

これまでの間、在来種を育ててきたが、平成16年（2004）に、大宇陀町と姉妹都市である柏原町より、粒が大きく育つ「丹波種」の種が贈られ、現在はこの「丹波種」の黒大豆が主に栽培されている。農業協同組合の黒大豆小豆生産部会に加入している農家が73軒で（令和2年（2020）年11月時点）組合に未加入でも黒大豆や小豆を栽培している農家もある。出荷用の黒大豆については、「丹波



黒大豆



栽培中の黒大豆



黒大豆 さやから外す作業

種」が多いが、農協に属さない農家では在来の黒大豆を自家用で使う分として、引き続き栽培しているとみられ、実際にはより多くの農家が黒大豆の栽培に携わっている。

（２）建造物

【野依白山神社】（豆焼き神事の舞台）

5-1（２）建造物を参照。

（３）活動

【豆焼き神事】

黒大豆に絡んで、宇陀では大宇陀野依の白山神社で豆焼き神事が残る。煎った黒大豆を炭火で焼き、その焼け具合の様子から一年間の天気を占い、農作業の目安とする行事である。

大宇陀野依の白山神社で行われるこの行事は、『大宇陀町史』（昭和34年（1959））に「2月1日は二ノ正月といって、（中略）年越しには年男が黒豆を煎り、まず氏神へ供えて豆撒きをし、家族の者は年の数だけの豆を食べ、それで年をとったという。（中略）この晩に野依では神社でマメヤキとて、その年の天候を占う」とある。

現在は2月3日の夜と開催日が固定されており、宵の口から氏子が三々五々集まってくる。手には自宅で煎った黒大豆を包んだ半紙を持っており、野依白山神社本殿に置かれた三宝に豆を供えてお参りしたあと、-の三宝から豆をひと掴み取り、持ち帰る。

19時30分から神社の役員による祭典で般若心経を唱え、お供えの黒大豆で満ちた三宝をもって社務所へ移動し、煎り黒豆を12個選んで炭火で焼く。（閏年には13個置いて焼いていたが、現在は閏年でも12個。）焼けるまでに2～3時間ほどの時間を要するため、



煎り豆を火鉢で焼く



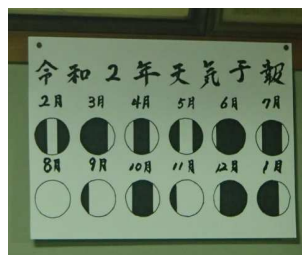
焼け具合を判定中



判定した焼け具合を清書する



区長による説明



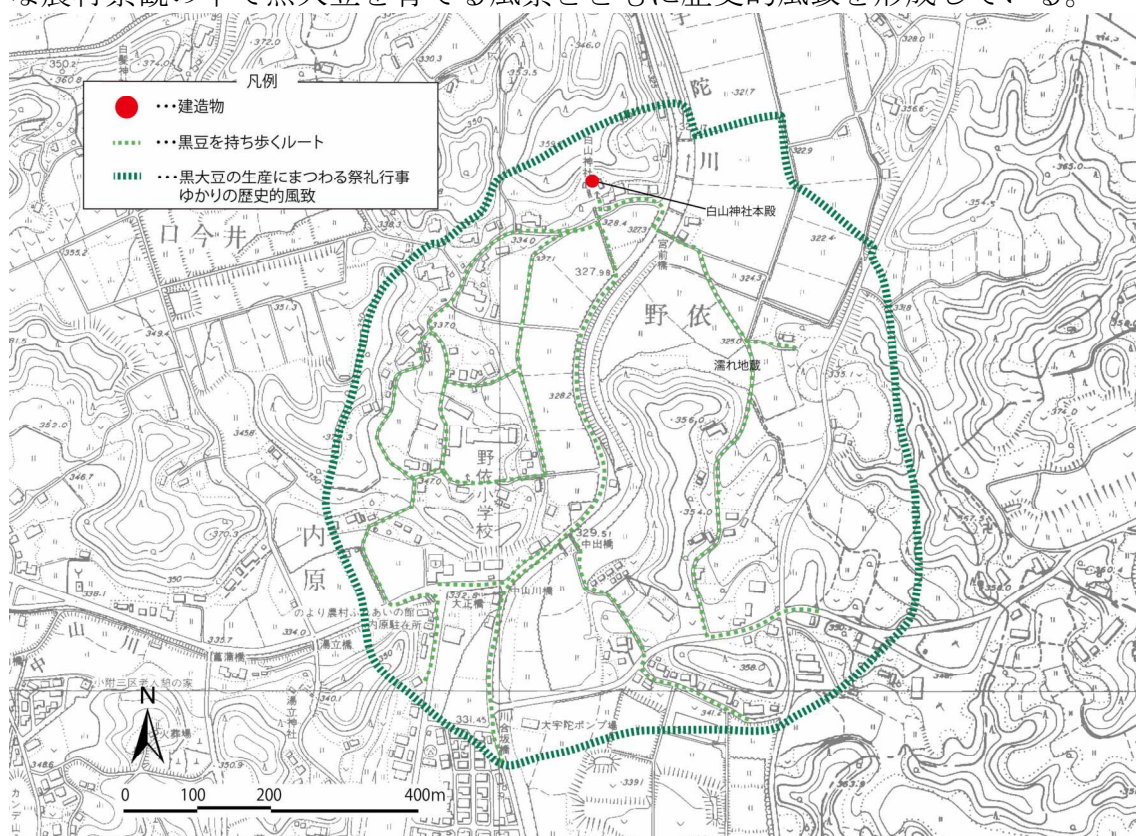
令和2年天気予報

宴席を囲み、頃合いを待つ。だいたい焼けたと判断されたところで火鉢から豆を下ろし、用意した画用紙に清書する。

図は焼け残りが黒で雨を表し、燃え尽きて白い部分は晴れを表す。1個の○がひと月分の天気の変り合いを示し、区長が全員に対して解説をする。「令和2年(2020)は10月半ばから雨が続くので、稲刈りは早めに済ませましょう。」と農作業に関する部分は皆熱心に聞き入り「5月上旬は雨…、オンドは雨かもしれません」というと、会場内から残念がる声が広がった。

(4) おわりに

山の合間のわずかな農地や斜面を利用して作られる黒大豆。各家庭で行われる節分の行事に加えて、大字の人が今年とれた黒大豆を持ち寄り野依白山神社で繰り広げる豆焼き神事等、黒大豆を使った伝統行事が現在も受け継がれ、良好な農村景観の中で黒大豆を育てる風景とともに歴史的風致を形成している。



黒豆の生産にまつわる歴史的風致の図

6-3 宇陀の山の営みにみる祭礼 行事ゆかりの歴史的風致

(1) はじめに

山間部である宇陀は、農地が少ないことから、農閑期には山へ入って柴刈りや炭焼き、下草刈りや枝打ちなどの山仕事をして生計を立てている農家が多くみられた。『田原村明細書上帳』（田原・片岡彦左衛門氏文書、明治4年（1871））には「産業 柴割木山稼」とあり、『大和国町村誌集』（川井景一編、明治24年（1891））では、半坂・内原・西山・本郷・宮奥など集落内に山を持つ多くの大字で物産の欄に「薪」「炭」と記されている。

また、厳冬で霧が発生しやすいという気候風土であることから、良質な木材を産出できる環境にある。『風俗志料』（大正4年（1915）/神戸村）の「三林業」には、種子の取り方、植付前の準備、植林方法と適切な時期、下刈りや間伐枝打ちの方法から伐採・運搬方法まできめ細かい解説が紹介されており、神戸村（現在の大宇陀宮奥・関戸・下宮奥・大東・黒木・本郷・中庄・西山・迫間・拾生・春日・小附・岩室・芝生・嬉河原・半坂・馬取柿・麻生田・内原・口今井・下竹・野依・平尾・五津を含む区域）では農業の戸数六五六戸ある中で、山林業に携わる戸数は「専業ナシ兼業二〇〇戸」とあり、三割の農家が山林業に関わっていた。

間伐材はシイタケ栽培の「ほだ木（菌を打ち込むための木）」として使うほか、薪にされた。山仕事の際に入手した柴や薪は、台所での煮炊きや風呂の湯を沸かすために使っていた。昔の風呂は薪で沸かすものしかなかったが、ガスや灯油、電気などの選択肢が広がった現在でも、燃料を入手しやすい土地柄のためか、薪でお風呂を沸かす家庭が多く残っている。宵の口には、薪で風呂を沸かす家から細く煙があがり、周辺に木の燃える匂いが漂う。

(2) 建造物

【大山祇神社 石碑】

古市場の旧宇太小学校の南向かいに小高い丘があり、その隅にしめ縄を巻いた一本の大木が立っている。これを御神木とした神社で、勧請した時期は不明だが昭和 43 年（1968）8 月に、奉賛講が建立した石碑がある。御神木の前になだらかに傾斜した広場があり、木製の鳥居が建てられている。

毎年 12 月 7 日に鳥居の前にて「山の神」を行う。



石碑の裏面

【行者堂】

木造平屋建、切妻造、棧瓦葺。小原の東端にある小高い山の頂に、役行者の石像と覆い屋が建っており、地域の人はこれを行者堂と呼んでいる。

毎年 1 月 7 日に行者堂の周囲で「山の神」を行う。



行者堂外観

【小原 八幡神社】

小原の西端にある小高い山の頂にある神社。来歴は不明だが、石段の踊り場に置かれた手水の側面に、大正 12 年（1923）に奉納したとある。長い石段を登って境内に上がると、視界が開けて集落全体を見渡せる。本殿、社務所が並んでおり、その脇を通過して御神木のところへ向かう。



小原八幡神社の手水

(3) 活動

【山の神（古市場）】

菟田野古市場の山の神は、現在木材関係業者が主体となって行われている。旧宇太小学校校舎の南にある大山祇神社が会場となる。祭典の日に近い日曜日に、銘木業者の土場に集まり新しいしめ縄を作り、しめ縄の掛け替えを行ったあと、12月7日の朝、祭典が開催される。

令和2年度の準備は、12月5日に森庄銘木の土場で行われた。藁を叩いて柔らかくしたのち、8m程度の長さになるまで縄をなう。中央部は気持ち太目に作り、正面に房を3つバランスよく配して完成させる。鳥居につけるしめ縄も作る。

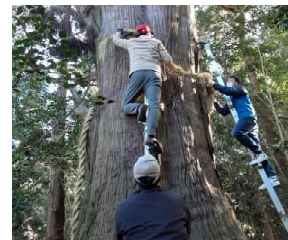
完成した縄を持って大山祇神社へ移動し、御神木に巻いてある古い縄を外して新しい縄にかけかえる。縄が巻けたら、縄に紙垂をつける。外した縄は鳥居の外に積み、祭典のときに燃やして暖をとる。

12月7日の朝、関係者が御神木の元に集まったところで、祭典が始まる。室生のようにカギヒキ⁴²はなく、海のもの（しらす干し・鯖）と山の物（みかん・大根・水菜・サツマイモ）と酒、米を供え、参加者が順番に玉ぐし奉納をしてその場で直会をする。個人的にオリカケダル（「わらづと」という）という篠竹で作ったお供えの入れ物に、酒と肴を供えている人もいる。

古市場の山の神は、『菟田野町史』（昭和43年（1968）編集代表者 池田末則）に、「十二月七日は古市場と松井」と記述があり、このころには活動があったことがうかがえる。



しめ縄準備風景



縄の掛け替え

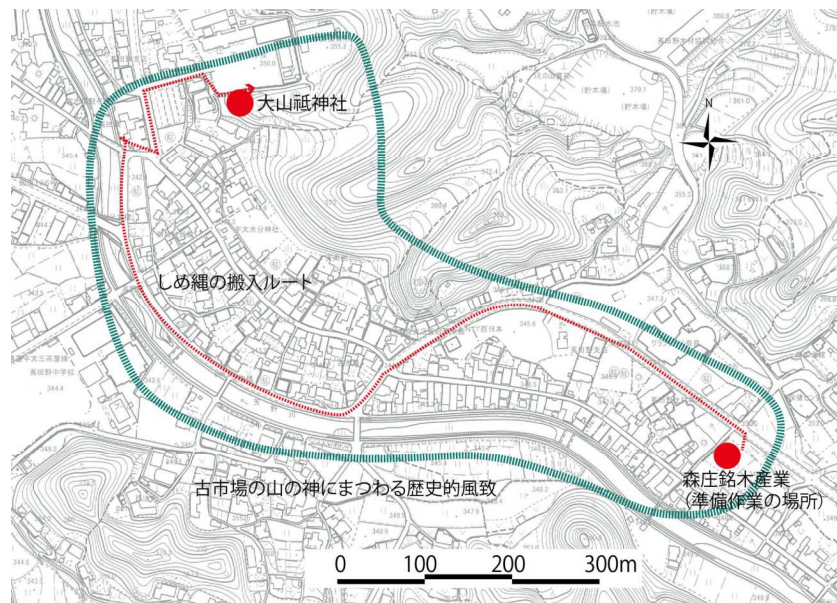


祭典の様子



オリカケダル（わらづと）

⁴²御神木の枝に、かぎ型の小枝を掛け、何度か引く動作をすること。枝を引く際に、「西の国のイートワタ、東の国のゼーニカネ、ひっぱって、ウチのクラヘドッサリコ」と唄う地域もある。



山の神（古市場）にまつわる歴史的風致の図

【山の神（小原）】

室生小原の山の神は、集落の中央を南北に流れる川を境に東西に分かれて行っている。東側は行者堂の前で、西側は八幡神社の西にある大きな木のそばで行われる。

朝7時過ぎに各世帯からお供えとカギヒキの棒を持って、男性が集まってくる。木の根元にはお盆に入れたお供え（小判型の餅、干し柿）を置き、木の枝に棒を引っかけて何度か引いて、手を合わせる。東側では、カギヒキをした後に、枝の先端に紙垂とみかんをつける。持参した藁束に火をつけ、暖を取りながら集まった人で談話をする。

焚火が尽きるころ、お供えを下げて解散となるが、東側のカギヒキの棒についてあるみかんはそのまま外さずに置いておく。（学校帰りの子どもたちのおやつになる。）

『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和41年（1966））に山の神の記事があり、当時から行われている行事であることがわかる。



西側の山の神



御神木



カギヒキをする



小原の山の神にまつわる歴史的風致



東側 行者堂前のお供え



ミカンを吊るす

【磨き丸太・銘木等の生産】

宇陀は霧が多く、磨き丸太用の杉を育てる環境に適している。本場は京都の北山だが、そこで学んで吉野・宇陀でも取り組むようになったと伝わる。

『銘木大観』（昭和30年（1955）/北尾春道 著）の広告欄に、宇太町古市場に所在する三共商会と、銘木銘竹業者案内に森本庄作商店という銘木屋が掲載されていたことから、このころには生産販売が行われていたことがわかる。

現在、床柱用の磨き丸太の生産は、11月～3月の寒い時期に行われる。気温が10度以下になってから始め、3月は15度になるころまで作業を行っている。

広い土場に、伐採した杉の丸太を持ち込み、高圧洗浄機で皮を剥く。（昔はヘラを使って剥き、砂で磨いた。）そのあと、チェーンソーを使って背割りをして、ヒビ割れが表面に出ないように加工する。そして日当たりのいい場所に立てかけて飴色になるまで天日に当てる。昔は、又首状に組んで、大量の磨き丸太を干していた。現在は作業所の横に一列に立てかけ、天日干しを行っている。背割り作業も天日干しも、道路脇の広い場所で行っているため、11月に入ると作業風景を見ることができる。

4月～5月にかけては、「海布^{かいふ}」という磨き丸太（垂木やテントの棒に使う）を間伐材で作る。

6月には錆丸太を檜、ヒバで作る。山で木を倒し、その場で皮を剥いて雨に濡らしておく。カビなどが模様を作るので、天気を読み、雨が降る2日前に山へ行き作業をする。

7月は杉皮の生産をする。土用の間に樹齢70～80年の杉の皮を山で剥き、その場に積み発酵させる。こうして作られた杉皮は撥水効果が期待でき、外壁や水回り、茶室等で需要がある。かつては屋根材としても使われた。



『木材大観』広告欄
(森庄銘木提供)



又首状に組んだ磨き丸太
(森庄銘木提供)



高圧洗浄機で皮を剥く



チェーンソーで背割り



管理前の森



林道をつける



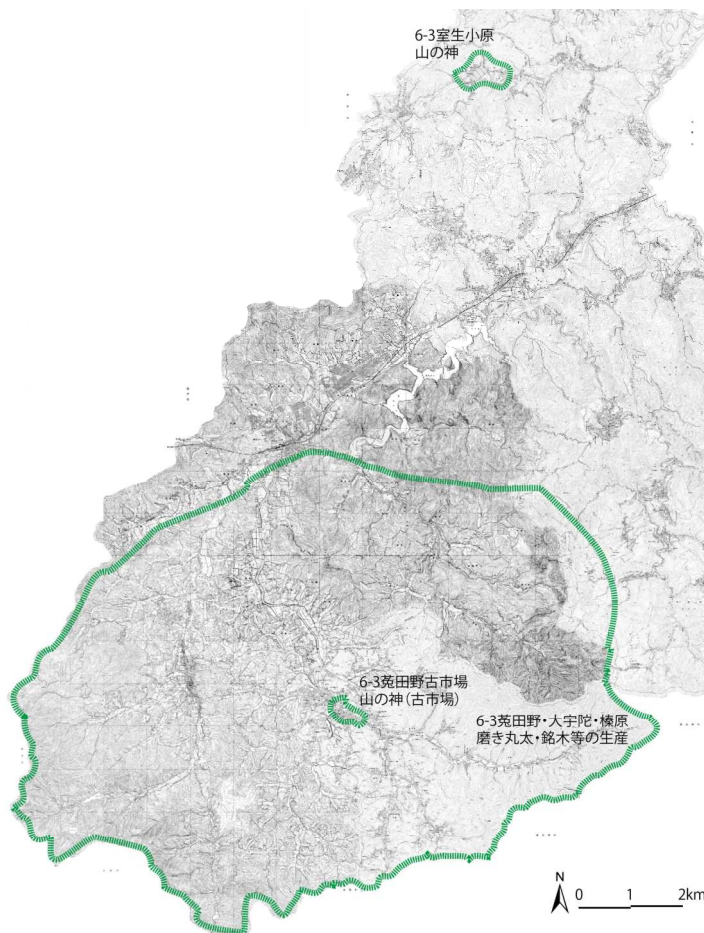
手入れされた森

(4) まとめ

山での仕事は、少しの油断で大怪我に繋がるような危険を伴う仕事である。また、天候の良し悪しが製品の仕上がりに影響を及ぼすため、自分たちの努力

だけではままたならない部分がある。

12月～1月にかけて、山の神へお参りをする風習は宇陀市一円にあり、神社境内に合祀されたものや自宅裏に祀るものもあるが、大半は山へ入り、祠の前や御神木に向かい、山の中で祈りを捧げている。長い時間を経ても変わらず続く銘木等の生産や山の神は、密に植樹された林や、田園風景の広がる集落等を舞台良好な歴史的風致を形成している。

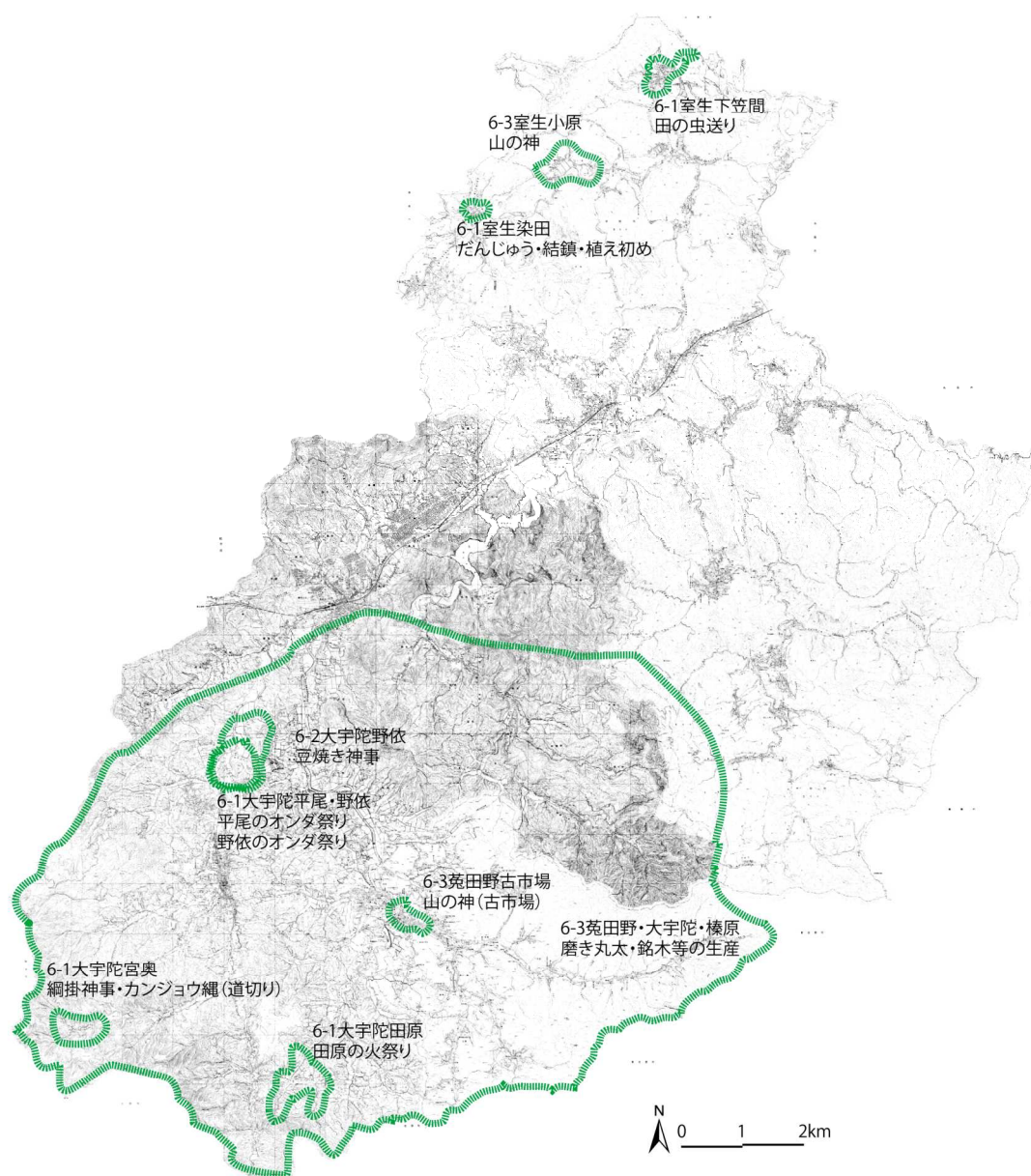


宇陀の山の営みにみる祭礼行事ゆかりの歴史的風致の図

おわりに

山間部に位置する宇陀は、耕作面積が限られるほか、泥田が多く二毛作に向かないなどの厳しい条件の中で農産物を育ててきた。また、春から秋にかけては農作業に携わり、冬は山で炭を焼いて枝打ちをして材木を出す、という生活を行っていた。

正月から季節の区切り事に催される祭礼行事には、山や田の神への無病息災・五穀豊穡の感謝と祈りが捧げられてきた。昔ながらの農村風景を舞台に繰り広げられるこれらの活動が相まって、良好な歴史的風致を形成している。



宇陀の田畑と山林にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

コラム7 ダリアの生産

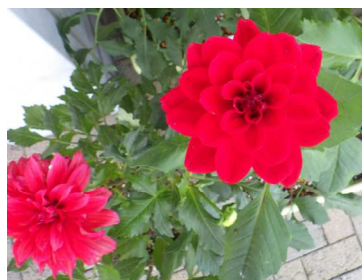
ダリアはキク科ダリア属の多年生草本植物⁴³である。メキシコ原産で、1789年にスペインのマドリッド王立植物園から欧州に広がる。

日本には天保13年（1842）にオランダから長崎に持ち込まれ、天竺牡丹と呼ばれた。長い時間をかけて品種改良が行われ、多種多様な品種が作り出されてきた⁴⁴。国内にいくつかダリアの産地ができ⁴⁵、昭和初期には家庭の庭先を飾る夏の花として普及した。

宇陀市におけるダリア栽培は、大正13年（1924）頃、県内種苗業者の委託を受けて球根生産を行ったのが始まりと言われる。寒暖の差が大きく冷涼な気候が幸いし、良質の球根や花が育った。

戦時中は食料増産のため一時ダリアの栽培が中断されたが、昭和22年（1947）から花卉生産を再開、「榛原花卉組合」が生産に携わる。組合では、発足当初から津田重三氏（1908年～1972年）が指導役を務め、販路開拓や値段交渉のほか、生産者の畑を指導し品質向上に努めた。平成4年（1992）ダリア倉庫に保冷库を導入しそこで切り花用球根の貯蔵等を行い、高品質花卉の生産を進めた結果、ダリア球根は全国トップクラス（球根生産量日本一を誇る奈良県において、宇陀市の生産量はその半数を占める）、ダリア切り花においても関西有数の産地となった。

榛原花卉組合は、独自品種の育成にも力を注いでいるほか、メリクロン⁴⁶によるウイルスフリーの苗・球根づくりも手掛けており、現在でもダリア生産地として様々な挑戦を続けている。



ダリアの花



7月 球根植付状況



9月 球根用圃場の様子



切り花仕立て作業

⁴³ 複数年にわたって生存する草のこと。

⁴⁴ 現在、300種類以上あり、17の花型に分類される。品種改良は人工授粉または虫媒（虫が受粉を行う）で行う。殆どが虫媒により行われ、品質が安定するまで3年ほどかける。

⁴⁵ 日本では、宇陀市のほかに、秋田県秋田市、長野県下伊那郡、山形県置賜郡川西町、兵庫県宝塚市上佐曽利がダリアの産地として知られている。

⁴⁶ ウイルスに侵されていない茎頂部の細胞を培養し、無病苗を育てる技術。茎頂培養。

7 薬草の生産と活用につまわる 歴史的風致

健康長寿を実現するために、薬はどの時代でも重宝されており、東大寺や西大寺のように、古代に中国から薬の輸入などをして民衆を病から救済しようとした寺院が存在した。ただ、薬は高価で入手が困難だったことから、身近な薬草や天然物を利用しようと試行錯誤し、様々な知識・経験が蓄積された。

宇陀における薬草活用の歴史は古代まで遡る。『日本書紀』によると、推古天皇 19 年 (611) 5 月 5 日に菟田野^{うだのの}へ薬獵に行ったとの記述が最初で、推古天皇 22 年 (614)、天智天皇 7 年 (668) と、しばしば宇陀で宮廷の薬獵が行われた。

「薬獵」の舞台として宇陀が選ばれた背景には、目的のひとつに薬効のある鹿の角を狩ることがあった点と、宇陀の山野が薬草の生育に適しており多種多様な薬草が繁茂していたためと考えられている。

記録が乏しく当時の様子を知る手がかりが少ないが、中国から薬として茶が持ち込まれ、栽培が始まったのは大同元年 (806) と伝わっており、室生では現在も大和茶の生産を続けている。

享保 14 年 (1729) に森野藤助^{もり のとうすけ} (賽郭^{さいかく}) により森野旧薬園 (国の史跡) が開かれたほか、『宇陀郡産物取調書上帳』(明治 12 年 (1879) 森野家文書) によると、川芎^{せんきゅう}、当帰^{とうき}、呉茱萸^{ごしゅゆ}、大黃^{だいおう}、防風^{ぼうふう}、芍薬^{しゃくやく}、黄芩^{おうこん}、木香^{もっこう}、白芷^{びやくし}、瓜楼根^{かろこん}、羌活^{きやうかつ}、独活^{どくかつ}、前胡^{ぜんこ}、桔梗^{ききやう} が薬用あるいは薬料として産出されている。大和当帰の栽培については近年、生産が再開されて再び脚光を集めるようになった。

また、『諸職人諸商売人書上帳』(慶応 3 年 (1867) 岩室・原野家文書) によると、薬種や和薬・合薬を商う商家が松山町に多く見られた。宇陀郡一円で育てられた薬草・薬種が宇陀松山に持ち込まれ、主に近畿・東海方面に販売されたようである。薬を扱う商家は減ったが、かつて薬屋を営んだ町家や薬の看板は現在も残り、薬の町として栄えた宇陀松山の面影をとどめている。

更に、宇陀松山では近世初頭から現在まで葛の生産が続いており、寒の厳しい時期にさしかかると、葛の根を砕いて晒す作業が始まり、独特の香りが町の中に漂ってくる。

また、初夏にはヨモギ餅^つを搗いて食べ、旧暦 5 月 5 日に軒先を菖蒲^{しょうぶ}で飾り、ドクダミを乾燥させて煎じて飲み、風邪を引けば葛湯を飲み、生活の中で薬草が登場する機会がしばしばある。

以上のように、宇陀市内には薬草の生産と活用に関する営みが歴史的町並み

や農村を舞台に繰り広げられており、良好な歴史的景観を形成している。本章では、以下のことについて述べたい。

7-1 薬草を活かした暮らしにまつわる歴史的風致

7-2 本葛の製造販売にまつわる歴史的風致

7-3 大和茶の生産にまつわる歴史的風致

7-1 薬草を活かした暮らしに まつわる歴史的風致

(1) はじめに

『日本書紀』で宮廷の薬獵の舞台として登場する菟田野^{うだのの}。寒暖の差が大きく霧が発生しやすい気候のため、多様な植物が育ちやすい環境にあったとみられる。

『大和誌』（享保 21 年（1736）、関祖衡・並河誠所 編）によると、宇陀郡の土産に「人参^{とうき} 室生山^{きゅうきょう} 當歸^{しるしやくやく} 芎藭^{だいおう} 佳品世稱大和川芎^{くずこ} 白芎^{わらびこ} 薬絶品世稱宇陀芎^{わらびこ} 薬大^{わらびこ} 黄^{わらびこ} 葛粉^{わらびこ}」とあるように、薬草の記述が目立つ。

主な産地は、前述の『宇陀郡産物取調書上帳』によると、當歸（当帰）は調子村外十九ヶ村、大和川芎は田口村外十八ヶ村、芎薬は春日村外九ヶ村、大黃は石清水村外八ヶ村、と、宇陀郡内の各地で産出されていたことがわかる。ただし、葛については、精製は郡内で行うが、原料となる葛の根は他郡山中でも掘採するため、産地の全容が把握できない、とある。

栽培された薬草は、収穫のあと洗浄・乾燥等の加工を経て店先に並ぶ。宇陀郡の場合は宇陀松山にこれらの薬草が集まっていたと見られ、『宇陀郡松山組薬種屋合薬屋』（安政元年（1854）藤井・笹岡家文書）によると、薬種や合薬⁴⁷を扱う店が松山町で 43 軒、神戸村で 6 軒記載されており、薬を扱う店が多かったことがわかる。

『第六回奈良縣宇陀郡治一班』（大正 2 年（1913）奈良縣宇陀郡役所）には、農産物の欄に「（種別）牡丹皮/（作付反別）六反/収穫高九六貫、當歸/二反/四十貫、芎薬/十六反/二七八貫」とあり、当時も産業として続いているほか、売薬営業税附加税として 6,340 厘の税収が計上されていることから、薬の販売も郡内でおこなわれていたことが推測される。

松山地区には江戸期より、薬種問屋のほか、和薬・合薬を扱う店が軒を連ねていた。町並みの中には、薬の看板を戸袋にした家や、昔薬屋だった家が現存する。宇陀市歴史文化館「薬の館」では、薬種問屋を営んでいた旧細川家住宅に残る道具や看板を展示し、往時の様子を伝えている。また、現在でも、平吾薬局や、葛を製造販売している黒川本家・森野吉野葛本舗が営業を続けている。

⁴⁷ 動植物の部分・細胞内容物・分泌物・抽出物あるいは鉱物で、そのまま薬品として用い、あるいは製薬の原料とするものを「生薬^{しょうやく}」と呼ぶ。江戸時代は漢方薬の原料という意味で生薬のことを「薬種^{やくしゅ}」、複数の薬種を合わせたものを「合薬^{ごうやく}」、日本在来の薬を「和薬^{わやく}」と呼んだ。薬種屋は、唐薬種（輸入品）を扱う店、和薬屋は日本産の薬種を扱う店、合薬屋は和薬種と唐薬種を処方により調合したものを販売する店のことをさす。

(2) 建造物

【旧細川家住宅】市の指定文化財（建造物）

木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺。大宇陀上の通り沿いに建つ市の公開施設で、通称は「薬の館」である。正面庇に掲げた唐破風付きの木製看板が目を引く。『せせらぎと手わざのまち大宇陀・松山～伝統的建造物群保存対策調査報告書～』（平成12年（2000））（以下、『保存対策調査報告書』という）によると、江戸時代末期創建、明治後期に大改修を行っている。薬種問屋として栄えた細川家に残る薬簞笥や薬種、薬の看板などを展示している。藤澤薬品（現アステラス製薬）の創始者、藤澤友吉の母、満津^{まつ}がこの家の出身である。

「薬の館」では、薬種問屋のかつての商いや、細川家の暮らし、藤澤薬品のあゆみなどが展示されている。旧暦5月5日に軒に菖蒲を挿す。



薬の館の軒菖蒲



細川家前にて太神楽（明治頃）
※薬の館所蔵資料

【旧平五薬局】

木造つし二階、切妻造、棧瓦葺。江戸期から続く薬局で、おもに漢方薬の処方や、調剤を行った。『保存対策調査報告書』によると、昭和初期の建物と推定される。店内にはかつて使っていた薬の看板が飾られ、カウンターの奥には薬簞笥が置かれていた。



旧平五薬局
（令和2年(2020)撮影）

【千軒舎】

木造つし二階、切妻造、棧瓦葺。『保存対策調査報告書』によると、明治時代前期の建物と推定される。かつては内藤修精堂という薬屋で、昭和初期に歯医者となった。

平成15年（2003）市の公開施設「松山地区まちづくりセンター千軒舎」として改修され、まちづくり活動の拠点施設として使われている。旧暦5月5日に軒に菖蒲と蓬を挿す。



千軒舎

【田川家住宅】

木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺。屋号は長榮堂で、薬屋、菓子屋、時計屋と変遷したのち、現在は文化財修復工房兼住居として使われている。弘化3年（1846）の愛宕祈禱札があり、このころに建てられたと推察される。旧暦5月5日に軒に菖蒲を挿す。



田川家住宅

（3）活動

【旧暦5月5日の軒菖蒲】

端午の節句に、おこなわれた風習のひとつに、匂い菖蒲と蓬を軒先に挿す、または束ねた菖蒲と蓬を軒に置く、というものがある。『松山町風俗資料』（大正4年（1915）/松山町）によると、「菖蒲葺トテ表ノ屋ニ菖蒲ニ蓬ノ付ケタルモノヲ載ス」とあり、大正期には一般的におこなわれていたとみられる。

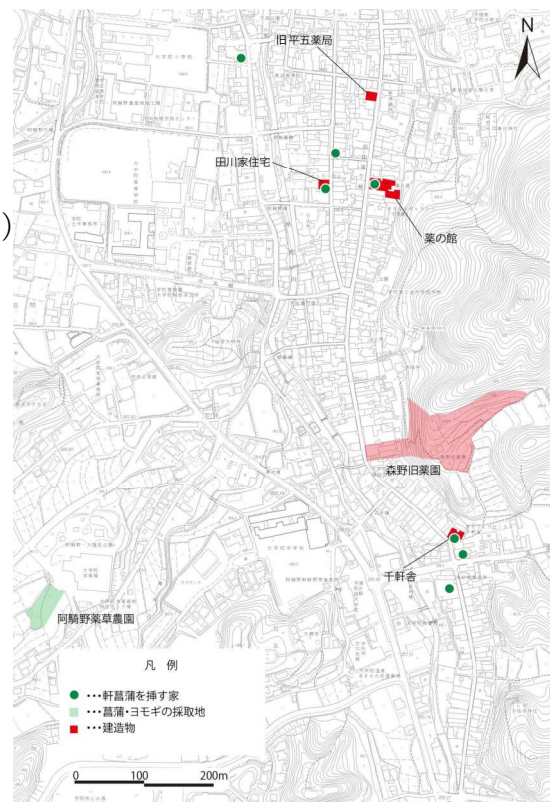


軒に挿した菖蒲蓬

菖蒲と蓬を出入口のある屋根瓦の下に等間隔で挿すのだが、このときに菖蒲は長めに、蓬は短くする。

この風習のルーツを辿ると、古代中国から伝来した5節句（人日（七草）、上巳（桃）、端午（菖蒲）、七夕（七夕）、重陽（菊））が日本に伝わり一般化したもので、束にした菖蒲と蓬を屋根の上に載せる、屋根を葺くかのように大量に載せるなど、地域により飾り方に多少の違いはあるものの、全国的に行われている風習のようである。

軒に飾る匂い菖蒲は血行促進、蓬は殺菌・消炎などの効果がある薬草で、強い芳香で魔を払う役割を期待し、家の出入り口の周辺に配された。また、匂い菖蒲と蓬を風呂に浮かべ菖蒲湯にし、薬効を享受する風習も健在である。



軒菖蒲を挿す建物の分布

【ドクダミ茶をはじめとした薬草の活用】

ドクダミは薬草としての効能が多いことから^{じゅう}十薬とも呼び、利尿・緩下・高血圧や動脈硬化予防を期待して煎じて飲むほか、湿疹・あせも・にきびなどの皮膚のトラブル時には生葉をすりつぶして患部に貼るとよいとされる。

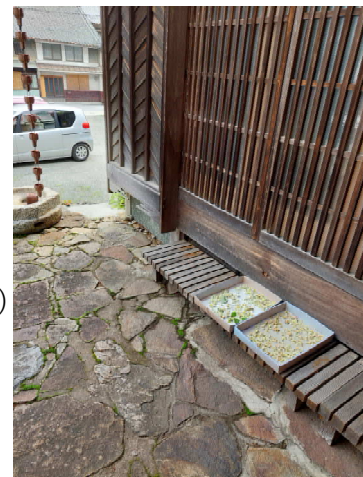
ドクダミは各家庭の庭に自生しているため、わざわざ外まで摘みに行く、という意識はない。白い花が咲いたら全草を摘み、水洗いをして陰干しし、6 cm程度の長さに切って保管する（家庭によっては、水洗いし、刻んだあとザルに広げて干すところもある）。

花を摘む時期は、夏至までが良いとされている。また、『奈良県風俗誌記載事項調』（大正4年（1915）/政始村編）第二十二類 年中行事に「九 土用土用干⁴⁸ヲナシ、薬草ヲ摘ミトリテ之を陰干トナス」とあり、夏の盛りに摘み、乾燥させるのは現在にも共通している。

乾燥のため吊るすまでは、ドクダミ特有の香りが強く感じられるが、乾燥するとほのかに香る程度になる。雨に濡れないよう、家の軒先や縁側に吊るす光景が、夏至のころからしばらくの間、町のあちこちで繰り広げられている。



ドクダミの花

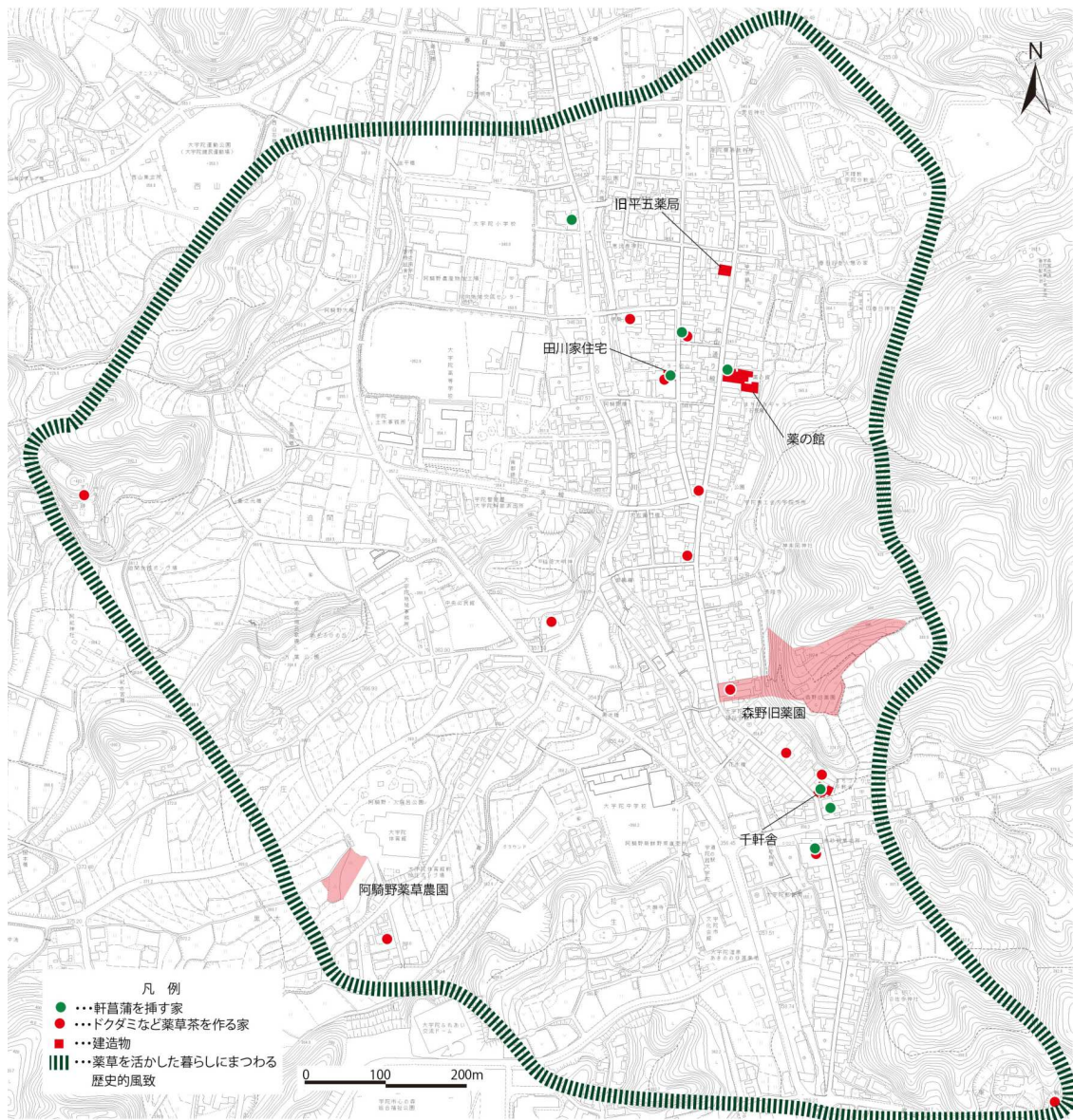


濡れない場所に干す

（４）まとめ

宇陀と薬草との関りは、『日本書紀』にまで遡り、近代の文献をみると、菖蒲と蓬を軒に飾る行事が行われていたほか、多種多様な薬草の効能を把握しており、生活の中で役立てていたことが伺える。長い時間を経た現在においても、宇陀松山の歴史的町並みを舞台に、ドクダミ茶やヨモギ餅（草餅）など、暮らしの中に薬草を取り入れた生活が続けられており、良好な歴史的風致を形成している。

⁴⁸ 土用干しとは、夏の最も暑い時期に衣類や本を干して風を通し、虫がつくのを防ぐこと。虫干しともいう。梅雨入りに漬けた梅も、この時期に干す。



薬草を活かした暮らしにまつわる歴史的風致の図

コラム 8 大和当帰の栽培

宇陀市では、大和当帰の栽培が行われている。大和当帰は、セリ科の多年草本で、3年かけて栽培した根が漢方薬として使われる。冷え性、血行障害、強壮、鎮痛薬などの効能があり、婦人科系疾患に効果があると言われているが、花を咲かせると根の石化を招いて効能が失われるため、痩せすぎ・肥え過ぎのないように育てる必要があることから栽培が難しい。

『広益国産考』(天保15年(1844)刊、大蔵永常(幕末の農学者))のなかで、「当^{とう}販^き 薄地につくりて利を得るもの也。大和の吉野郡宇多(陀)郡につくりて多くいだす也。」と記され、江戸期より大和当帰の生産が盛んだったことが読み取れる。

過去には栽培しやすい^{ほっかいとう}当^き帰(北海道を中心に栽培される品種)が出回っていたものの、品質は大和当帰のほうが良いとされたため、細々と生産は続けられていた。転機が訪れたのは2012年1月の薬事法改正で、当帰の葉が食用として扱えるようになったため、宇陀市では大和当帰を市の名産品のひとつとして、栽培から大和当帰の根の出荷までの支援や、葉の部分の商品開発等を行うようになった。

大和当帰は、4月に種をまき、1年かけて苗を育てる。2月末～4月にかけて、苗の植え付けを行う。夏は水やりと除草を手作業で丹念に行い(無農薬のため)、葉の収穫をし、11月に根を掘り上げて屋内で乾燥させる。翌年3月、乾燥した根を湯もみして、更に乾燥させ、根元を整えてから出荷する。葉には強い香りがあり、天ぷらにしたり乾燥させたりしてスパイスのように利用することが多い。



義経塚と圃場



当帰の苗(2月)



苗の植え付けをしたところ



当帰の根



平置きして乾燥



湯もみの様子



根を整える



当帰関連商品

7-2 本葛の製造販売にまつわる 歴史的風致

(1) はじめに

葛はマメ科の大形ツル性多年草で、山野・荒地に自生する。秋に紅紫色の可憐な花をつける、秋の七草のひとつ。葛は根を肥らせ、10年以上経ったものを収穫し、根を細かく破碎して乾燥したものが生薬の葛根、水に晒して精製した澱粉が葛粉である。

奈良県吉野地方は葛の自生地で、この周辺の葛根で作られた葛粉は「吉野本葛」と呼ばれ葛粉の中でも良質なブランドとして知られている。「本葛」とは添加物や化学薬品を一切使用していない純度100%の葛澱粉のことで、葛根から取れる本葛の量が僅かで貴重なものであることから、「白いダイヤモンド」と称されることもある。水に溶いて熱したときの透明感や滑らかな口当たり、喉越しの良さが重宝されていることから、和菓子や料理のとりみ付けに使うほか、風邪の初期症状が出たときに熱湯に溶いて服用する。

宇陀では現在も本葛の生産が続いており、奈良県の生産量が全国の4割のシェアを占めている。

昔はすべて手作業であったが、現在は一部の作業を機械化しながらも、職人の手による本葛の生産が続けられている。

本葛の生産の起源については記録が乏しく現時点では不詳である。『宇陀松山藩御用部屋日記』の寛文6年(1666)5月17日に「葛八分袋一ツノ目百四十めツツ有 大和や吉右衛門上ル」と記され、「葛八分袋」一袋140匁(約525g)の重さの本葛が大和屋吉右衛門によって宇陀松山藩へ納められていることがわかり、このころには葛が生産されていたと考えられる。



葛の花



材料となる葛の根



吉野本葛



明治時代の葛精製風景

宇陀松山藩では、本葛を江戸藩屋敷に運んだほか、幕府の巡検使への手土産や京都代官、南都代官への御進物にしたとの記録が残る。

『産物并産業品書上帳』（安政4年（1857）、松尾家文書）には、「水葛八、一九〇貫目、此升数一一七石、此製葛二、三四〇箱（上五八五箱、中五八五箱、下一一七〇箱）、此代銀凡三八貫六一〇匁」とあり、江戸時代末期には、これだけの量が生産されていたとみられる。

近代に入り、本葛を輸出品として売り込むため、国内・国外様々な博覧会に出品した。その証として、黒川本家の店舗入り口に、第3回内国勸業博覧会（明治23年（1890））の褒状、セントルイス万国博覧会（明治37年（1904）、アメリカ合衆国にて開催、60か国が参加）の金賞表彰状、ルイスとクラーク100周年万国博覧会（明治38年（1905）の金賞表彰状が飾られており、海外でも一定の評価を得られたようである。

現在も、冬の水が冷たい時期に入ると葛の寒晒が始まり、本葛の精製や乾燥作業が行われている。本葛の製造が行われない夏場は、葛製品の製造や販売を行っている。作られた本葛は、おもに料亭や和菓子屋に卸されるほか、一部は土産物として店舗等で販売されている。

（２）建造物

【黒川本家主屋】

木造、切妻、つし二階建、棧瓦葺、平入。宇陀松山の歴史的な町並みの中ほどに位置し、町家が連なる中でもひととき目を引く間口の広い建物である。

屋号は「山の坊屋」で、一時期薬の販売もしたが代々葛を商っている。主屋は店舗で、隣接する工場で製造した葛製品を販売している。

建物に残る愛宕祈禱札に寛政3年（1791）とあり、この前後に建てられたものと考えられる。

【薬草乾燥場】

木造、切妻、二階建、棧瓦葺、妻入りの建物。森野旧薬園の入口手前の晒し場に面して建つ。設計図が残っており、昭和28年（1953）に建て



黒川本家外観



黒川本家店の間



薬草乾燥場

られた生葛の乾燥場。生葛の塊を木箱に入れて乾燥させるための倉庫で、生葛を保管する部屋は通気口が開けられて年中風が通るように作られている。

のぐちしょうえいどう
【野口昇栄堂】

『上棟式祝受控帳』（大正10年（1921））より大正10年（1921）上棟、木造つし二階建、切妻造、棧瓦葺。1列2室の標準的な間取りの町家で、店の間を土間に^ま変えて和菓子屋の営業を続けている。屋号は「志を乃屋」で、3代にわたる和菓子屋。わらび餅、草餅など季節の菓子を製造・販売している。



野口昇栄堂

【松月堂】

市の資料によると昭和3年（1928）に建築した町家。銘菓「きみごろも」を看板に掲げる和菓子屋で、進物や土産、参会の際に出されるお茶うけの菓みに重宝されている。主屋は、木造二階建、切妻造、棧瓦葺。何度か改装を重ねて現在の姿になった。



松月堂

一年を通じて葛湯を販売しているほか、夏になると葛まんじゅうを製造販売しており、「葛まんじゅう」と書いた張り紙を店の壁に貼り出している。

（3）活動

本葛作りの起源は不明だが、195頁のとおり江戸時代には既にあったことがわかる。本葛の生産は、毎年師走に始まり、精製に1か月、乾燥には2～3か月の期間を要する。質の高い本葛を作るには、良く冷えた清らかな水と乾燥した空気が適しているため、厳冬のころを選んで本葛の製造が行われる。宇陀松山では、黒川本家と森野吉野葛本舗において、本葛づくりが伝わっている。



精製作業の様子（攪拌）（昭和40年代）

黒川本家では、山で掘り出した葛根を麓の工場で破碎し、それを桶に入れて宇陀松山にある精製工場へ運ぶ。そこには大きなプールがあり、機械で攪拌作

業をして繊維を取り除く。その水を、桶に注ぎ分けて並べ、澱粉が沈殿したら水を捨てて新たに水を入れてかい棒を使って攪拌する、という作業を10日間で数十回繰り返す。最初の方は濁っていた水が徐々に澄んでいき、桶の底にたまる生葛は徐々に白さを増していく。右の写真は、昭和40年代（1965～1974）に撮影された各工程の写真である。

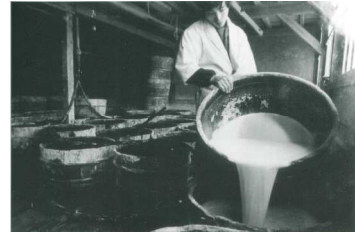
桶に注ぎ分けて精製する方法を「吉野晒し^{よしのざら}」と呼び、晒す回数に見極めには職人の経験と勘が求められる。人の手で作業がしやすいよう、創業当時と変わらないサイズの桶で現在も葛の精製が行われている。殆どのメーカーが機械化する中、黒川本家は手作業にこだわり、昔ながらの製法で続けている。

精製後の葛は、へらを使って桶から取り出し、乾燥させるために約15cm角の塊に手で割る。このときに生葛をつぶさに見て不純物があれば包丁で丁寧^{ていねい}にそぎ落とす。切り出された生葛は、右写真の「こうじゅうた（「こうじぶた」が訛^{なまり}ったもの）」と呼ばれる底に簾を敷いた木箱に並べられて乾燥用の倉庫へ運んで互い違いに積み上げられ、2～3か月かけて自然乾燥させる。かつては屋外で天日干しをしていた。

乾燥させた葛は、検品や不純物を取り除く過程で徐々に崩れていく。粒状の塊になった葛を袋詰めにして店に並べる。できあがった商品は、店の棚に並べられ販売されるほか、取引先へ直接納入される。

職人の手仕事により生み出されたキメの細かい葛は、水に溶けやすく馴染みやすいことから、料理のとろみ付けや天ぷら衣の歯触りを良くする等に使うほか、葛餅・葛切り・葛饅頭など和菓子の素材として重宝されている。

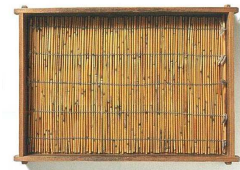
夏が近づくと、近隣の和菓子屋で「葛まんじゅう」の張り紙が目にとまるようになる。葛まんじゅうはこしあんを葛餅で包んだ菓子で、透明感があり涼を



上澄みを捨てると桶の底に澱粉が残る（昭和40年代）



不純物を除去し並べる



こうじゅうた



倉庫で乾燥させる



森野旧薬園中庭にある精製用の水槽と薬草乾燥場

感じさせるお菓子として人気がある。本葛を使った食べ物を扱う和菓子屋、食堂、料理旅館などの店舗は、現在でも松山地区周辺に点在している。

（４）まとめ

葛の根は、葛根^{かつこん}と呼ばれ漢方薬の材料になる。この葛の根を材料とする本葛づくりは、少なくとも江戸時代末期には宇陀松山の地で行われていた生業で、この土地の寒さと清らかな水により成り立っている。

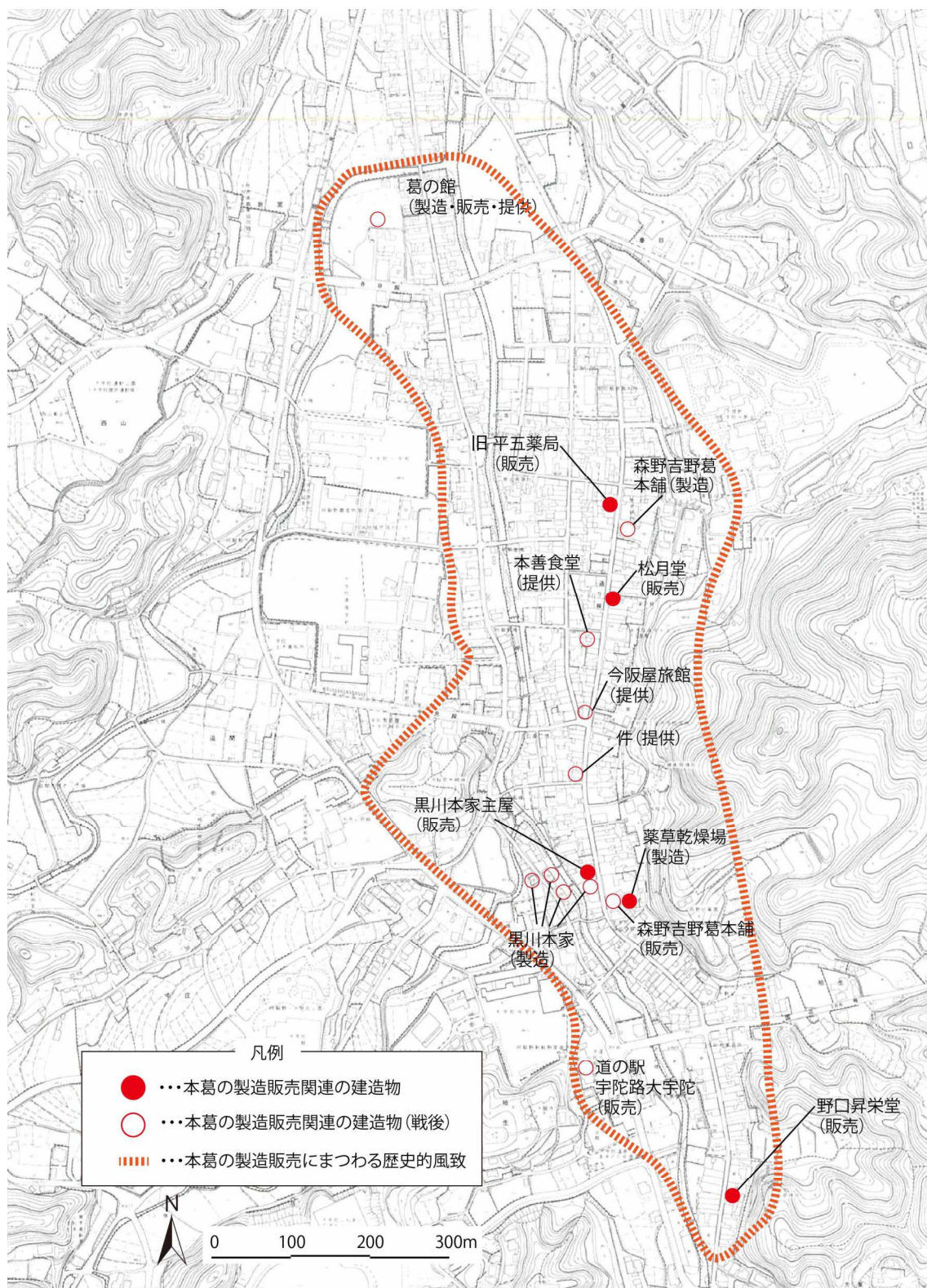
葛の根の粉碎から本葛の精製作業の間は、葛特有の匂いが宇陀松山の歴史的な町並みに漂う。また、町並みの店舗の中には、葛を使った品を提供するものがいくつもあり、本葛の製造から店舗での販売に至るまでの営みが現在も続いており、良好な歴史的風致を形成している。



店頭販売の様子



和菓子屋の張り紙



本葛の製造販売にまつわる歴史的風致

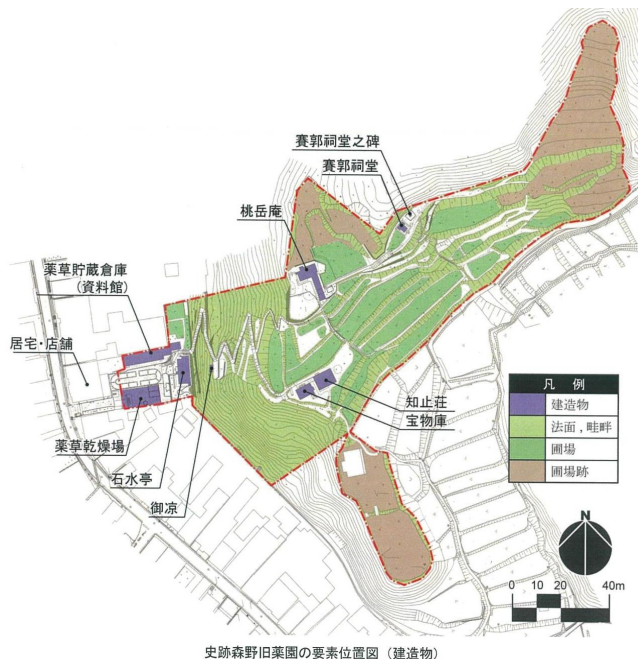
コラム 9 森野旧薬園

宇陀松山の東側に位置する史跡森野旧薬園は、享保14年（1729）に森野賽郭によって創始された薬園である。当時、薬園といえば江戸の小石川や駒場、京都御薬園など幕府官設の薬園や尾張藩・南部藩・会津藩など藩営の薬園が開設されていたが、民間の薬園は極めて少なかった。森野旧薬園は数少ない民間の薬園として創始されたもので、適切な維持管理を継承し今日に至っている。

この薬園を設立した森野賽郭は、代々農を営む傍ら葛粉の製造販売を行う葛屋として知られてきた。賽郭は本草（草本、薬用植物や虫魚玉石）の研究に親しみ、享保7年（1722）33歳で『和薬御改控』の記録を残している。徳川吉宗が全国各地に派遣した採薬使のひとり、植村佐平次に随行して採薬補助をつとめ、薬草に関する知識を一層深めた。

享保14年（1729）に幕府の許しを得て薬園を始めるとともに、幕府から拝領した甘草・東京肉桂・烏臼・天台烏薬・牡荊樹・山茱萸の6種の薬草を育てていたとの記録があり、幕府官園の補助機関としての地位を固めていった。

賽郭は、寛延2年（1749）に家督を武貞に譲り、本草研究に精を出した。その集大成ともいえる原色の動植物図巻『松山本草（全十巻）』を著している。



森野旧薬園の配置図（史跡森野旧薬園保存活用計画書より）



旧薬園から町並みを俯瞰できる



桃岳庵

7-3 大和茶の生産にまつわる 歴史的風致

(1) はじめに

良質なお茶の産地は、その多くが山や川からの霧が発生しやすい立地であることが条件となる。霧がお茶の木に適度に湿った空気を送るとともに、日光を遮り、葉に含まれるテアニン（アミノ酸類、旨味成分）の増加を促すためである。

大和茶は、奈良県北東部の山間地を中心に栽培されている。標高300m上で昼夜の寒暖差が大きく、霧が頻繁に発生することや平均気温・日照時間が茶栽培可能な条件をぎりぎり満たしていることから、生育が遅くなる半面、ゆっくりと育つため、品質の高い茶葉を生産することができる。

大和茶の歴史を紐解くと、天平元年（729）に天武天皇が「行茶」の式を行ったのが飲用の最初の記録と言われている。また、大同元年（806）に弘法大師が唐から茶の種を持ち帰り、佛隆寺の開祖堅恵大徳に与えて榛原赤埴の地に播種したのが大和茶の最初の栽培と伝承されている。当時は、嗜好品というよりは、薬として飲まれていたと考えられており、日常的に飲用されていたわけではないとみられる。

奈良時代から平安初期の茶に関する文章や漢詩など事跡は多いが、平安中期以降には殆ど見られなくなる。鎌倉期になると建久2年（1191）に栄西が宋代の抹茶式飲用法⁴⁹を再導入し、建暦2年（1211）に『喫茶養生記』を著して全国的に茶が利用されるようになったとされる。建長年間（1249～1256）に奈良の茶が鎌倉へ送られた事例があり、奈良県が茶生産の先進地となっていたことを伺わせる。さらに、西大寺の叡尊^{えいぞん}（1201～1290）や忍性^{にんしょう}（1217～1303）など律宗関係の僧は茶の活用に熱心で、『西大寺文書』によると「大茶盛」などは叡尊が始めたとしている。

南北朝から室町期には、全国に茶生産地が形成されたが、『異制庭訓往来^{いせいいていきんおうらい}』などによると、奈良県における優良茶産地が般若寺（奈良市）や室尾（現在の宇陀市室生）に形成されていた。さらに『東大寺文書』によると各地（畑、田原、笠間、正法寺など）への茶生産や茶の贈答が記録されている。

豊臣政権が実施した文禄検地の中には、茶に関する課税が認められるようになる。この検地帳によると、上笠間（室生上笠間）の村名が認められる。また、

⁴⁹ 乾燥させた茶葉を石臼で引いて粉末にし、お湯を注いで混ぜて飲む飲み方。

享保 21 年（1736）に刊行された『大和志』では、長瀬村（室生三本松）で良質の茶が生産されているとある。さらに、『煎茶仕用集』（宝暦 6 年（1756）刊行）では茶産地は「室生」「吉野茶」「北山茶」とあり、吉野郡に茶業の中心があったとみられる。下図のようなかたちで茶の生産が行われていた。



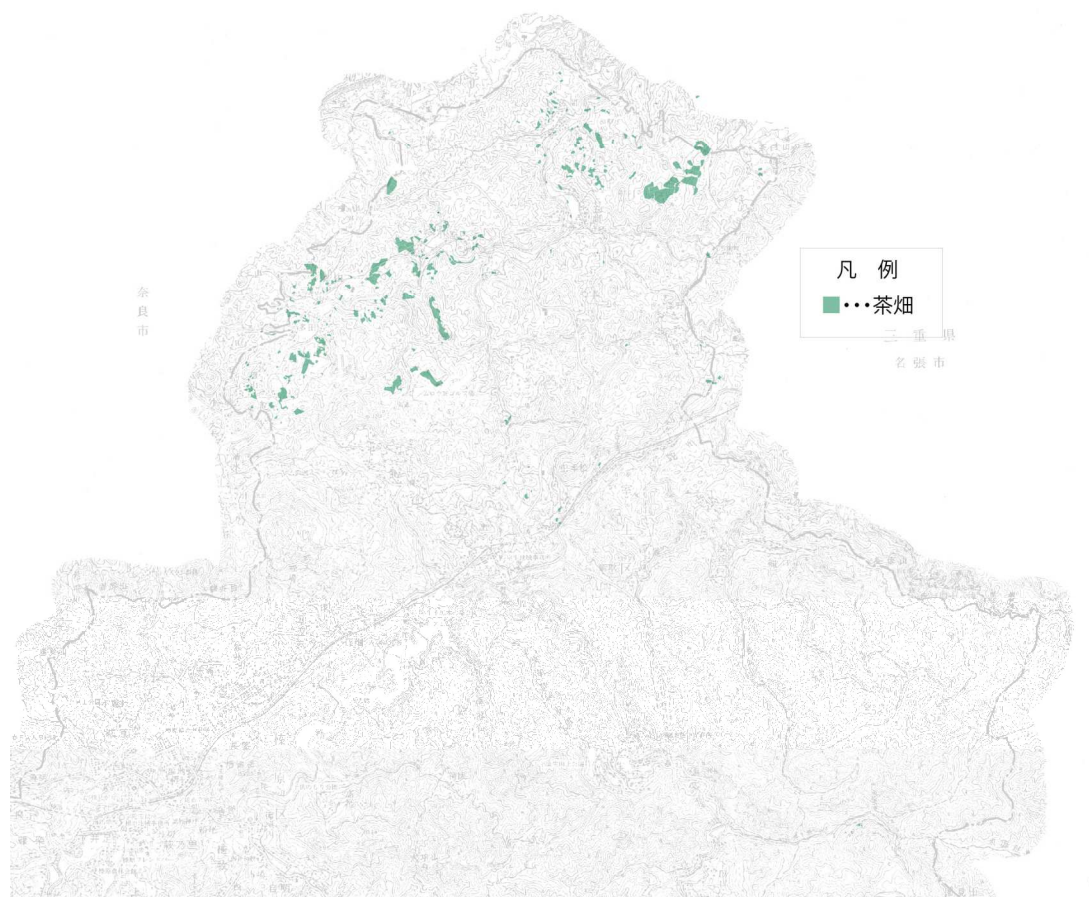
江戸期の茶づくりの様子『笠間山茶製図』

安政の開国で日本の産物が輸出され始めたとき、その柱となったのが茶と生糸であった。この時期から奈良県の茶業地域は大和高原東部（東山中）に移り、明治 8 年（1875）から 9 年（1876）に調査された物産調べでは、添上郡、山辺郡（東山中）と吉野郡に中心がわかれていた。

大正 13 年（1924）、奈良県農事試験場茶業分場が奈良市法蓮町に設置され、近代茶業の研究・普及が開始された。翌年には全国製茶品評会を開催し、良い成績を収めている。第二次世界大戦中は食料増産のため茶生産は減少するが、社会の安定に伴い大和高原北部地域を中心に復活した。

宇陀市においては、安政から万延のころ（1855～1860）にわたり室生の庄屋、勝井喜市郎が栽培を奨励し、昭和の初めごろまで、このときに植えた茶樹から茶を収穫していたとある。明治 20 年（1887）ころが最も盛んで、初茶・二番茶とも宇治茶として出荷し、上げ茶（製品化されたお茶）で 800 kg ほど、青芽（茶葉の状態）で売る家も多かった。上笠間是他村に比べて産額が少なかったのも、ホイロ師（ホイロを使って手もみ製茶を作る職人）として他村へ出稼ぎに出ていた（福田檣松翁の「覚書」より）。

戦後、室生村では茶の栽培を奨励しており、『広報むろう第 5 号』（昭和 31 年（1956）9 月、室生村発行）では「やぶきた」「大和みどり」の茶苗、種子幹旋の記事、『広報むろう第 22 号』（昭和 39 年（1964）5 月、室生村発行）では「よい茶園を作るコツ」の記事、昭和 44 年 1 月号では山を開墾し茶園を整備した記事が掲載され、村をあげての産業として位置づけられていたことが伺える。現在でも、室生北部で大和茶の生産が続いている。



宇陀市における茶畑の分布図

(2) 建造物

【佛隆寺石室】国の重要文化財（建造物）

佛隆寺本堂の右奥に築かれた宝形造りの石室。
内部には、鎌倉時代の五輪塔を安置する。
空海の高弟で、佛隆寺を開き大和茶の栽培を始めた
とされる堅恵^{けんね}の墓と伝わる。

毎年8月20日に石室の前で「大和茶の日供養」
が開催され、茶業組合をはじめとした関係者が集
い、製茶業の振興に対する感謝を捧げ、堅恵の菩
提供養を行っている。



佛隆寺石室

(3) 活動

【大和茶の栽培】

茶畑は、古くは住まいのそばにあったが、現在は集落のはずれにある山腹に整

備した圃場^{ほじょう}で生産をしている。『広報むろう第5号』（室生村/昭和31年（1956）9月）では、「秋産茶樹優良苗木並春播種の幹旋」の記事があり、やぶきた・大和みどりの苗木や種子の幹旋が行われているところから、村を挙げて生産の後押しをしていたことがわかる。

茶の生産サイクルは2月の施肥・中耕・裾根刈から始まる。3月に枝を整え、消毒を行う。5月に再度施肥をし、旨味や見た目を良くするために、かぶせ（黒いネットのような布をかぶせる）をしたのち、一番茶を摘む。6月には番茶を摘み、殺虫・殺菌をして、7月に2番茶を摘み、8月に枝を整えたあと9月にかけて苦土石灰と施肥をし、殺虫・殺菌。10月に施肥（油かす）をし、周辺の草刈り・敷草をする。

茶の加工は、昔から集落の共同作業で行った。大きな農家が持っている工場に、各家庭から茶葉が持ち込まれ、加工をしていた。現在は機械化が進み、荒茶までの行程を生産者が担っている。

仕上げの作業（茶葉の形を整える、ほうじ茶の場合は焙煎をしてから袋詰めする）は、問屋で行っている。

毎年8月20日、佛隆寺にて大和茶の日式典が開催される。晴天時は石室前にテントと椅子を並べて開催するが、雨天時は本堂の堅恵像が納められた厨子を開けて堂内で行う。

主催は一般財団法人奈良県茶業会議所で、昭和51年（1976）の大和茶の日制定を機に始まった。式典は読経のあと、その年の製茶業の情勢を報告し、品評会で優秀な成績を出せた感謝と、今後も良質茶の生産販売に努める旨を仏前で誓うという内容である。最後に堅恵聖人の菩提供養のため、真言を読誦して終わる。



摘む前のかぶせの工程



新芽が出る頃の茶畑



令和3年は本堂で式典を催行



大和茶の日式典
（屋内にて開催の場合）

【佛隆寺修正会】

佛隆寺は榛原赤埴の山腹に立地する寺院で、山号は摩尼山、真言宗室生寺派で室生寺の南門とも呼ばれる。空海（弘法大師）が唐から持ち帰った茶の種を弟子の堅恵（佛隆寺の開祖）に与え、赤埴の地に幡種したのが大和茶栽培の始まりと伝えられている。

境内地には野生化した茶の古木と、千年桜と呼ばれる桜の巨樹があり、千年桜は県の天然記念物に指定されている。4月中頃の桜の開花時期には、千年桜の幽玄な姿を求めて多くの人を訪れる。

佛隆寺修正会は、『榛原町史』（榛原町史編集委員会/昭和34年（1959））によると「赤埴の佛隆寺にも卷子本の修正会次第（書字年代不明）がある。」と記載され、当時から続いている行事であることがわかる。

現在は毎年1月7日に行われる。五穀豊穰と厄除けを全国の諸天善神や諸仏に祈願し、「ランジョー」のかけ声とともに、鐘と法螺貝の音に合わせて竹を雑木（昔は漆の木を使った）の枝で叩いて割る行事。大きな音が出るほど、派手に竹が割れるほど豊作になると言われる。

お供えの牛玉宝印の札を挟んだ竹（昔は漆の木を使っていたが入手困難となり竹を代用）は、参加者に配布され、虫よけのまじないとして、水口や畑に立てる。叩いて割られた竹や棒は、かつてはダケ登りのときの松明に使ったが、現在は休止中につきお堂の縁の下にしまわれ、薪として使われている。



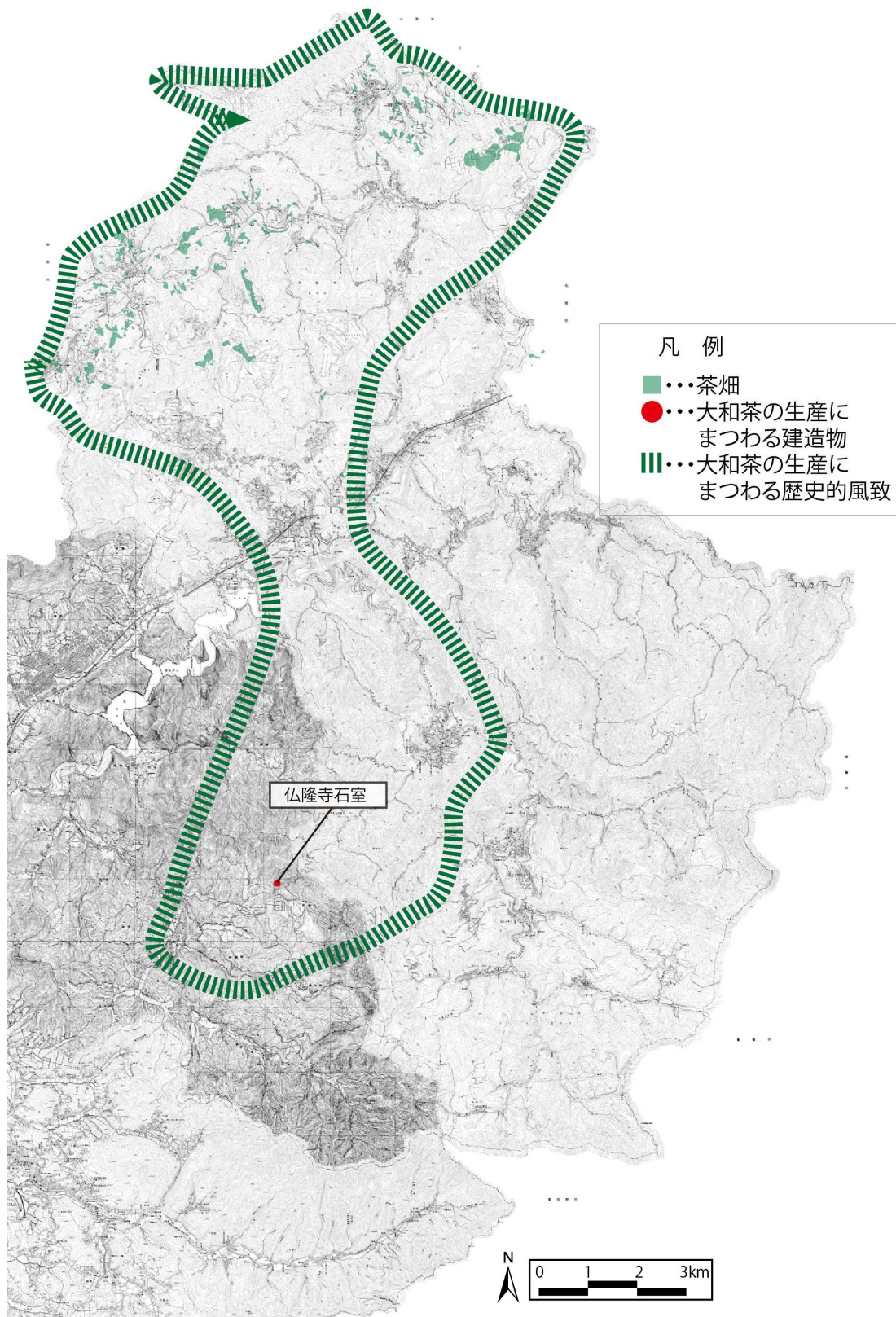
ランジョーの声と共に乱打



竹に挟むお札



寺宝の茶臼が飾られる



大和茶の生産にまつわる歴史的風致の図

(4) まとめ

古代に中国から持ち帰った薬として茶の種を蒔き、栽培したことが始まりの「大和茶」は、山が深く霧が発生しやすい宇陀の気候によく馴染み、中世から近世にかけて良質の茶葉の生産地として認識されてきた。

明治時代は茶の輸出を支え、戦後も室生では村を挙げて茶の栽培を奨励してきた。機械化が進んだ影響で、茶の生産にまつわる手仕事は減少したものの、現在も引き続き、良質な茶葉の生産は続けられている。

大和茶に縁の深い佛隆寺では、茶の種を持ち帰って広めたとされる堅恵の菩提供養が毎年行われ、製茶業の振興への感謝の気持ちが捧げられている。

これらの営みが、山あいの昔から続く農村集落や、古刹を舞台に繰り広げられており、良好な歴史的風致を形成している。

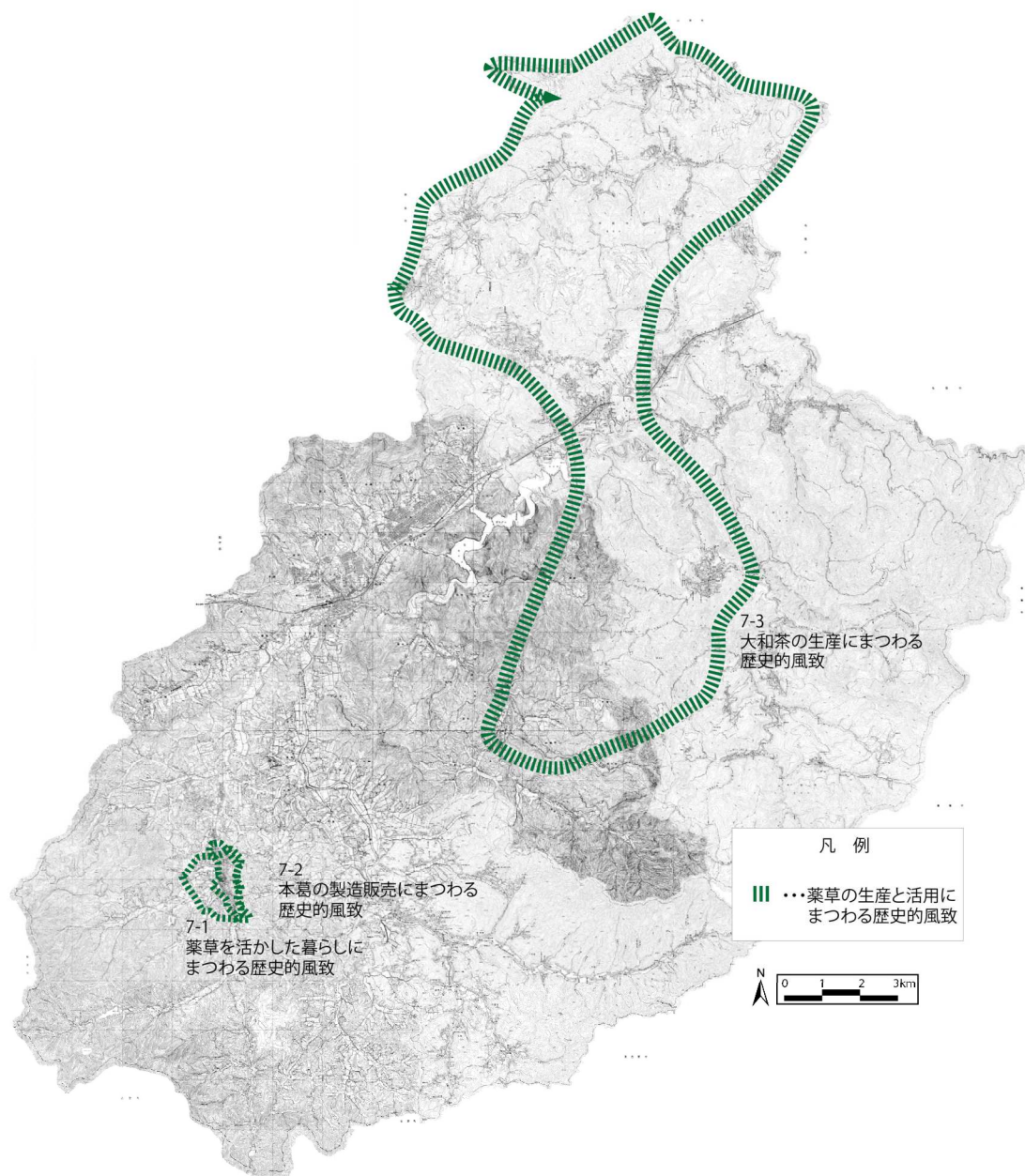
おわりに

宇陀は、古代から宮廷の薬猟の地として認識されてきたほか、薬草の栽培に適した気候から、江戸時代には質の良い薬草の産地として紹介される地域であった。日常生活の中で、草餅やどくだみ茶など、薬草を活かす知恵や風習等が受け継がれている。

また、寒冷な気候と清らかな水を利用し、吉野本葛の生産が行われてきた。白いダイヤと形容される葛粉の精製は、おもに宇陀松山の歴史的町並みの周辺で行われ、そこで作られた吉野本葛は、近隣の和菓子屋や料理旅館などで提供されてきた。

当初は薬として栽培が始まった大和茶は、佛隆寺から広まったと伝わる。茶の種を中国から持ち帰った堅恵上人の墓所の前では、毎年、茶の生産組合による法要が続けられている。

良好な歴史的環境を舞台に、これらの活動が相まって、良好な歴史的風致を形成している。



8. 宇陀松山の水路と商いゆかり の行事にみる歴史的風致

はじめに

古代は宮廷の薬^{くすり}猟^{がり}の場とされ、古くから人の営みがあった宇陀松山。造り酒屋、和菓子屋、醤油屋、呉服屋、道具屋、薬屋など、昔から続いている商家が並んでいる。この町は、南北朝時代から戦国時代にかけて国人領主の秋山氏⁵⁰により築かれた居館と城、城下に作った町場から始まった。

宇陀松山は和歌山方面から伊勢へ向かう際、北へ向かえば伊勢本街道・表街道の分岐へ、東へ進めば高見峠を越えて松坂へとつながる好立地にある。また、近隣の農村でとれた農産物や、加工品、木材などがここに集まり、宇陀郡一円から多くの買い物客が訪れ、定期的に市が立つ商売の町として発展。近代に入ると主要な行政機関が置かれ、更なる賑わいを見せた。

明治22年(1889)の町村制の施行に伴い、旧城下町の範囲が松山町、その周辺部が神戸村^{かんべむら}となった。行政区画は分かれたが、小学校や実業補習学校は共同運営しており、『町勢要覧』(昭和8年(1933))の地図でも松山町の範囲を大きく越えて神戸村の町場が入る範囲までを掲載している。松山町と神戸村、成り立ちの背景はそれぞれ異なる別の町であるが、生活圈はひとつのまとまりとして認識されている。

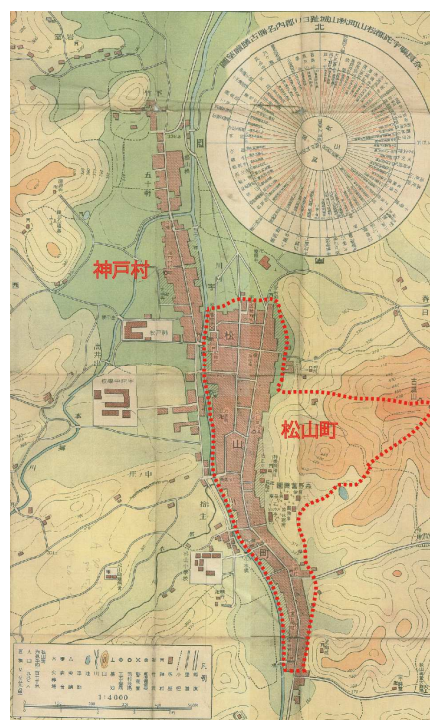
この町を読み解くうえで、水路が重要な役割を担っており、日常生活でも災害時も、その存在は欠かせない。また、町家が連続した密集市街地であるため、防火対策に関する意識の高さが、物や活動にも表れている。この地域に現在も伝わる、以下の活動について紹介する。

8-1 各大字の参会にまつわる歴史的風致

8-2 前川とその周辺に残る水路にまつわる

歴史的風致

8-3 施行にまつわる歴史的風致



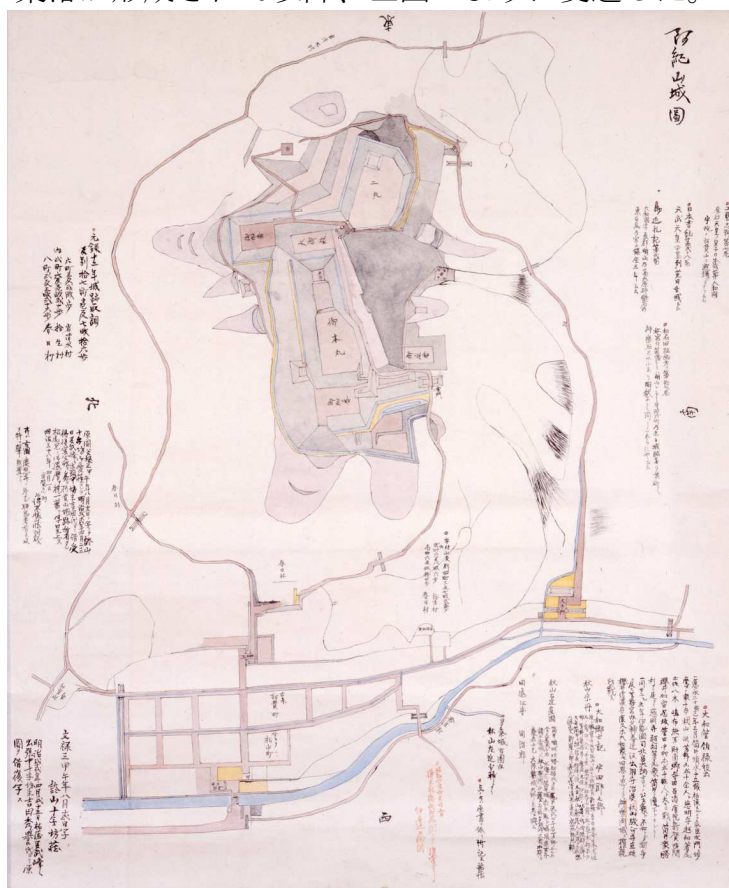
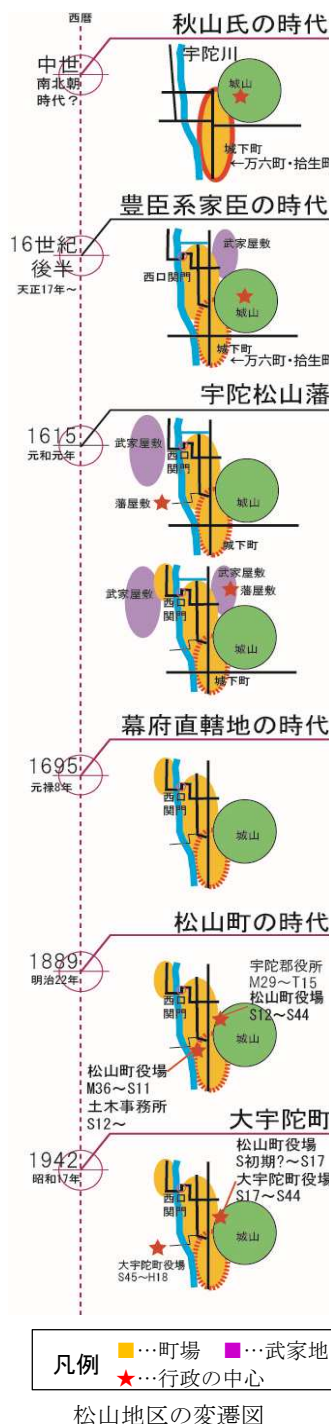
『町勢要覧』昭和8年(1933)

⁵⁰ 秋山庄(大宇陀本郷周辺)を治めていたが伊勢国司北畠氏に被官しその加護を受けて成長した国人領主。沢氏・芳野氏と並び宇陀三将と呼ばれた。

8-4 宇陀の初市にまつわる歴史的風致

宇陀松山の成立と変遷

宇陀市大宇陀には「宇陀の松山」と呼ばれる町場があり、その東に「古城山（通称「しろやま」）」がある。戦国期に始まったとされる宇陀松山は、在地領主である秋山氏⁵¹の居城「秋山城」とその城下町「阿貴町」として誕生し、万六町から拾生町にかけて、集落が形成されて以降、左図のように変遷した。



『阿紀山城図』

天正 13 年(1585)、豊臣秀長が大和郡山城主となり大和の国衆を一掃、秋山氏は城を追放された。秋山城には豊臣家配下の大名、伊藤義之^{いとうよしゆき}が入って以降、幾度か城主の変遷があったが⁵²、この間に城の改修と

⁵¹ 「秋山氏」の古文書における表記は、阿貴山、阿紀山、秋山と、すべて「アキヤマ」と読ませるが用いる字が多様である。同じ絵図上でも、「阿紀山」城図、「阿貴」町など、読みは同じで異なる字を当てて表現している。

⁵² 城主は、伊藤義之（天正 13 年（1585）～14 年（1586）紀州合戦にて戦死）→加藤光泰（天正 14 年（1586）～天正 16 年（1588）佐和山城在番となる）→羽田正親（天正 16 年～文禄元年）→多賀秀種（文禄元年（1592）～慶長 5

城下町の拡張整備が行われ、町名を松山町に改めた。

元和元年(1615)、福島高晴の改易により宇陀松山城は、小堀遠江守正一・中坊左近秀政の手により破却され、以後、城は使われなかった。

そののち、織田氏⁵³が入って松山町の西、宇陀川を挟んで向かいの長山に藩屋敷を構え、その北側に武家屋敷を配置し藩政を行った。寛文11年(1670)古城山西麓に向屋敷、貞享2年(1685)春日神社北側に上屋敷を建設。

元禄7年(1694)、「宇陀崩れ」と呼ばれるお家騒動で第4代藩主信武が自刃、翌年丹波の国柏原へ国替えとなり松山藩は廃される。約80年の織田氏の支配ののち、松山町は幕府の直轄地となった。織田氏の国替えにより、町の人口は減少したが交通の要衝地に変わりはなく、松山町は商家町⁵⁴として発達した。当時主要な産業として、絞油、薬種、合薬、質、三商売(古着・古鉄・古道具)、宇陀紙、吉野葛などがあった。毎月市が立ち、その賑わう様を「宇陀千軒」「松山千軒」と呼んだ。

明治22年(1889)、松山上新町ほか13カ町が合併し松山町が成立。翌年には裁判所が置かれたほか警察署、宇陀郡役所、宇陀郡立図書館、奈良県第三公営所(奈良県宇陀土木事務所)、郵便局などが設置され、宇陀地域の中核として成熟する。明治後期には娯楽施設として芝居小屋ができ、大正6年(1917)には乗り合いバスの運行が始まった。

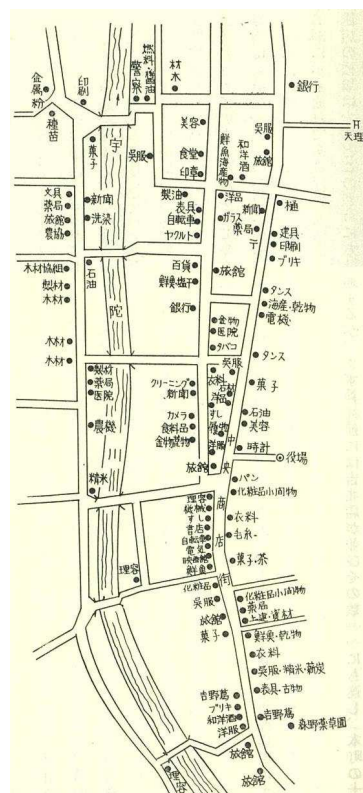
昭和31年(1956)の店の分布図を見ても(図1-1-4)、多くの商店が並ぶ。この賑わいは昭和40年(1965)まで続いた。現在は商いの形が変わり、



昭和初期頃の宇陀松山



平成3年頃、歳末の中央商店街



『大宇陀町史』より商店分布図

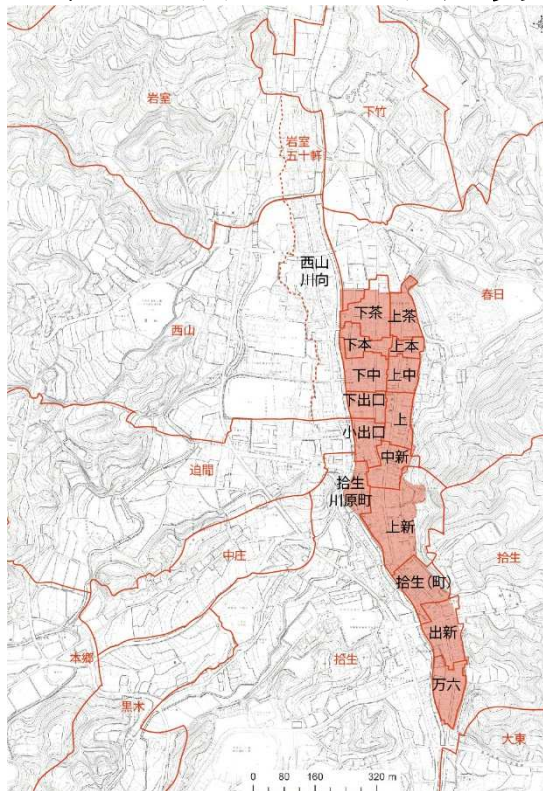
年(1600)関ヶ原の戦いで石田側に加担したため改易)→福島高晴(慶長5年(1600)～元和元年(1615))と続いた。

⁵³ 初代藩主は織田信長の次男、織田信雄(のぶかつ)。寛永7年(1630)から織田高長が2代藩主となり、万治2年(1659)から織田長頼が3代藩主、元禄2年(1689)から織田信武が4代藩主をつとめた。

⁵⁴ 周辺部からの物資が集まる場所で、これらの交易により発展した商業の町。

対面販売の店舗の数は減ったが、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された平成 18 年（2006）以降、観光客が増加し、飲食店が少しずつ増えている。

松山・神戸の大字区分



宇陀松山周辺の大字区域図（現在の呼称）



『松山町古図』

（寛文 10 年（1670）～元禄 6 年（1693）頃）

宇陀市では、大字^{だいじ}とよぶ行政単位がある。町内会活動等を行う際の生活共同体としてのひとつのまとまりで、左上の図のとおり赤い網掛け部分の旧城下町（＝松山町）はほかの大字に比べて細かく区画割されている。『大和国宇陀御用 中諸事覚^{じおぼえ}』（元禄 8 年（1695））に「宇陀松山町数拾六町」とあり、この 16 町は上左図（「宇陀松山周辺の大字区域図」）の黒字で示した町々で、明治 18 年（1885）に「万町^{よろずまち}」と「六軒町^{ろっけんまち}」が合併し「万六町^{まんろくちょう}」に名称が変わったほかは、名称も区分も現在と同じである。

現在、町家群が残るのは、旧城下町と西山川向・岩室五十軒の範囲で、『松山町古図』（寛文～元禄 6 年頃）に記載された町場と概ね重なる。

近世からは「松山川向町」「松山五十軒町」と呼ばれ、「宇陀松山」を構成する町のひとつとして扱われていた。その間、川向町は西山村に、五十軒町は岩室村に属し、明治 22 年（1889）の町村制施行で旧城下町は「松山町」、川向町と五十軒町は「神戸村^{かんべ}」にわかれた。

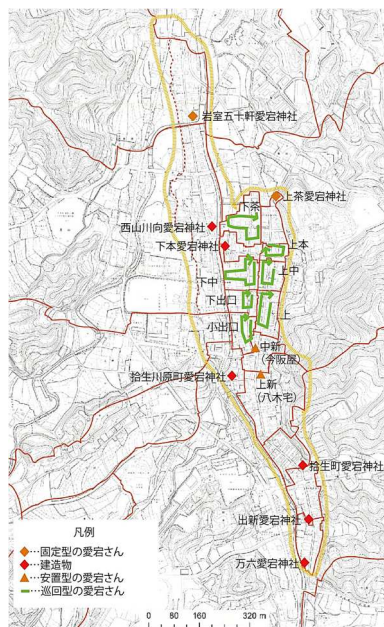
8-1 各大字の参会にまつわる 歴史的風致

(1) はじめに

旧松山町および西山川向・岩室五十軒の各大字では、「参会^{さんかい}」という行事がある。上町の年寄の交代に際して作成された引継書『取締請書連印帳』（文政10年（1828）山邊家文書）によると、「正月・五月・九月の参会はじめ町集会の際には（以下略）」という記述があり、江戸時代末期には参会の存在が確認できる。大字により日程や内容は異なるが、現在でも概ね1月、5月、9月に当番の家または集会所に大字内の各世帯の代表（家長でなくてもよい）が集まり、火伏せの神「愛宕さん（愛宕神社本殿を含む境内地または愛宕祈禱札を納めた館の呼称）」にお供えとお参りをすることを「参会」と呼んでいる。

愛宕神社のお参りが主な活動だが、伊勢神宮への代参にかかる相談や、伊勢大麻の配布を行っていることから、伊勢講を兼ねた集まりでもある。大字の全世帯の代表がほぼ揃うため、町内会関連の連絡や相談もこのときに行われる。

松山地区における参会は、「愛宕さん」の形態により3つの類型に分けられ下図のように分布している。



愛宕さんの類型別分布図

「①固定型」は、大字境に愛宕神社を建てている。ここに集まってお参りをしてから集会所等へ移動して直会と事務連絡を行う。お灯明の当番がある。

「②巡回型」は、愛宕祈禱札を館に納め、参会が行われるごとに（4か月周期）当番宅を巡回する。当番宅（または集会所等）でお参り・直会・事務連絡を行う。

「③安置型」は、愛宕祈禱札を館に納めて持ち運べる状態にあるが、大字内を巡回せず特定の家に安置されている。参会の際にその家を訪問して玄関先でお参りをしてから（普段は床の間に安置し、参会の際にあわせて玄関先へ出す）、集会所等へ移動して直会と事務連絡を行う。



①固定型の愛宕さん



②巡回型の愛宕さん



③安置型の愛宕さん

(2) 建造物

【万六愛宕神社】

旧松山町の南端に位置する。由緒不明だが、松山町古図に現在とほぼ同じ場所に記されている。間口3間の敷地に石積みの基壇があり、瑞垣を回した中に灯籠、更に瑞垣で囲んだ中に本殿が鎮座する。

宝暦3年（1753）銘の灯籠が残り、本殿は一間社春日造、銅板葺。瑞垣の内側で参会のお供えやお参りを行い、地藏盆では周囲に提灯を飾る。背後にある集会所で、参会や地藏盆、寒施行などの準備や直会が行われる。



万六愛宕神社

【出新愛宕神社】

万六と出新の境界に位置する。本殿に納められた修理銘札によると、正徳元年（1711）に遷座し、現在の社殿は享和元年（1801）以来、不定期に修理を重ねているもので江戸時代後期には既にあったとみられる。参会のお供えやお参りは本殿前で行う。

境内の間口は2間ほどで、両脇に石灯籠を置き、門・鳥居、瑞垣を設けて1段高い場所に瑞垣を回しその中に本殿がある。前川までの敷地南側に板塀を設ける。本殿は一間社春日造、銅板葺。



出新愛宕神社



参会時に撮影した集合写真
（昭和35年（1960）頃）

ひろ う まち
【拾生町愛宕神社】

出新と拾生町の境界に位置する。本殿内に9枚の修理銘札が残り、これによると元文6年（1741）に最初の造営を行い、現在の本殿・神門・瑞垣は大正8年（1919）に新調した。石組みの基壇に瑞垣・門を構え、その中に鎮座する。一間社春日造、銅板葺。参会のお供えやお参りは本殿前で行う。



拾生町愛宕神社

ひろ う かわら まち
【拾生川原町愛宕神社】

『松山町古図』（208頁に掲載）を見ると、当初は拾生土橋（今の御殿橋）の脇に鎮座していたが、『新訂大宇陀町史 史料編第3巻』（大宇陀町史編集委員会/平成13年（2001））によると大正6年（1917）に現在地に移転した。由緒は不明である。

切妻妻入の覆い屋の中に一間社春日造、銅板葺の社殿が納められている。参拝は覆い屋の中に総代が入り、基壇の下に大字の人が集まって見守るなかで行われる。



拾生町愛宕神社修理銘札（大正8年（1919）改築時のもの）



拾生川原町愛宕神社

しもほん
【下本愛宕神社】

由緒不明だが、松山町古図には現在地とほぼ同じ場所に神社が描かれている。本町通の曲がり角に境内があり、石鳥居の奥に切妻造の覆い屋が建てられ、その中に本殿がある。背後には宇陀川が流れている。

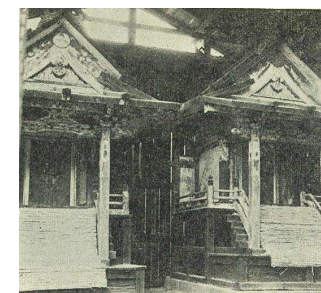
南側が恵毘須神社、北側が愛宕神社である。いずれも一間社春日造、板葺で彩色が施されている。創建時期は不明だが、『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和34年（1959））に現在と同じ姿で写っており、建材は相応に古い。



下本愛宕神社（右側）

かわむかいまち
【川向町愛宕神社】

黒門の川向かいに鎮座する。松山町古図には現在地とほぼ同じ場所に描かれている。神門の両脇に石灯籠を配し、金刀比羅社と並んで本殿が鎮座する。



昭和34年（1959）当時の下本愛宕神社

一間社春日造、銅板葺で、大正4年（1915）に本殿・末社・神門の屋根修繕をしたと『新訂大字陀町史 史料編第3巻』（平成13年3月/新訂大字陀町史編集委員会編）に記録が残る。また、宝暦7年（1757）に奉納された常夜灯があり、古くからこの場所にあったことが伺える。



川向町愛宕神社

【^{かみちや}上茶愛宕神社】

松山町の北端、道路面から少し高い場所にある。松山地区の愛宕神社の中では境内地が最も広く、狛犬が置かれ、瑞垣が巡らされている。奥に安置された本殿は木造一間社流造の銅板葺で、年代は明らかでない。



神社前の常夜灯

境内から道路に接する階段右側に「愛宕神社」と書かれた石柱があり、背面に大正11年（1922）5月建立とあり、それ以前からあったことが推測される。



上茶愛宕神社

毎月第一日曜日に氏子が集まって境内の清掃を行うほか、参会はこの場所で行われ、晴天時には境内地で直会も行う。

【^{いわむろ}岩室愛宕神社】

本郷川と宇陀川の合流点、庚申橋のたもとに建つ。『宇陀郡神社明細帳』（明治24年（1891）奈良県庁文書）には「本殿桁行式尺 梁行壺尺五寸」とあり、現在の本殿と同規模の記載があり、建物の風食等の様子から、当時からあるものと推察できる。



上茶愛宕神社本殿

毎日の献灯当番が続いており、個人によるお参りや献花が頻繁にある。



岩室愛宕神社

（3）活動

【参会（伊勢講・愛宕講）】

固定型の愛宕さんを持つ大字は、万六、出新、拾生町、拾生川原町、下本、上茶、川向町、岩室（五十軒）である。愛宕神社の前でお百灯（社殿の前に出した燭台



お百灯の様子

に数十本のロウソクを立てて火を灯す)をして、本殿にはお酒と海の物(青魚)、山の物(野菜)を供える。供物はお下がりとして宴席に出し、野菜果物は各戸に分配する。昔は正装で集まったが、現在は平服で参拝する。

固定型の愛宕神社は、3日に1日程度、宵の口に^{よい}献灯^{けんとう}当番があり、ロウソクを灯した木製の^{あんどん}行灯を手に提げて愛宕神社にお参りする。愛宕神社には前日に参った人が置いた行灯があるので、持ってきた行灯と入れ替えてこれを持ち帰り、次の当番の家へ届ける。

大字内で1軒ずつ順番を回しており、親族などに不幸事があった家は、喪が明けるまで当番は免除される。

巡回型の愛宕さんを持つのは、上・上中・上本・小出口・下出口・下中・下茶である。参会の日の午前中に、当番の家または集会所に「館」を運び、そこで参会が行われる。当番の家が預かった「館」は、次の参会まで床の間に安置する。

右の写真は当番の家に安置された館の様子で、左側がこの家が持つ愛宕さんの館⁵⁵、右側が大字の愛宕さんの館である。

安置型の愛宕さんを持つのは、上新・中新である。玄関先に出された「館」にお参りしたあと、料理旅館等へ移動し宴席を持つ。

参会が終わると各戸に愛宕神社のお札(あるいは伊勢大麻)を配布する。

伊勢神宮の代参は現在も続いている。持ち帰った愛宕神社のお札は、台所に貼るか、各戸でまつてある愛宕祈禱札の館に納める。伊勢大麻は神棚に納める。

代参の順番は、固定している大字とくじ引きで決める大字がある。全世帯が代参を済ませたら、「総参り」と称して、大字全員で伊勢神宮へ参拝する。



献灯当番



安置された館



直会の様子



上新の館

⁵⁵ 江戸から明治にかけて建てられた家には、その家の愛宕祈禱札が残っていることがある。基本的に床の間に置かれ、大字の愛宕さんが廻ってきたときには床の間に左右に並べて置き、この家の愛宕祈禱札ともども、日々のお世話をする。

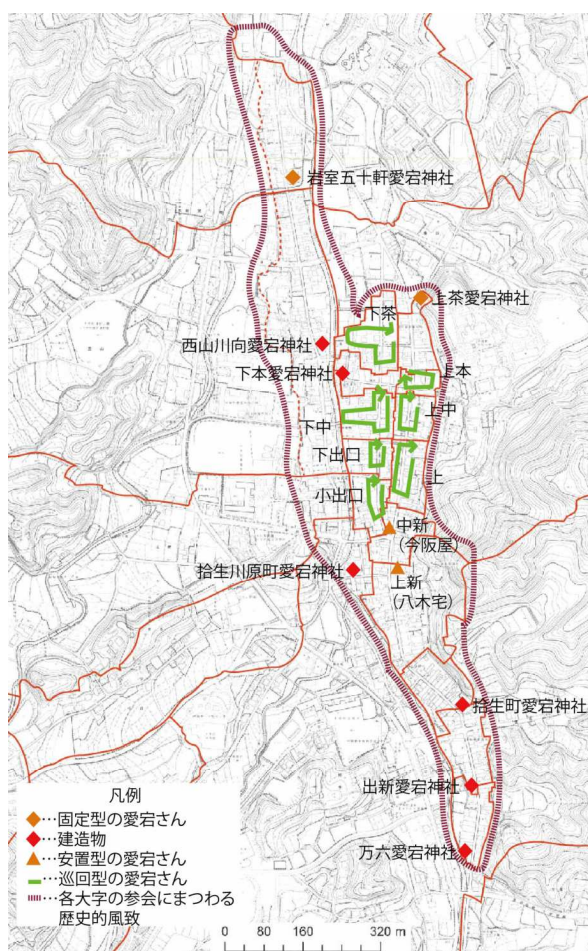
(4) まとめ

木造家屋が密集する町場において、火災は最も恐れられている災いであるため、火伏の神への信仰が篤くなるのはごく自然な流れである。

江戸時代に整備され、大字境に置かれた愛宕神社は、拾生町の愛宕神社を除き、小さな社殿に対して広めの敷地を持っている。これは、町家がひしめく商家町にあって、火除地の役割も兼ねていると考えられている。

町境に愛宕神社がない大字でも、愛宕祈禱札を収めた館を順番に祀る風習が残り、いずれの大字も年3回（上新のみ年2回）の行事を江戸時代から続け、互いの親睦を深めながら防火への意識付けを促してきた。また、固定型の愛宕神社の大字では、日々の献灯が続く。

重厚感のある町家群を舞台に行われる参会。旧当番の家から当番の家へと、大事そうに抱えられて運ばれる館の様子や、改まった服装で当番宅へ向かう大字の人たちの姿、毎日愛宕さん前で手を合わせる人の姿から、火伏の神への信仰が今も歴史的町並みの中に根付き、年季を重ねた社殿や館と共に良好な歴史的風致を形成している。



松山地区周辺の愛宕さん分布図



献灯当番



館の移動

8-2 前川とその周辺に残る水路 にまつわる歴史的風致

(1) はじめに

旧松山町の特徴のひとつとして、家の前を流れる水路がある。町の南北街路に沿って流れ、地元では「^{まえがわ}前川」と呼んでいる。今も豊富な水量を湛え、心地よいせせらぎの音が静かな町に趣を添える。

『せせらぎと手わざの町 大宇陀・松山～松山・神戸地区伝統的建造物群保存対策調査報告書』（平成13年（2001）3月/大宇陀町）によると、水路は城下町建設当初から織田松山藩時代に築かれたもの、近代になり位置を変えたものがある。

時代の変化に伴い姿を消したものもあるが、前川やその周辺に残る水路は、現在に至っても暮らしに根差した存在であることに変わりはない。役割や背景の異なる水路が、歴史的町並みの形成・発展過程を今に伝えている。



家の裏を通る前川



家の前を通る前川



万六裏の堰と水門

(2) 建造物

【前川（水路Ⅰ）】

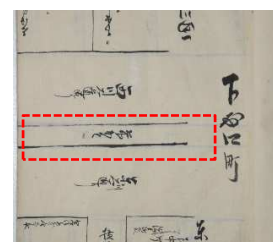
旧松山町とその周辺には様々な水路が敷設されている。町南端の万六裏の宇陀川に堰と門を設け、そこから水を引き込む。水路は町の南から北までを街路とともに貫き、町の骨格をなしている。

町の隅々まで水を届ける役割を持つが、量が多いと氾濫してしまうため、山側からの水路と交差するところで立体交差を設けて水量調整を行っている。

城下町建設時に整備されたと考えられており、『宇陀郡下出口町水帳写』（享保18年（1733））（右写真）では、道の中央に前川が描かれている。いつごろ現在の姿になったかは不明であるが、大正6年（1917）には松山自動車商会による乗り合いバス事業が始まっており、道



前川と山側から注ぐ水路の立体交差



宇陀郡下出口水帳写

路の中央に水路があると通行に支障をきたすため、その水路が振り分けられたと考えられる。『松山町外観』（昭和3年（1928）の写真では、道の両端に水路がある。

【水路Ⅳ】

水路Ⅰから北へ続く2本の水路。西側は水路としての機能は失っているが、東側の水路は農業用水として現在も活用され、松山地区の北側の田を潤し、水利組合員により維持・管理されている。

織田家宇陀松山藩時代に、古城山西麓への藩屋敷造営により松山町北側の春日地区へ一部移転・拡張された武家屋敷地への生活・防火用水の供給のために築造されたとみられる。



昭和3年（1928）時点で道の両側に水路が振り分けられている。



水路□

【水路Ⅴ】

松山町東側に開口する3箇所から谷筋部分から宇陀川へ注ぐ水路。aは17世紀後半(1670～)の織田家宇陀松山藩時代、b、cは城下町建設時に町場東側の谷水の排水のために整備されたとみられる。この水路は現在も利用されており、ところどころに石積みが残る。



水路□ b

（3）活動

現在、前川の水は鉢植えの水や打水、道具についた泥を落とすときなど、生活用水として使うほか、農業用の水路としても活用されている。

『松山町風俗資料』（大正4年（1915）/松山町）には、採涼のため「戸外撒水ノ用ヒラルヽ状況 如何なる家にて一日三回以上の撒水を行へり。之に用ふる水は多くは前を流るヽ小川の水を杓にて扱み、其のまヽ直ぐに撒くなり」とあることから、このころには既に利用されていたことがわかる。

堰を設けて田に水を引き込んでいるのは松山地区の北側で、毎年田植えの直前（4月末の休日）に水利組合員が集まって水路の泥揚げと周辺の清掃を行っている。

また、水路のところどころに溝が刻まれ、付近には堰板^{せきいた}が置かれている。これは、防火用水として使うためのもので、火災時には東側の水路をせき止めてポンプで水を汲み上げる。毎月2回、消防の点検が行われるほか、豪雨が予想される

ときは、水が氾濫しないよう水門を閉め、災害に備える。

毎年、6月の第2日曜日には、大宇陀全体で川の一斉清掃を行っている。旧松山町の場合は水門を閉め、前川の溝の泥さらいや、石垣の間から生えた雑草を取り除く作業を中心とした維持管理をしている。『松山町風俗資料』(大正4年(1915)/松山町)によると「宇陀川ノ上流ヨリ町内の水ヲ引キテ、撒水洗濯等ニ使用セリ。全部石垣ナルヲ以テ河身浚渫ノ必要ヲ見ザルモ、塵芥ノタメニ水ノ流通セザル時ハ各自ニ掃除ヲナス。」とあり、このころには既に水路の水を止めて清掃を行っていたことがわかる。



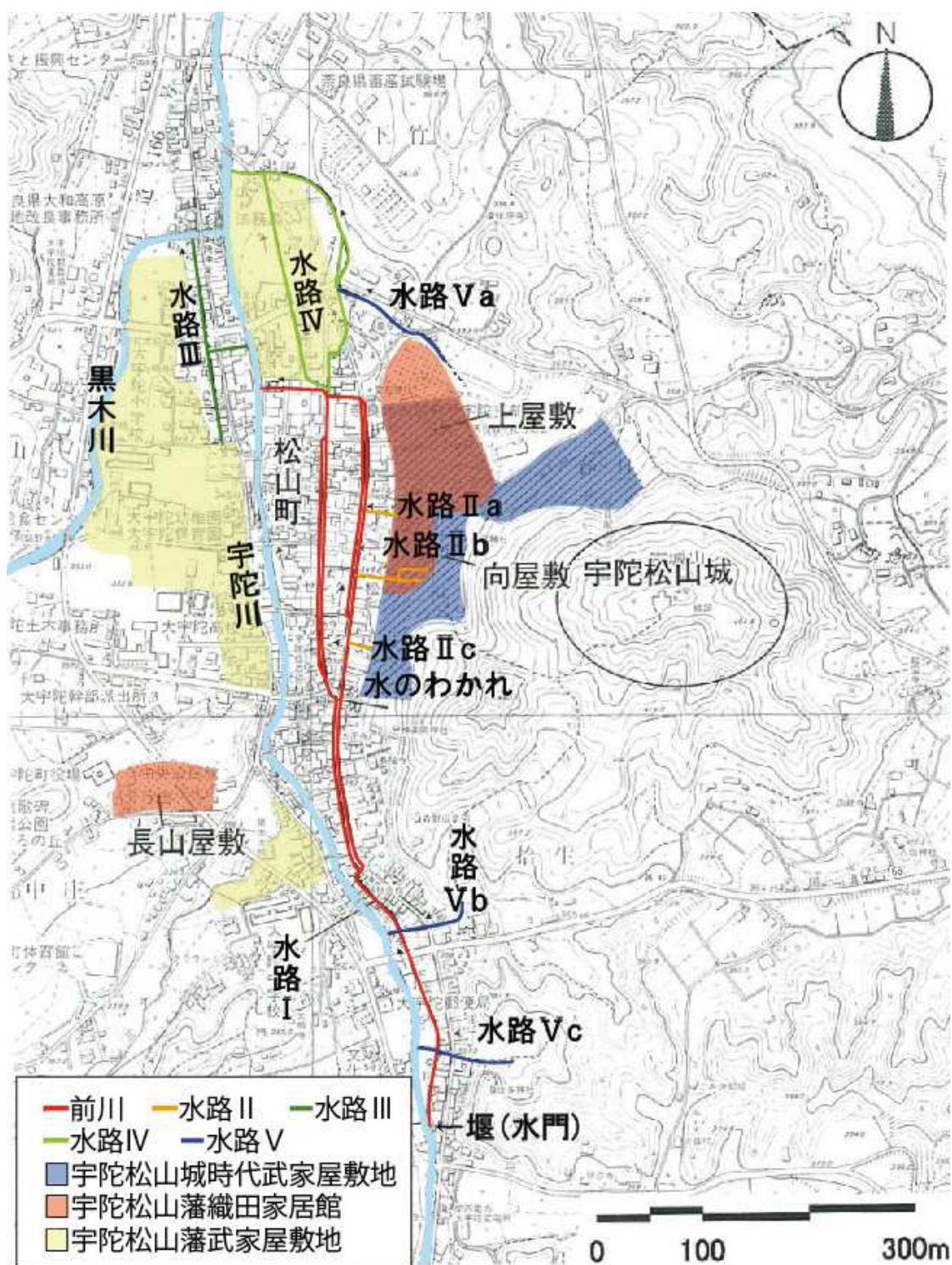
打ち水風景



水路の泥揚げ作業

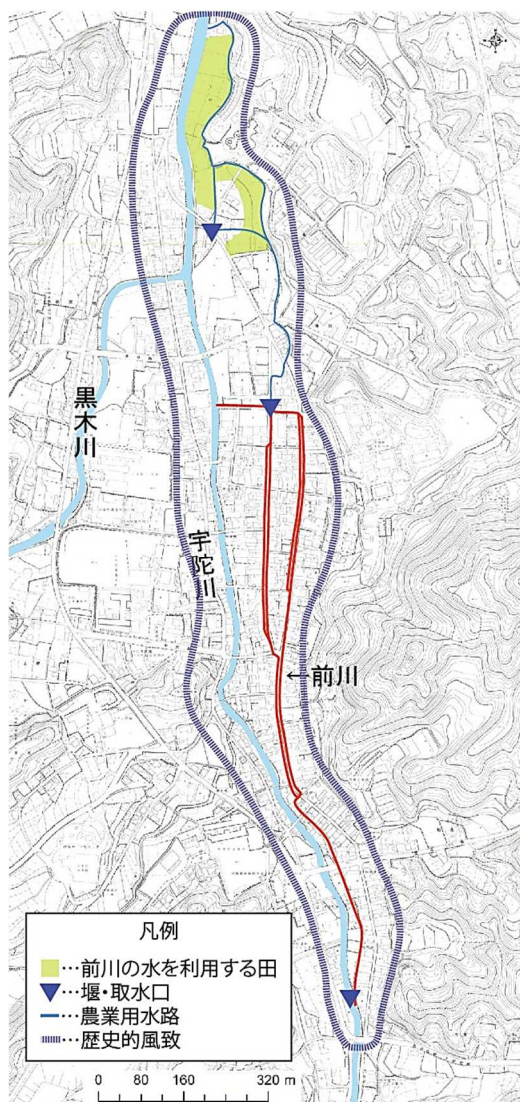


火災時は前川に堰板を入れる

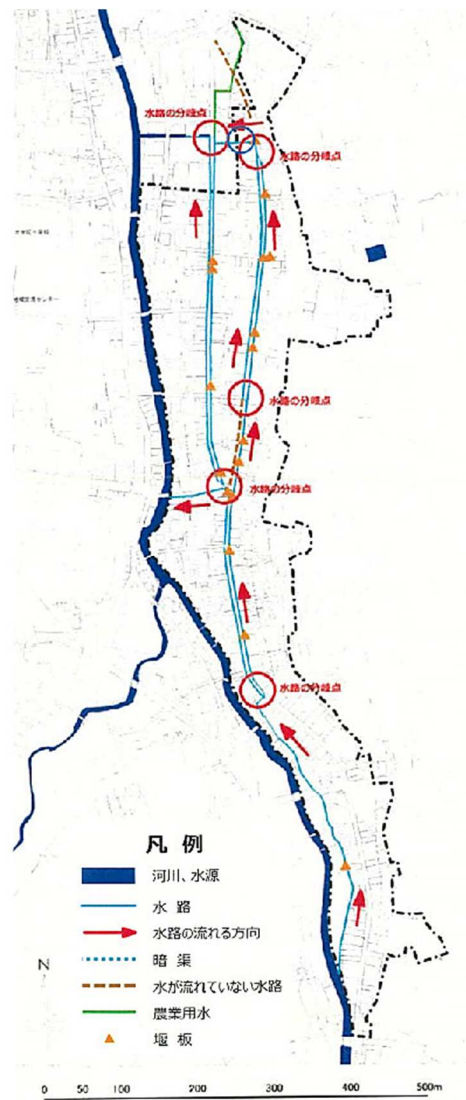


旧松山町と周辺町場の主な水路

※出典：上野邦一 編集『せせらぎと手わざの町 大宇陀・松山～松山・神戸地区伝統的建造物群保存対策調査報告書』平成 13 年（2001）3 月/大宇陀町教育委員会 発行/



前川が潤す水田の分布図



水路の現状および堰板の分布

(4) まとめ

宇陀川から引き入れた水は、松山の町を網羅し、花の水やりや打ち水や道具類の泥落としなど日常的に使われるほか、防火用水、農業用水の役割を果たして再び宇陀川へ戻る。町や田の隅々へ水を送れるよう、毎年の泥揚げ作業は欠かせず行われ、その機能や美観が維持されてきた。

水路の歴史を遡れば城下町を整備した近世初頭に辿り着き、当初は道の中央を流れていたが、近代までに現在の姿となったと考えられている。町の中を流れる水路は、松山地区の景観を考えるうえで重要な要素であるだけでなく、軽快なせせらぎの音や水路とともにある暮らし方が今も息づいており、良好な歴史的風致を形成している。

せんぎょ 8-3施行にまつわる歴史的風致

(1) はじめに

寒施行は野施行^{の せぎょう}とも言い、「施行」がなまって「せんぎょ」と呼ばれている。かつては近畿一円で行われていたとみられる稲荷講の一種で、落語や絵本でその様子が描写されている⁵⁶。現在は奈良県五條市大塔^{おおとう}や、宇陀松山^{まんのく ひろ う まち かみしん}で存続が確認され、宇陀松山でも万六、拾生町、上新は実施しているが、それ以外の大字については、50 年ほど前から今日までに行われなくなった。地域によっては商売をしている家が個別に施行に回っていたとも聞くが、宇陀松山では大字単位で実施している。

施行の行先について聞き取りを行ったところ（休止中の大字も含む）、行き先は主に山の上や中腹で、大字ごとに多少行き先が異なるが、全てを重ねると概ね宇陀松山周辺の人里と里山の境界が見えてくる。

(2) 建造物

【佐多神社本殿】

社殿の中に棟札があり、明治 29 年（1896）建築。古絵図には記載がなく、このときに境内地一体が整備されたとみられる。本殿は三間社流造、銅板葺。木鼻や絵様など細部意匠まで丁寧に作り込んである。

万六町で守る神社で、寒施行ではすべての大字がこの神社を訪れている。



佐多神社本殿



昭和戦前の佐多神社の様子（酒蔵の背後にある）

【大願寺本堂】

由緒不詳、国道 166 号線と国道 370 号線との分岐点に位置する。宇陀松山藩主織田家の加護を受けた寺で、毘沙門堂は第 4 代藩主織田信武の発願と伝わる。現在の本堂は上棟記念に寄進者へ配布された槌^{つち}によると、昭和 5 年（1930）再建と柄^えに記されている。右写真）木造入母屋造、棧瓦葺。

境内には寒施行で回る場所である稲荷社、白山神社のほか、仏足石、行者堂、おちゃめ庚申が残る。



大願寺本堂



柄に記された上棟日

⁵⁶ 上方落語『吉野狐』では若旦那が芸妓を連れて奈良町で豪遊中に野施行をする場面がある。『こんこんさまにさしあげそうろう』森はな 作/ 梶山俊夫 絵/1982 年 PHP 研究所/ 狐の側からみた寒施行の様子を描写している。

【白山神社】

大願寺境内の小高い台地に鎮座する神社。『宇陀松山藩御用部屋日記』に、加賀国の白山神社を勧請し、延宝3年（1675）9月10日竣工祝いに米三石を供えたとある。正徳5年（1715）の年号が記された棟札が残る。木製の神門と瑞垣で囲んだ中に一間社春日造、銅板葺の社が安置されている。



白山神社

【松山会館】

棟札によると、明治36年（1903）に竣工した旧町役場。木造二階建（吉野建て）、片側入母屋造、棧瓦葺。木造、漆喰、屋根瓦と、日本の伝統的な建材を使い周囲になじむ外観を持つが、小屋組みはトラス造で、舶来技術を取り入れた建物である。



松山会館

寒施行、参会など地域の寄り合いで利用するほか、宇陀松山まちづくり協議会の拠点に使われている。

（3）活動

【寒施行】

「せーんぎょーや、せーんぎょーやー」「おいなりさんのせーんぎょーやー」1月下旬の大寒から節分にかけて、空気の冷え切った夜の里山に響く子供たちの声。大字の男性と子供とで編成された短い隊列が、懐中電灯とお供えをめいめいに持って大願寺の急な階段を登っていく。商家町宇陀松山に残る稲荷講の一種、寒施行の風景である。



大願寺稲荷社

寒施行が始まった時期は定かではないが、『松山町風俗資料』（大正4年（1914）/松山町）によると“寒入りノ日ニハあぶらげヲ食フ 寒参り、寒施行（寺院の晩（ママ）僧）、寒稽古は種々ノ方面ニ行ハル”とあり、このころには寒の入りから節分までの間に行われていたようである。



社や祠にお供えをする

施行当日は昼過ぎから、松山会館や万六会館等、集会所等に集まり、準備を始める。小豆のお握りを

握り、油揚げを折に入れ、集会所に近い神社（万六は佐多神社、上新・拾生町は長隆寺）から時計回りに、里山と人里の間にある稲荷社や祠 12～13 箇所に分けて回る。

山に食べ物が乏しい時期に狐に施しを行い、商売繁盛を願う伝統行事である。行列はひと通り分けて回ったあと、集会所に戻り直会をする。

直会の食事はきつねうどん（万六・上新）、鯖飯と粕汁（拾生町）など、大字により違う。かつては夜に回ったが、安全のため現在は明るいうちに回り終えるように段取りをしている。



長山の稲荷社



城山の稲荷社への道

（４）おわりに

商売繁盛を願い、商家が中心になって行っていたという寒施行。極寒の中、人里と里山の境にある神社あるいは祠（跡地等も含む）をまわり、食べ物のない時期の狐たちに施しをする行事は、荷物を抱えて長距離を歩く過酷な面もある。少子高齢化の波による存続の危機に晒されながらも、工夫を重ねて続けられている。

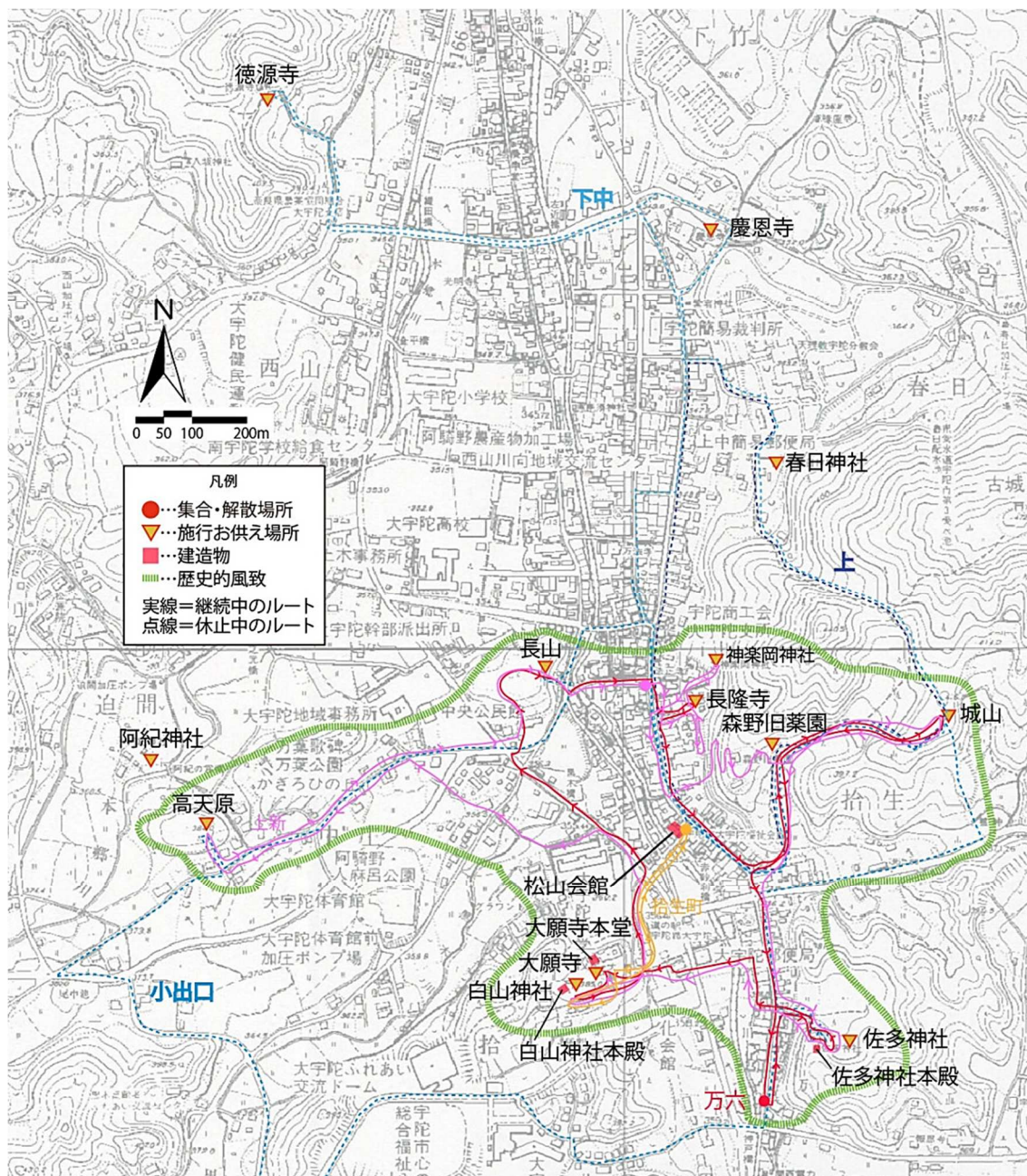
お供えを置く場所となる社殿や、準備・直会の拠点となる建物は長い歴史を持つものが多く、これらの活動とともに良好な歴史的風致を形成している。



高天原のお供え場所



直会の様子



はついち 8-4 宇陀の初市にまつわる 歴史的風致

(1) はじめに

「商売繁盛じゃ、笹もってこい」の声が下町通りに響く2月。下本の恵毘須神社しもほんにおいて、「宇陀の初市」が開催される。「えべっさん」の愛称で親しまれており、恵毘須神社の境内にて祭典等が執り行われるほか、吉兆きっきょう⁵⁷の販売が行われ、福を求めて多くの人が集まり、参道には露店が並ぶ。

『大和国宇陀御用中諸事覚⁵⁸』によると毎月6度(3日、8日、13日、18日、23日、28日)、宇陀松山に市が立ち、宇陀郡一円の人が買い物に来たとある。また、『市場一件諸書物⁵⁹』(安永9年(1780)上山邊家文書)によると、3のつく日は上中・上の両町で、8のつく日は下中・下出口しもなか しもでぐちの両町で市立てが行われていた。年の初めに立つ市なので初市と呼ばれ、その名残が今も続いている。

本来は2月8日の開催で、戦前は会社も学校も半日休みにして参拝していたが、戦後は休日扱いでなくなり平日の集客が年々落ち込んでいた。そのため、より多くの集客を期待して平成30年(2018)より、祭典のみ2月8日に行い、吉兆の販売と露店は祝日の2月11日になった。

(2) 建造物

【恵毘須神社 本殿】

えべっさんの愛称で親しまれている下本恵毘須神社だが、本来は下本愛宕神社の境内社である。初市が盛況になるにつれ認知度が上がり、恵毘須神社の名称で定着したとみられる。

本殿は覆い屋の中に、愛宕神社と並んで納められている。一間社春日造、板葺。木鼻や墓股などの細部に彫刻と彩色を施しており、素木しらき(塗装を施していない



恵毘須神社本殿

⁵⁷ 吉兆とは「いいことが起こる兆し」を指す言葉だが、宇陀市内の初市(えべっさん)においては「いいことを招き入れるための飾り(縁起物で飾った笹、熊手など)」のことを吉兆(きっちょう、訛って「きっきょう」と呼ぶ。

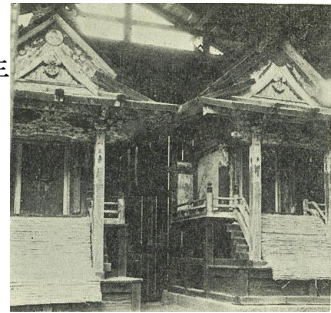
⁵⁸ 『下竹山岡家文書』元禄8年(1695)。戸数、人口、酒屋数・大工数や六斎市等の記載があり当時の松山地区の状況がわかる。

表面仕上げの木材）で建てた社殿が多い松山地区内では珍しい。『大宇陀町史』（大宇陀町史刊行会/昭和 34 年（1959））に現在と同じ姿の写真が掲載されており、建材も相応に古い。

【植田家住宅（かぎや）】

木造つし二階建、切妻、棧瓦葺で丸い虫籠窓が目をはひく。『保存対策調査報告書』によると、江戸時代後期の町家とある。建物に残る痕跡から、表構えはすべて刷り上げ戸であった。江戸時代末期の典型的な町家である。

屋号を「かぎや」といい、絞り油の製造販売をしていたため、「あぶらや」とも呼ばれている。宇陀の初市では、この家の前に露店が並ぶほか、吉兆を持った人々がこの建物の前を通る。



『大宇陀町史』掲載写真



植田家住宅

【久保医院】

文化 9 年（1812）の愛宕祈禱札^{きとうふだ}が残り、そのころの建物とみてよい。つし二階建、切妻、棧瓦葺の町家。

幕末に大阪の適塾で医術を学び、奈良県で最初に種痘をした医師、久保良平が営んだ医院で、現在でも良平の子孫が町医者として地域医療を支えている。

宇陀の初市の際は、吉兆を持った人々がこの建物の前を通る。



久保医院

【喜楽座^{きらくざ}】

明治 32 年（1899）に代議士の演説会で利用したと記録にある⁶⁰。当初は芝居小屋として建てられたが、のちに映画館に改修し、周辺地域の娯楽施設として親しまれてきた。



喜楽座内部

60 『尾崎一行演説会諸事控』周旋人/明治 32 年 5 月 31 日 尾崎行雄代議士の政談大演会開催にかかる段取りを記録した文書の中に、「芝居小屋借料金参円」とある。

木造二階建、片側入母屋造、棧瓦葺き、梁間6間、桁行10間の規模で、芝居小屋の中では小規模な部類に入る。天井桟敷と舞台があり、舞台上手の袖に太夫座、二階に楽屋が残る。舞台下手には大道具を収納し、柱には右写真のような興行成功記念（興行が成功裏に終えたことを記念した際に芝居小屋に残す関係者の書き付け）の墨書が残る。元号がなく三八年とだけ記されているが、少なくとも昭和38年（1963）にはこの建物が存在したことを示す。



舞台下手の墨書、元号がなく三八年と記されてある

格天井や二階手摺など、意匠を凝らした箇所が随所に見られるほか、映画館に改装した際に白と若草色を基調にしたペンキを塗った箇所がある。かつては天井に地元商店の広告をあしらったトタン板が張られており、その一部が建物内に保管されている。

宇陀の初市の際は、吉兆を持った人がこの建物の前を通る。

よしむらしゅぞう 【芳村酒造】

『保存対策調査報告書』によると、昭和16年（1941）竣工、木造二階建、片側入母屋造、棧瓦葺。石張りの腰壁や木枠の窓ガラスなど、近代の要素を取り入れた町家。千代乃松の銘柄で知られる造酒屋の本宅で、南に酒蔵3棟が並び仕込みの時期になると米を蒸す香りが漂う。



芳村酒造

宇陀の初市の際は、吉兆を持った人がこの建物の前を通るほか、店舗の神棚に笹を飾っている。

くぼほんけしゅぞう 【久保本家酒造】

明治42年（1909）竣工（上棟札より）、木造一部3階建、一部表家造、棧瓦葺。多様な意匠の格子を嵌め、虫籠窓や揚げ塗など意匠を凝らした町家。3列9室と間口が大きく、北面に式台を持つ。

西側に仕込み蔵があり、酒蔵カフェを併設している。

宇陀の初市の際は、吉兆を持った人がこの建物の前を通るほか、店舗の神棚に吉兆を飾っている。



久保本家酒造

【万法寺本堂】

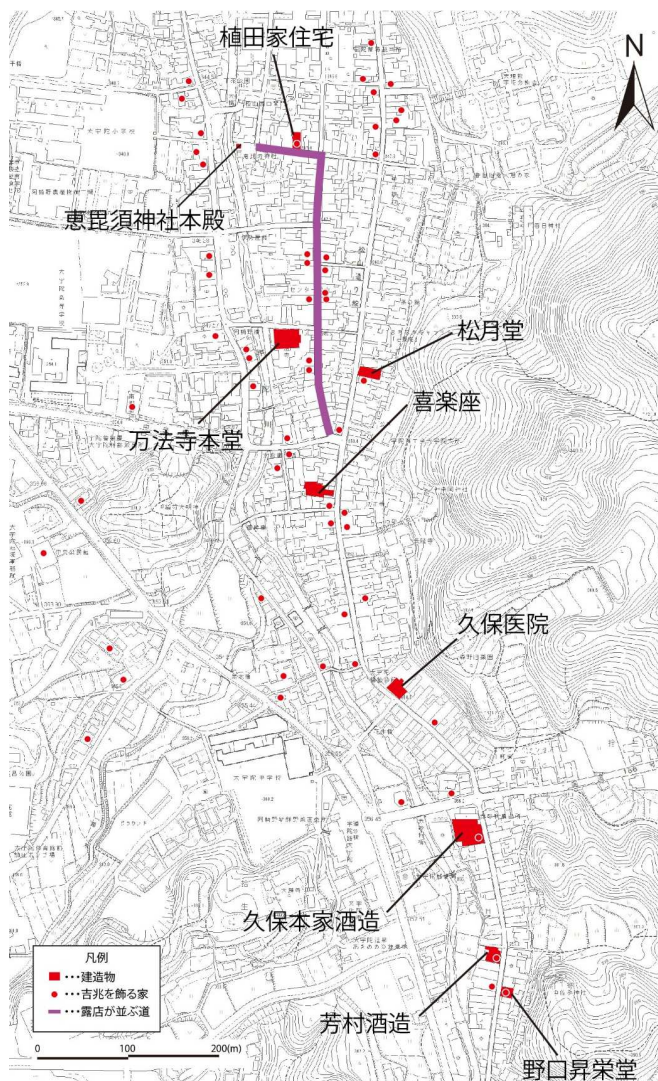
近世初頭、城下町として整備された町中に位置する浄土真宗本願寺派の寺院。寺伝では天正13年（1585）創立という。建物に残る墨書や瓦刻銘によると、本堂は承応2年（1653）建立。江戸初期の真宗本堂の発展過程を知るうえで貴重な遺構として、平成5年に奈良県の有形文化財（建造物）に指定された。初市の際、寺の前に出店が並ぶ。



万法寺本堂

（３）活動

【宇陀の初市】



建造物および吉兆を飾る家の分布（詳細図）

宇陀の初市は、毎年2月8日10時～、下本自治会主催で恵毘須神社の祭典が行われる。2月11日には午前0時から午後8時まで恵毘須神社社務所で「吉兆」の販売が行われるほか、かつて市を立てることが認められた下中・下出口を含む下町通り（小出口～下茶）と、参道にあたる本町通（下本～下茶）に露店が立つ。

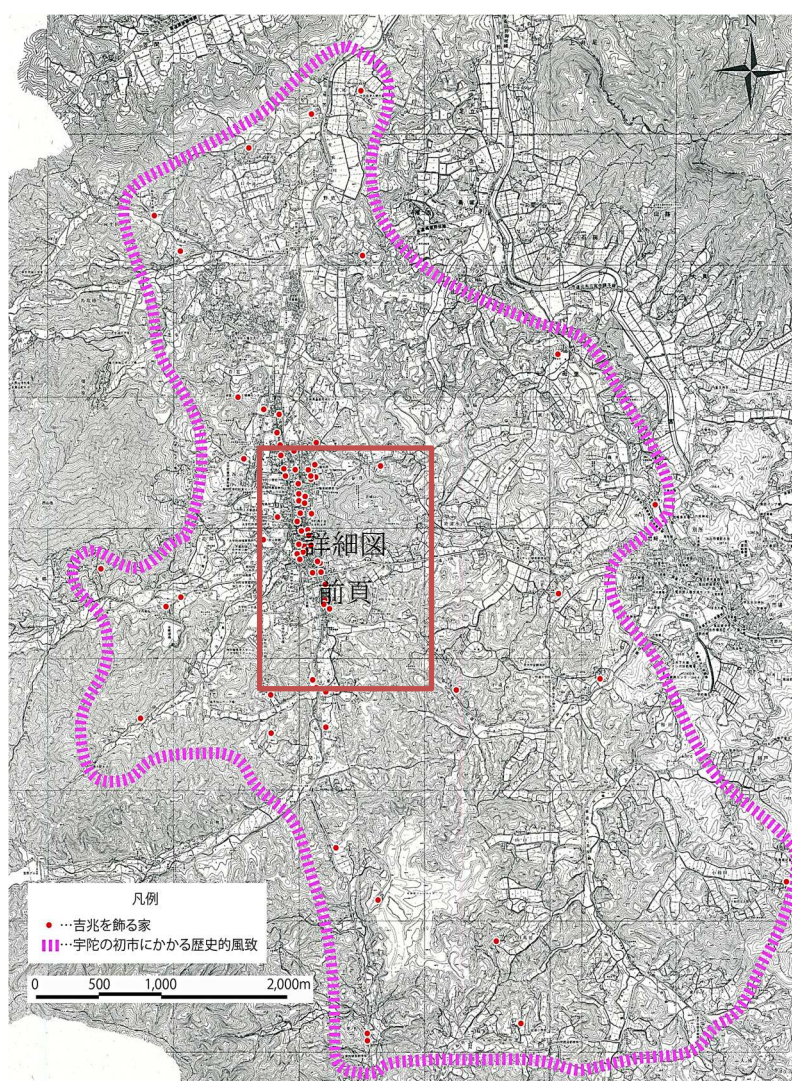
射的やスマートボール、回転焼屋など娯楽や食べ歩きの出店が増えたものの、なかには乾物屋、手芸屋など生活雑貨の店があり、かつての市の名残を伝えている。

恵毘須神社には、近隣の人が前年の吉兆を携えて新たな吉兆を買い求めに来る。恵毘須神社は密集市街地のため、神社の周囲には駐車場がない。そのため遠方からの参拝者は

道の駅などに車を停め、吉兆を手にとって松山重伝建地区内を歩き、久保医院・喜楽座・万法寺・植田家の前を通過して境内に入る。手水舎の奥に前年の吉兆を入れる箱があり、そこへ吉兆や古い札を入れて、本殿の前へ進む。賽銭を入れ、参拝をしたのちに、社務所で新たな吉兆を購入する。

吉兆にはくじがついており、境内のくじ引き会場でくじを引き、景品を貰う。境内の中央には暖を取るための焚火があり、火を囲んで歓談したあと、露店をのぞいて帰宅する。子供たちにとっても楽しい行事のひとつである。

吉兆は、大宇陀一円で商売をしている人が買い求め翌年まで神棚などに飾る。芳村酒造、久保本家などの店舗をのぞくと吉兆が見える。



宇陀の初市にかかる歴史的風致と吉兆を飾る家
令和4年（2022）2月11日調べ



焚火で暖を取る参拝者



神棚に飾られた吉兆



下町通りに露店が並ぶ

宇陀市内のえべっさん

商売繁盛を祈願し、縁起物売る「えべっさん」は、宇陀市内では、榛原・古市場・松井の3箇所で開催されている。いずれも、商売繁盛を願い、恵比須神社で祭典を行い、吉兆を販売する点は共通している。神社周辺には出店が建ち並び、お客を呼び込む声などがより一層の賑わいを創出している。

古市場のえべっさんは2月7日に開催される。宇太水分神社境内にある恵比須神社の前に吉兆が並べられ、門前に出店が並び、地域の人が笹を求めて訪れる。松井では第1日曜日の開催で、松井の恵比須神社周辺に出店が並ぶ。



古市場・松井のえべっさんの会場



宇太水分神社 門前の様子



古市場の吉兆

榛原は、2月10日に開催される。松井の恵比須神社にあった御神体の石が水害で流され、行き着いた先が榛原の恵比須神社である、という伝説が伝わる。榛

原駅前商店街に出店が並び、参拝客のほかに学校帰り・仕事帰りの人も入り混じって大いに賑わいを見せている。



榛原恵比須神社前の風景



駅前商店街の活況



榛原の吉兆写真



榛原のえべっさん（令和5年2月10日開催時）

（４）おわりに

宇陀の初市は、もとは江戸期に松山の上町通りと下町通りで交互に市を立てていたときの名残で、あるときから行事として定着したと考えられている。運営体制や露店に並ぶ品物は時代に連れて変わっているが、参拝客や買い物客を迎え入れる町家の連坦^{れんたん}は大きく変わらず、前の年に買った笹を携えて恵比須神社へ訪れる人々と、歴史の積み重なりを感じられる環境で活動が続けられている。



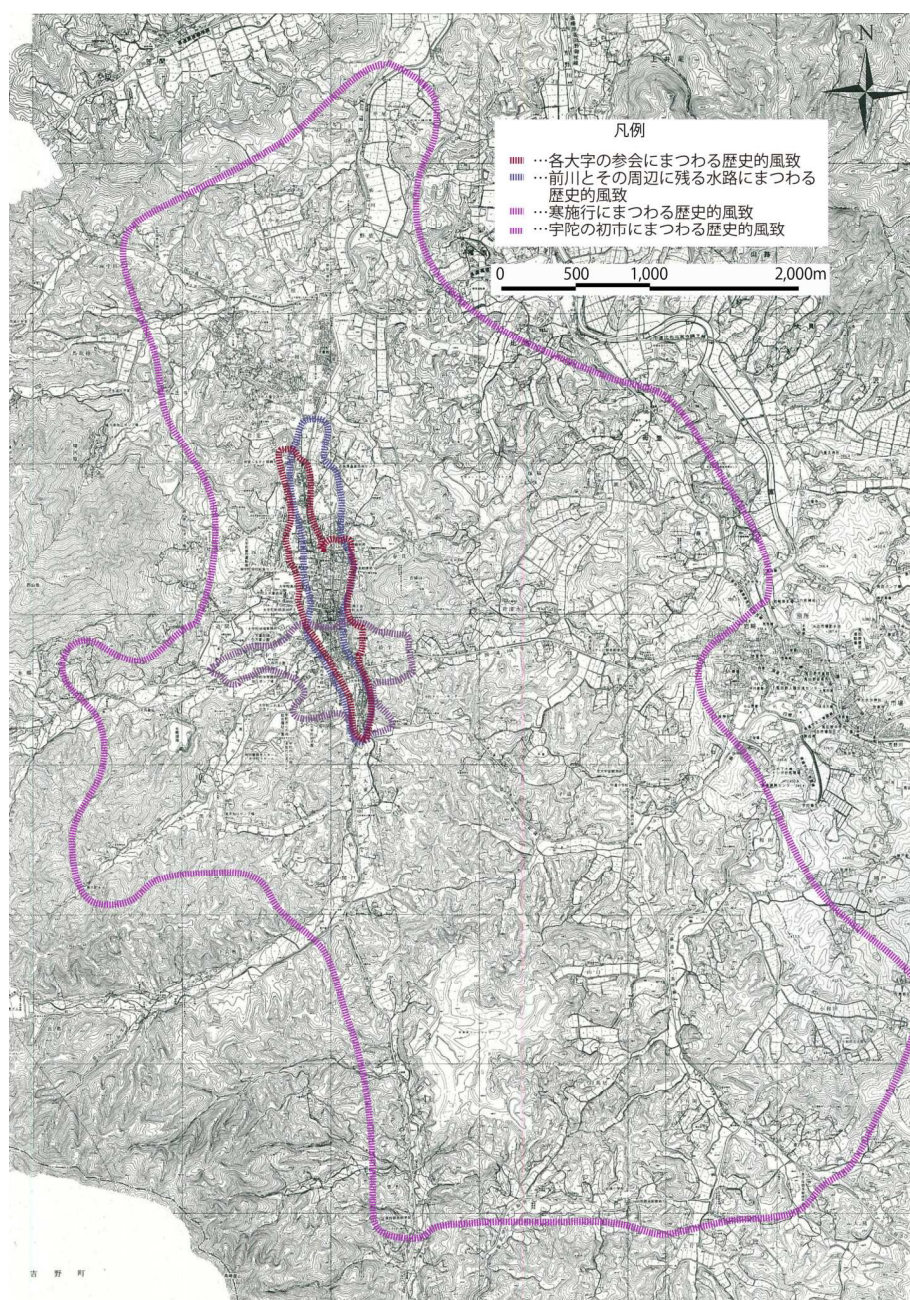
宇陀松山の吉兆



出店は夜8時頃まで営業する

おわりに

中近世から近代にかけての歴史的建造物が集積した町並みのなかにおいて、火伏・火除けにまつわる伝統行事や、家の前（あるいは背後）を流れる水路を取り入れた暮らしが今も続いている。複数の大字が共同でまもる神社の活動や、商売繁盛への願いを込めた活動など、多くの人々が互いの暮らしに関りながら、適切な距離感を保つ生き方が建造物とともに受け継がれている。これら一連の活動と建造物が一体となり、宇陀松山の歴史的風致を形成している。



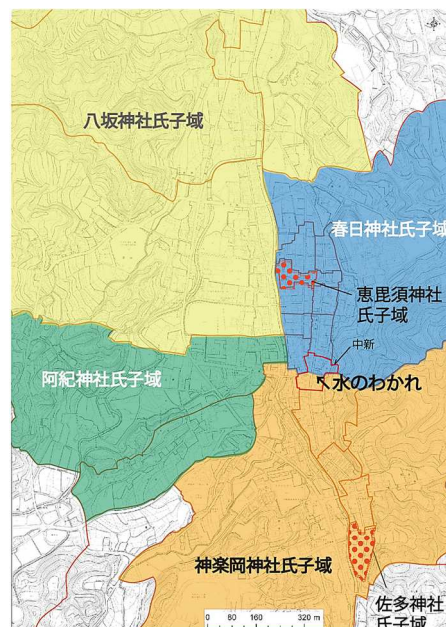
宇陀松山の商いゆかりの歴史的風致

コラム 10 水のわかれと氏子域

松山地区内の前川は、^{なかしん}中新の中央で上町通りと下町通りに分岐する。まちの人たちはこの場所を「水のわかれ」と呼び、水の流れに従い場所を表現するため、南側（上流）を「上」、北側（下流）を「下」と言う。

旧松山町では水のわかれから上^{かみ}が神楽岡神社の氏子域^{しも}、下^{かみ}が春日神社の氏子域となり、それぞれ複数の大字で協力しながら、祭礼行事を行う。春日神社は祭神の数が多いため、行事の数が多い。

大字の中央に「水のわかれ」がある中新に限り、住民は同じ大字でありながら南北にわかれて祭礼等に参加している。



旧松山町周辺の氏子域

神楽岡神社の祭礼行事

神楽岡神社は、古城山の山裾に鎮座する。由緒等は定かでなく、『大和宇陀御用中諸事覚』（元禄8年（1695））や近世の絵図には「大將軍」とあるが、明治43年（1910）に神楽岡神社の名称を刻んだ石柱があることから、このときまでに神社の名称が変わった。

年間行事は右表の通りで夏祭り、秋祭り、年越しの3つで、各大字から選出された役員が、責任役員（6人の役員をまとめる氏子総代、1年任期で順番に担当する）を中心に運営している。

神楽岡神社の祭礼行事一覧		
名称	日時	内容
夏祭り 宵宮	7/15 19時～	
夏祭り	7/16 10時～	祭典
秋祭り 宵宮	10/15 19時～	
秋祭り	10/16 10時～	祭典（太鼓台巡行は直近の日曜日）
年越し	12/31 21時～	参道ライトアップ
【氏子】拾生内垣内、万六、出新、拾生町、上新、拾生川原町		



昭和初期の秋祭りの様子



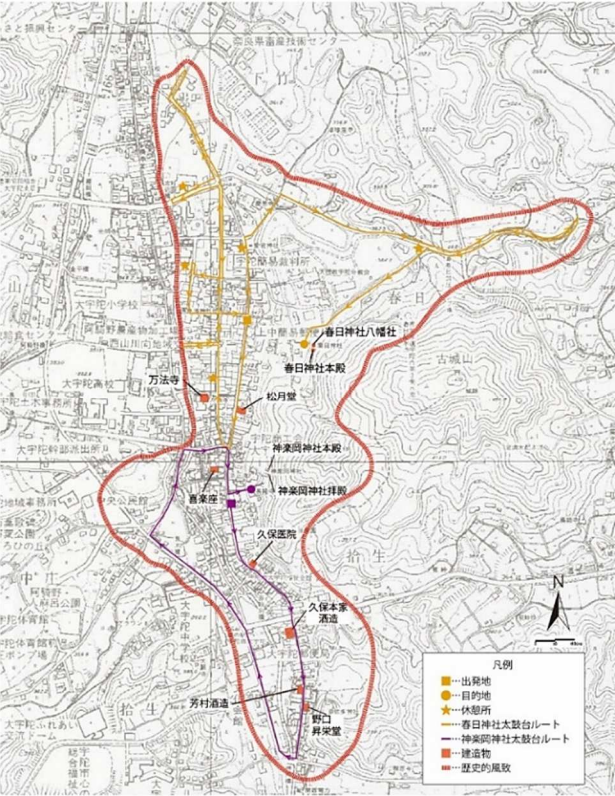
神楽岡神社 秋の祭典

春日神社の祭礼行事

本町通りを東進し、春日門跡から坂道を上ると杉の大木に囲まれた高台に至る。春日神社の境内がそこにあり、境内社に八幡神社、織田神社、三社、阿弥陀堂、伊太木曾神社がある。

各大字より氏子総代を1名出し、氏子総代会を組織し、祭典等の運営にあたる。氏子総代会の会長は1年の任期で、会長が在籍する大字が年番として事務局と共に運営を支え、年番はとんどのときに交代する。

年間の行事は右表の通り、節分祭、夏祭り、秋祭りにそれぞれ祭典とお百灯を行う。お百灯に使う燭台は大字ごとに用意するが、最も古いもので昭和9年（1934）の墨書がある。少なくともそのころから続いている行事であることが推測される。



神楽岡神社・春日神社太鼓台 巡行ルート

春日神社の祭礼行事一覧		
名称	日時	内容
とんど	1/14 に近い日曜日	当番交代
節分祭	2/3 10時～ 17時～	祭典 お百灯
祈年祭	2/20	祭典
初午	3/10 10時～	祭典
夏祭り	7/8 10時～ 17時～	祭典、 お百灯
夏越	8月末の日曜日	境内地整備
八幡祭	9/15 10時～	祭典
秋祭り	10/8 10時～ 17時～	祭典、 お百灯
新嘗祭	11/26 10時～	祭典
年越し	12/31 21時～	

【氏子】下出口、下中、春日旧、下茶、春日新、上茶、上本、上、中新、小出口（下本、上中）



春日神社とんど



春日神社節分お百灯



燭台の墨書



春日神社太鼓台巡行



御供まき風景